42498
教科書文庫
4
810
44-1941
Z0000
67986

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

資料室

教科書文庫
4
810
44-1941
2000067986

4C
810
昭16

文部省檢定濟
昭和十六年九月四日　實業學校國語科教科書

實業學校

國文新選

新制版

垣内松三
西尾實　編

株式會社　文學社

広島大学図書
2000067986

広島大学
教
67986
図書

一　國民教育の要求に基づき、國語教育の使命に鑑みて、各時代に於ける最もすぐれた人と文とを網羅蒐集しようと力めました。

二　教材はそれぞれの形質はもとより學習の方法をも考慮して選擇しました。

三　教材は縱に學年を貫ぬき横に學期を連ねて發展的・體系的に排列しました

目次　卷三

一　簡素の美……島崎藤村……六
二　三つ星……野尻抱影……三
三　神津牧場……大島亮吉……一七
四　みとり日記……小林一茶……三
五　閑古鳥……三木露風……二九
六　琴……土岐善麿……三一
七　燈火……佐佐木信綱……三六
八　玉勝間鈔……本居宣長……四二
九　病床の東郷元帥……西川義方……四九
一〇　短歌鈔……良寛・平賀元齡……五九

一一　感想五題……伊原青々園……六三
一二　旅行雜談……小泉信三……六七
一三　印度洋……吉江喬松……七三
一四　平語を聽く……大槻磐溪……八四
一五　小枝の笛……（平家物語）……八六
一六　佐藤嗣信の最期……（平家物語）……九〇
一七　乃木大將の殉死……德富蘇峯……九五
一八　暴風……島木赤彥……一〇二
一九　非凡なる凡人……國木田獨歩……一〇六
二〇　樅の林……內村鑑三……一二五
二一　時雨……沼波瓊音……一三九
二二　俳句鈔……正岡子規……一四六

二三　吉野の秋……谷崎潤一郎……一四八
二四　火の管理者……柳田國男……一五七
二五　廚子王……森　鷗外……一六一
二八　妹へ……吉田松陰……一八八
二七　出　廬……土井晩翠……一九二
二八　狐　塚……（續狂言記）……一九七
二九　日本一……新村　出……二〇八
三〇　繪　馬……饗庭篁村……二一〇
三一　仁　王……夏目漱石……二一七
三二　夜叉王……岡本綺堂……二二二
三三　科學・常識・迷信……丘　淺次郎……二三四
三四　フォード主義……大山卯次郎……二四〇

三五　國民的特性……藤原銀次郎……二四八
三六　人臣の道……北畠親房……二五二
三七　風土と國民性……和辻哲郎……二五九

島崎藤村
名は春樹　文學者　明治五年生

隅田川
荒川の下流を稱す　東京の東部を貫ぬき東京灣に注ぐ　河幅の最廣所は二百四十餘米

一　簡素の美

島崎藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗のなかつた私も、漸く岸を離れることが出來るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通ふうちに向ふの河岸まで泳ぎ越すことが出來た。更にまた一夏泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃によくも分らなかつた水瀨の速い遲いもわかつて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと溫いともわかつて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を泳ぎながらに見ることも出來た。板子なしには溺れる外はなかつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。

私は普通の泳ぎ手が行けるところまでは、自分も到達し得た

小諸
長野縣北佐久郡の町

小諸に居た頃
明治三十二年（作者二十八歳）より明治三十九年迄

やうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなかなか容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、らくに浮身の出來る人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。

文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして根氣さへあればそこまで行くことは決して難くないに相違ない。

信州の小諸に居た頃、私は弓をやつたことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫ぬくことはあつても、他の矢は思ひもよらぬ場所へ飛んで行く。射手の心に賴むところもなく、矢の曲直を辨別する力もな

く、さうして幸に當つた矢は、高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で弓術に心得のある老人が、私達の矢場へ來た。その老人が先づ姿勢を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、たとひ的を貫ぬくことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所を行くやうになつた。

これは文章の道にも當嵌めて見ることが出來る。たゞ好い文章をのみ作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふものは、どうしても先づ自己から正してかゝらねばならない。

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鍬をかついで行つて土を耕して見た。

私は先づ荒れた畠の地面を掘返すことから始めた。土を碎いた。小石を擇り分けた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植易いものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、サクをかけに行つた。馬鈴薯の花が白く盛りな頃に行つて、試みに土の中をさぐつて見ると、はや圓いのがいくつもいくつも根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。畠の中には嫩く育つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓にのぼるやうになつた。それから、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて非

常に嚴肅な念に打たれたことを、今でもよく思ひ出すことが出來る。

われわれが文章の手本とすべきものは何程われわれの周圍にあつても、それを悟らないことには仕方がない。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの初である。

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界隈を漕廻つたことがある。最初のうちは無闇に手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある艪を前へ押し手許に引きして骨折つて見た。それでも、舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力で、ゆつくりと艪を押すことが出來るやうになつた。向ふから大

淺草の新片町
東京市淺草區の東南部（現在同區柳橋に含まる）

新片町に住んだ頃
明治四十年（三十六歳）より大正二年迄

淺草橋
神田川（隅田川に注ぐ）に架す

兩國橋
隅田川に架す

きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突しないやうに、さう思つて漕いで行く樂しみなどもそれから起つて來た。その後船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある、簡素の美がある。

文章の道にも、むやみに筆を弄することが決して自己の眞の表白とはならない。眞に好い文章には、眞に好い結晶の力がある。（飯倉だより）

すぐれた人の書いた好い文章は、それを默讀翫味するばかりでなく、時には心ゆくばかり聲をあげて讀んでみたい。文章を音讀することは、愛なくては叶はぬことだ。

（島崎藤村）

野尻抱影
名は正英　文學者　天文研究家　明治十八年生

一つ星　北極星
二つ星　双子座にあり
四つ星　鳥座にあり
六つ星　すばる
七つ星　北斗
オリオン星座　赤道上にある星座

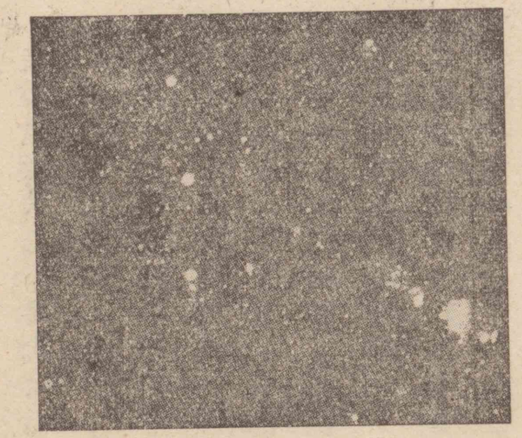
二　三つ星

野尻抱影

目だつた星の名をその數で呼ぶことは、單純でそして自然でもある。從つて、かういふ中には、星の和名の最も初期のものが多いことも考へられる。それらを代表するものは、一つ星・二つ星・三つ星・四つ星・六つ星・七つ星等であるが、就中殆ど全國的に行はれ、最も人口に熟してゐる名は、何といつてもオリオン星座の三つ星である。

紋章にも三つ星があつて、これは三點が三角形をなすやうに配置されてゐる。しかし、空の三つ星は直線をなして並んでゐるのであつて、形は單純さが持ち得る莊重の極致であると私は思ふ。而も、三つながら同じ光度の星で、正しい間隔を持し、その丈けも長短に過ぎず、そして、東から昇る時には縱一文字に立つ

て天頂を指し、西に沈む時には横一文字となつて一氣に隱れてしまふのである。

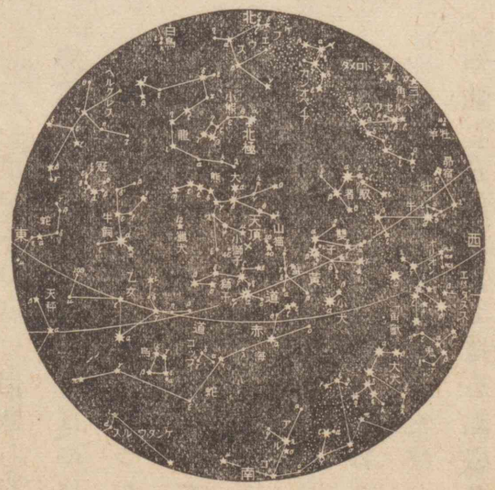


三つ星

三つ星がその名に相應した悠揚たる貫祿を示すのは、やはり縱の時にある。横になつた時には、一文字がやゝ詰まつて、いかつい印象になるやうである。しかし、いづれにもあれ、あの三つ星が並んで瞬いてゐるのを見上げてゐると、天文學の知識などは消えて、何か幽微な默示といふやうなものが感ぜられる。殊に、早春の黄昏、ほのかに輝き出た三つ星のたゝずまひには、時に、わけも知らぬ涙をさ

へ誘はれるものがある。さういふ時に私は原始人の眼と心とに歸り得ぬことを悲しむのである。

三つ星は久しい時代にわたり、海の果、山の端に昇つては漁撈や播種收穫の季節を教へて、漁戸・農家の人々から「三つ星さま」「三つぼしさん」として崇められて來た。からすき・さかます・かせ星等のこれの異名は、星象の形容としての巧みさはある。しかし、潮風に、畑の日光に焦けた額を下げさせるには、何よりもまづ「三つ星さま」でなければならない。靜岡地方には「三つ神さん」の名



四月の星座

があると言ふ。明かに神格を附したものである。

次に三つ星により行事の季節を知り、或は時刻を判ずる例を二三擧げてみる。

三つ神さまが十二月頃に朝見える時は麥蒔によし

三つ星まつ晝粉八合

まつ晝とは眞南のこと。曉けがた三つ星が眞南に來る時季に蕎麥を蒔けば、一升の種から八合の粉がとれるので此の頃を種蒔の時とする意味であるといふ。

三つ星さまの入りあひと夜の引明が一しよの時は暖かくなる。

三つ星さまは土用の一郎に一つ見え、二郎に二つ見え、三郎には三つ見える。

これは、瀬戸内海の漁師の間で言はれる。私はふと、今も船玉

底筒之男神・中筒之男神・上筒之男神　住吉神社の祭神三座　海上守護の靈神

神功皇后　仲哀天皇の后御名は息氣長足姫　應神天皇六十九年崩御、御年百

新羅　朝鮮古國の一（六〇四―一五九五）始祖朴赫居世

島木赤彦　本名久保田俊彦　歌人　大正十五年歿、年五十一

として祀られる神が、住吉の三神――底筒之男神・中筒之男神・上筒之男神であり、海底から次ぎ次ぎに現れ出でたといふ傳説を想ひ合はせた。そして又神功皇后が新羅を征伐し給うた時に、これら三神が現れて軍の魁をしたと傳へられるのも、海から昇る三つ星のことではなかつたらうかと考へてみたのである。若しさうであつたとすれば、日本はオリオン座に就き、すばらしい傳説を持つことになる。（日本の星）

三つの星ひむがし空にのぼるなべ夜頃おそ
みと稲積みかへる　島木赤彦

大島亮吉　登山家　昭和三年歿、年三十

神津牧場　物見山牧場ともいふ　群馬・長野縣境の山上にあり、海拔一〇〇〇米―一三〇〇米

輕井澤　長野縣北佐久郡の町　避暑地

雨宮新田　輕井澤町の南にあり

和美峠　群馬・長野縣境にあり、物

三　神津牧場

大島亮吉

輕井澤高原から雨宮新田へ出て、和美峠を越えて上州側へ下り、初鳥谷から高立の小さい谷あひへ入つて、澤沿ひの路を少しゆき一本岩からのぼると、すぐ神津牧場に出る。

牧場のあたりは、到るところ草や笹の短い、ひろびろとした、眺望のいい、あかるい山頂ばかりである。また谷も、淺く、あかるく、落葉松や白樺の林や、古びた杉の匂がしめやかに漂ふ、このましいものが多い。なかでも物見山・寄石山・八風山などの、早春の日の山上展望は殊に私をよろこばせる。東京から持つて來た佛蘭西パンと、牧場でつくつたバタとを入れた、かるいリュックサックを背に、これらの項・尾根・峠・山腹・山窪・谷あひに、うす青い徑を求めたり、笹原のなか、雪のうへ、流のほとり、林のなかと、さまよひ

見山の北方に當る　海拔九八四米

初鳥谷　群馬縣北甘樂郡に在り

高立　初鳥谷の西

一本岩　同北甘樂郡に在る岩峯

物見山　海拔一三一五米

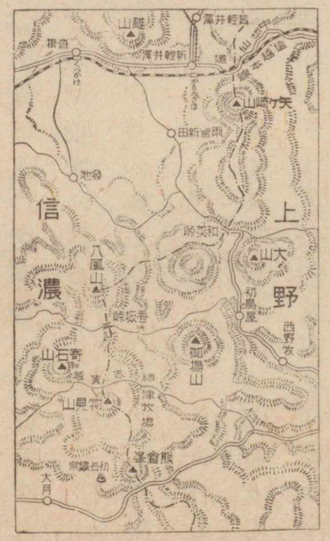
寄石山　長野縣に屬す　海拔一三七五米

八風山　群馬・長野縣境にあり

歩くのは何ともいへずいい。

また、ぼんやりと空想でもしてゐたり、本でも拾ひ讀んだりするのには、牧場小屋の後と、牧場小屋を少し下へ降りた、牧場のぐるりのうす青い落葉松の林のある斜面が非常にいい。日の光は滋養物のやうに身にあたゝかく、風もあたらず、ただ遠い川瀨のひゞきだけが耳にやはらかだ。

それから私の好きなのは、寄石山の山腹にある笹原のあたりの窪みで、牧場小屋からそこへ行くにはかなりに遠いにしても、うらゝかな、あたゝかい日の午前などには、どうしても私は行き度くなつてその笹の寢椅子へねころびに出掛けて

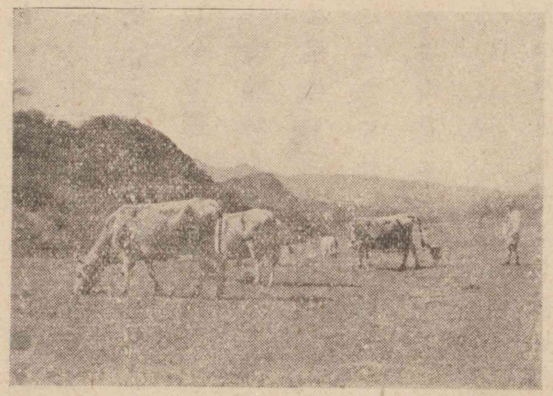


海拔一三三四米　志賀越え　物見山の北にあり

初谷鑛泉　物見山の南西　長野縣に屬す

しまふ。笹原のなかにとつぷりと身をうづめて、笹原をわたる風の音を耳に、眼の下の志賀の谷あひにのぼる白いけむりを見る。

志賀越えの峠道から、牧場通ひの馬の鈴の音や、馬子の唄聲が風のやうに斜面をのぼつて來る。



神津牧場

谷で、小さくて可愛らしいのは、初谷鑛泉の谷あひだ。牧場から物見山の尾根を越せば、もうこの谷だ。草ぶかい小徑を下りて、さやかな落葉松のなかをすぎると、初谷の鑛泉宿がたゞ一軒つゝましやかに立つてゐて、いつもうす青い、湯をわかす煙を屋根に這はせてゐる。こんな谷あひの、

田舍の人々しか行かない、春には蕗味噌と裏山からとつてきたうす青い筍とを食べさせて吳れる外には、なんの御馳走もないといふやうな、そんな鑛泉宿のもつ清新なたのしさ、やすらかさについては、こんな所へ一度でも泊つた人でなければ理解出來ないことであらう。私はそこで、本をよんだり、湯槽のけむりのなかで、雲のいろをみて、山の風をきいたりする。

牧場から、笹原ばかりの尾根傳ひに、日歸りの散歩をするのには、私はいつも志賀越えの峠道をゆるゆるとのぼつて、峠のうへにつき、それから傾斜のゆるい尾根ともおもへない位の笹原をかさかさと歩いてゆく。西風の吹かない早春の頃、この邊を歩くのは、全く丁度いゝ位のあたゝかさだ。わかい午前の日のかがやきと匂やかな微風は、私を清らかにめぐり、眼を向けるどこにも、はるかなはるかな春の山々のうつとりとした影がよこた

北アルプス
乘鞍火山帶・
槍ヶ嶽山脈・
常念・立山・後
立山各山脈を
包括し、海拔
二五〇〇米—
三〇〇〇米前
後

香坂峠
八風・物見二
山の中間　海
拔一一六五米

はる。さすがにこんな日には、北アルプスの雪もするどくは光らない。まるで夢をみてゐるやうなおだやかさだ。私もまたうつとりした心持で香坂峠から八風山の頂をすぎて、もつと先までも知らずに行つてしまふ。そこから谷の村々の、青紫の木立の影をめざして、尾根を下りて來る。草の斜面から、林・藪・小川・畑・百姓家とだんだん村のなかへ近づいて來る。そしてこれら信濃の山ふもとの春さきの、麥と落葉松と水車の村々を歩みぬけては、志賀の谷あひをのぼつて、また山上の牧場へと、しづかな夕暮のいろの漂ふなかをかへつて來る。そして峠のうへでふりかへれば、けふも事なく暮れた平和な村々が、遠ざかつてゆく私を山裾や谷あひで見送つてゐるやうだ。そして私は、存分歩きまはつた一日の夕の、快いのびのびとした輕い心持で、新しい搾りたての牛乳をしみじみと味はふのであつた。（山）

小林一茶
通稱彌太郎
俳人　俳諧寺と號す　文政十年（一八二七）歿、年六十五
六日
享和元年（一四六一）五月
一茶時に年三十九

四　みとり日記

小林一茶

六日。天晴れたれば、臥してばかりも退屈にや思しめさんと、夜着うち疊みて寄り懸らせ申したるに、來し方の物語など始め給ひけり。「抑、汝は三歳の時母に後れ、やゝ長くるにつけても、後の母との中睦まじからず。爲に日々夜々魂を痛め、心の安き時とてはなかりき。ふと思ひけるやうは、一緒にありなばいつまでもかくありなん。一たび故郷を離れたらんには、自然親墓はしき事もやあらんと、十四歳といふ春、はるばる江戸へとは赴かせたりき。あはれ餘所の親は、今三とせ四とせ過ぎたらんには家を任せ、汝にも安堵せさせ、我等も行末を樂しむべきに、年はもゆかぬ痩骨に荒奉公せさせしをつれなき親とも思ひしならん。皆これ宿世の因緣と諦めよや。我も一たびは江戸に立越えて

一茶筆蹟
はつ雪や雪駄ならして善光寺　一茶

五逆罪
佛語　一に父を殺し、二に母を殺し、三に阿羅漢を殺し、四に佛身ふり血を流し五に和合僧を破るをいふ

汝にめぐり逢ひ、相果てんにも汝が手を借らんと思ひしに、この度はるばると歸り來れる汝にかゝる看病を受くるこそ、淺からざる緣なれ。今は往生遂げたりとも何の悔かあらん。」と、はらはらと涙を落し給ふに、我は唯うち伏して物をもえいはず。夏も消えやらぬ富士の雪より厚く、紅の色より深き父の恩を、側に附

一茶筆蹟

添ふこともならで、唯浮かめる雲の如く、束にあるかと思へば西に漂ひて、はや今年にて二十五年にもなりぬ。頭は白き霜を戴くまで親の側を遠ざかりぬること、五逆罪といふともこれに過ぎなんやと、心に伏し拜み、われ涙を落しなば病いよいよ重らせ給ふべしと、顏おし拭ひてうち笑ひ、「さる事、心に思ひ給はで、はや

はや快氣なし給へ。」と藥を進め「やがて健かになり給はば、我も元の彌太郎となり、草刈り土掘りて御心を安んじ參らすべし。今までの體たらく許させ給へ。」と云へば、父は限りなく喜び給ひぬ。

八日晴。田休みなればとて、所緣あるも所緣なきも聞傳へ語り傳へて、訪ひ來る人も多かり。父が好物なりとて、酒もて來る人もあり、蕎麥粉もて來るもあり。父は喜ばしげに首を擡げ、手を合はせて、ほどほどに會釋し給ひぬ。「身後黃金北斗をさゝふとも、如かじ生前一杯の酒」と、唐も大和も人の情等しく、亡き後にて佛事供養美々しく盡くしたりとも、存命のうちの優しき言葉にはまさらじ。今は世降りて、他の一寸の歪は咎めて、おのれが一尺のひがみは見えず、萬づうしろめたき勝にて、我が身不孝なりと思へる人だになし。

うけがたき人と生れてなよ竹のすぐなる道に入るよ

身後云々
白氏文集に「身後金ヲ堆クシテ北斗ヲ挂フトモ、生前一杯ノ酒ニ如カズ」

子一つ
夜の十二時頃

雞の空音
史記孟嘗君傳ニ「昭王、孟嘗君ヲ釋ス、出デテ函谷關ニ至ル、關ノ法雞鳴イテ客ヲ出ス、客ニ雞鳴ヲ爲ス者アリ、雞悉ク鳴ク、是ニ於テ關ヲ開イテ之ヲ出ス」

入日を返す勢
淮南子に「魯陽公韓ト難ヲ構フ、戰酣ニシテ方ニ暮ル、戈ヲ援リテ之ヲ撝ク、日爲

しもがな

この夜は子一つの頃より寢られねば、夜長うおぼして、まだ夜は明けぬか、雞の啼かざるか。」と我に聞き給ふこと三度、四度、七度、九度に及べども、たゞ星あかりのみにして、軒のつまの樅・楓の樹かげ、其處に彼處に暗く、梟の夜更をうたふばかりなり。あはれ雞の空音をつくりて關の戸を開きしためしはあれど、火を袋に入るる幻術は知らず、入日を返す勢はたあらねば、たゞ燈火をかかげ寢顏を守りて、空しく天明を待つばかりなり。

十日晴。頻りに梨の實をたうべたしとむづかり給へば、このあたりの所緣あるも無きも、親しき限り、富みたる家、心當りある門、聞盡くし尋ね探し盡くすといへども、一つだに貯へたる人なく、夏さへ寂しき山里なり。今日はわけて宣ふなれば、善光寺へ往きてみんと、曉に支度して門を出でけるに、皐月の空ほのぼの

ニ反ルコト三舍」

卯の下刻　今の午前七時半頃

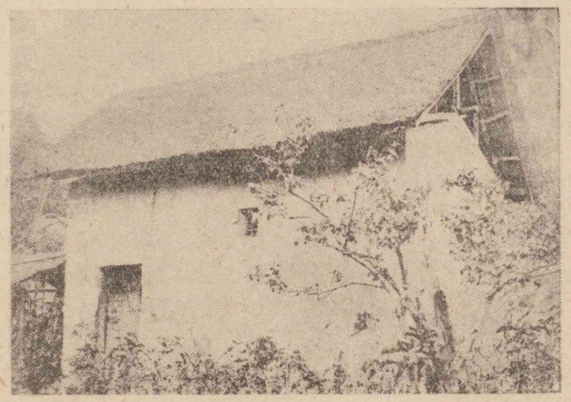
牟禮　上水内郡中郷村牟禮

辰の刻　今の午前八時頃

雪中に筍を掘り　呉志に「孟宗ノ母筍ヲ嗜ム冬節マサニ至ラントシテ筍尚ホ未タ生ゼズ　宗竹林ニ入リテ哀歎ス筍之ガ爲ニ出デ、以テ母ニ供ス」

氷上に魚を求め　晋書ニ「王祥性至孝ナリ繼母朱子悉ナラズ、而シテ祥愈〻恭謹ナリ　父母疾メバ帶ヲ解カズ湯藥必ズ親ラ嘗ム　母嘗テ生魚ヲ欲ス、時ニ天寒ク水凍ル、將ニ氷ヲ割リ之ヲ求メントス、氷忽チ自ラ解ケ雙鯉躍リ出グ」

晴れて、白雪はた山にあり。青葉隱れの花は春を殘して、種蒔の山入など懷かしく、時鳥の一聲もこよなく時めく空なるに、あやしく心の晴れぬ曙なりけり。卯の下刻、牟禮といふ驛に至る。今は二十四年の昔、われ江戸へ赴きける日、父の見送り給ひし里なれば、川の音、阪の影も仄かに心覺えありて何となく嬉しけれど、人は知らぬ顏のみとなりけり。急ぎければ、辰の刻ばかりに善光寺に着く。醫師の家はまだ朝飯頃と見えて主人の聲も聞えければ、具さに病のさまを語りけるに、やがてから樫の匙取りつゝ、御藥合はせて給ひたり。抑、この地は御佛の淨土にしあれば、肆は軒をあらそひ、幌は風に飜り、入る人出づる人、國々よりはるばる歩を運びて、未來の成佛を願はぬ人なし。おのれは今日父の命を受けて、御藥づかひ、はた梨さがしに來つるなれば、この役濟まざらんうちはと、御佛も遙拜して、天を翔り地を潛りてなりとも梨一つ得まほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店を足を空にして驅けめぐるに、悲しきはさらに片割一つありといふ人もなし。昔雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、皇天我を捨て給ふかや。佛神我を見限り給ふかや。一世ばかりの不孝にはあらじ。父はさぞ梨を待ち居給はん、この儘に歸りて父を何とか慰めんと思へば、胸塞がりて、落つる涙は大道を潤すに、往來の人の狂者と笑はんも恥づかしく、暫く手を組み首をうなだれて、心をぞ靜めける。無き物はいかにせん、唯一足も早く戻り



一茶臨終の家

て藥を進め奉らんと、手を空しうして吉田といふ里に來つるに、樹立の山鴉三つ四つ、我を見ては聲をたつるに、何となく父の身の上の心にかゝり、息もつきあへず足を早むる程に、日影は八つ時といふ頃宿に戻る。父はいつもより顏うるはしく笑みを含み給ふに、梨の事を語らば又もや氣を落し給はん、とやせんかくやせんとためらふに、父の問ひ聞き給へば、ありのまゝを答へ、高田に往きて求め來り參らすべしと、白雲のよすがも知らぬ根無し言を申して父を宥め奉りぬるは、いと本意なき夕なりけり。

（みとり日記）

吉田　元は上水内郡吉田村　今は長野市の一部

八つ時　今の午後二時頃

高田　今の新潟縣高田市　柏原より約八十粁

みとり日記　又「父終焉日記」ともよばれ、父彌五兵衛の終焉に侍せし作者の手記

三木露風　名は操　詩人　明治二十二年生

五　閑古鳥

三木露風

日の光白く、
微風そよぎ、
六月の野は靜かなり。

閑古鳥、啼き初め、
その聲きよらかに、
空に谺す。

このもしき閑古鳥よ、

なれの聲を聽けば、
わが心樂しむ。

われ、昔、少年なりし日、
林に入りて、閑古鳥を聽き、
初夏の若葉と共に、汝の聲を愛したりき。

今も聽く、汝の聲を——
稍白く、曇りたる空のもと、
靜かなるわが家に。
庭に咲く花の種々、

われは、朝に夕に、そを愛し、
神の御惠の内に活く。

微風吹く音のするに、
われ目をあげて見れば、
小鳥鳴く林の若葉、搖らげり。

（昭和詩選）

土岐善麿
號は哀果 歌人 明治十八年生

六 琴

土岐善麿

最近、琴の値段におびたゞしい等差のあることを知り、どこがさうも違ふのかとその道の人に聞いてみたところが、かういふ話であつた。

およそ附屬品・裝飾品など、いくらでも贅澤の限りを盡くせることは當然であるが、特にあの桐材が本質的に標準になるといふのである。卽ち、裝飾的な點において、木理の美しさが問題になるのは誰にでもわかるが、それよりも、音律の上からいふと、雷火にかゝつて適度にやけた立木の桐を材料としたものが、もつとも優れた音を出すといふ。

それはどういふわけであらうか。これについては、その人にもよく理由は判らない。おそらく、植物學的に、或は物理學的に、

さういふ燒けた桐材と音響との關係のあることが、說明し得られるのであらう。更に學者にきいてみれば、すぐはつきりすることかも知れないのであるが、察するところ、それには、かういふこともありはしないか。桐といふものは極めて成長の早いもので、昔から、女の兒が生れると、庭に桐の苗を植ゑておけば、その兒が嫁にゆく頃はその桐で簞笥が造れると言はれてゐる位で、生命力といふか發育力といふか、よほど潑剌とした精力的なものを持つてゐることは確である。すくすくと延びてゆくある瞬間、率然として雷火にかゝつた桐は、今が今までいきいきと青空に向つて發展し、發散して行きつゝあつた生命力を、一刹那に斷たれる。その途端、外面的に延びてゆくいのちを內面的に壓縮し、同時に擴充して、植物組織の中に突然大きな變化を起す。やはらかな、ナイヴなものの受ける意外な衝擊と緊縮がその桐

材を琴として最も適したものにするのではあるまいか。恰も日本刀を作るのに、鍛へ上げた鐵に土をぬつて炭火で赤々と燒き、適度に燒けたところを、率然、木舟にたゝへた清水のなかへ突込むと、一瞬、反身の名刀に變る。この「燒入れ」の狀態に相應するのが、雷火の桐の生命にも起るのではないであらうか。

然し、こゝに最も重要なことは、その桐材の雷火にかゝる「程度」でなければならない。その衝撃が內面的に、全體に遍滿することがまづ必要なのであらう。部分的に影響を受けたのでは、琴としての音響にもむらの生ずることはいふまでもないであらう。さうかといつて、程度が過ぎればたちまち燒亡して一塊の灰となつてしまふ。雷火にかゝる桐材——それが、さう屢あるわけもなく、まして最も適度に燒けるといふことは、自然的にはなかなか望み難い。さういふものを使つた琴が稀であり、從つ

て高價なものになるのは當然といつていい。

かういふことは、琴、桐材ばかりではないやうである。「艱難汝を玉にす」とか、「盤根錯節に遇はずんば何ぞ以て利器を別たん」とかいふが、それも過不及のない程度にゆかないと、却つてその試煉を受けた人が卑屈なものとなつたり、尊大なものとなつたりしないとも限らない。艱難があまりに甚だしければ、運命をのろつて死を選ぶのもあらう。盤根錯節があまりにひどいと、利器を別つ餘裕もなくなる。それを乘切るためには、生理的にも心理的にも、よほどの抵抗力と覺悟が必要である。丁度雷火にかゝつて、それに堪へて、琴として更生し得る桐材の「死」を超え得た力が、すぐれた名手を迎へたとき、更にたとしへなき音響となるのと同じではあるまいか。（紫煙身邊記）

佐佐木信綱　文學博士　歌人　明治五年・生

松阪　三重縣飯南郡今の松阪市

本居舜庵　名は宣長　鈴の屋と號す　國學者　享和元年（二四六一）歿、年七十二

岡部先生　賀茂眞淵　縣居と號す　國學者　明和六年（二四二九）歿、年七十三

七燈火

佐佐木信綱

時は夏の半ば「いやとこせ」とのどやかに唄ひ連れゆく御伊勢參りの群も春先程には騷がしからぬ、伊勢松阪なる日野町の西側、古本の老舗柏屋兵助の店先に「御免」と言つて腰をかけたのは本居舜庵といふ魚町の年若い小兒科醫であつた。醫師を業とはしてゐるものの、名は宣長といつて、皇國學の書やら、漢籍やらを常に買ふ、この店の常華客であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手をうつて「あゝ、殘念なことをしなされた。あなたがよく名前を言つておいでになる江戸の岡部先生が、今の先、若いお弟子と供を連れてお立寄りになつたに。」と言ふ。舜庵はいつものゆつくりした調子とは違つて「先生がどうして此處へ。」とあわたゞしく問ふ。

田安樣　田安宗武　德川吉宗の第二子　國學を好み、歌たよくす　明和八年（二四三一）歿　年五十七

垣鼻村　現在は松阪市垣鼻

二見が浦　三重縣度會郡日和見山　三重縣志摩郡鳥羽町の西北にある丘　名勝

主人は「何でも田安樣の御用で、山城から大和とお廻りになつて、歸途に參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお着きになつたところ、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留。今朝はもうお宜しいので、御出立の途中、何か古い本は無いかと、暫くお休みになつて、參宮にお出かけになりました。」舜庵「それは殘念なことである。どうかしてお目にかゝりたいが。」「跡を追うてお出でなされませ、追附けませう。」と主人が言ふので、舜庵は一行の樣子を大急ぎで聽取つて跡を追うた。

跡を追うて、松阪の市街を離れ、次の宿なる垣鼻村の先まで行つたが、どうもそれらしい人に追ひつき得なかつたので、すごすご我が家に戻つて來た。

數日の後、岡部衞士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松阪の本陣新上屋に宿つた。

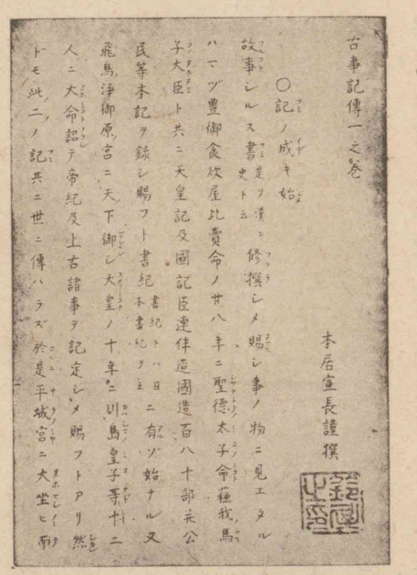
村田春郷
歌人　明和五年（一七四二）歿、年三十
春海
錦織齋又琴後翁と號し、歌文を能くす
文化八年（一八四七一）歿、年六十六
冠辭考
枕詞を集め、五十音順に配列して、各箇に註釋說明を加へたるもの
萬葉考
萬葉集の卷一・卷二・卷三・卷十一・卷十二・卷十四の六卷を註したるもの
有德公
八代將軍德川吉宗の諡
契沖
大阪の僧　圓珠庵と號す
國學者　元祿十四年（一七〇一）寂、年六十二

「若し歸途に又泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい。」と賴んでおいた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得たので、取るものも取敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の春海は十八の若盛りで、早くも別室にくつろいでゐた。衞士は仄暗い行燈の下に於て舜庵を引見した。

賀茂眞淵

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衞士は、當年六十七歲、その大著なる冠辭考・萬葉考なども既に成り、將軍有德公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、其の名嘖々たる一世の老大家である。年老いたれど頰ゆたかな此の老學者に相對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を溫和な性

格に包んでゐる三十四歲の壯年、而も彼は二十三歲の時京都に遊學して醫學を學び、二十八歲にして松阪に歸つて醫を業としてゐたが、京都ではたゞ醫術を學んだのみでなく、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。


古事記傳一之卷
○記ノ成キ始
故事レルス書ヲ史トニ修撰シメ賜レ事ノ物ニ見エタル
ハマヅ豐御食炊屋比賣命ノ廿八年ニ聖德太子命薨我馬
子大臣ト共ニ天皇記及國記臣連伴造國造百八十部並公
民等本記ヲ錄シ賜フト書紀ニ書紀トハ日ニ有ゾ始ナル又
飛鳥淨御原宮ニ天下御シ大皇ノ十年ニ川島皇子等十二
人ニ大命記テ帝紀及上古諸事ヲ記定シメ賜フトアリ然
トモ此ノ記共ニ世ニ傳ハラズ於是平城宮ニ大安ヒ
本居宣長謹撰

宣長筆古事記傳

舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いて、その計畫を語つた。老學者は若人の言を靜かに聽いて、懇ろにその意見を語つた。「我も固より神典を解きあきらめんとの志であつたが、それにはまづ漢意を淸く離れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。

本居宣長自畫自筆像

古の意を得んには、古の詞を得た上でなければならぬ。古の詞を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それ故自分は專ら萬葉を明らめてゐた間に、かくも年老いて殘の齡いくばくも無くなつてしまつた。御身は年盛でゆくさきが長いから、怠らず勉めさへすれば、必ず成し遂げられるであらう。併し、世の學に志す者はとかく低いところを經ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。かくては低い處をさへ得ることが出來ぬのである。此の旨を忘れず、心にしめてまづ低いところをよく固めて、さて高い處に登るがよい。」と諭した。

夏の夜は早くも更けて、家々の門の皆鎖され果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、闇夜の道のいづこを踏むとも覺えず、中町の通りを西に折れ、魚町の東側なる我が家の潛戸を這入つた。隣家たる桶屋の主人は律義者で、いつも遲

村田傳藏　眞淵の門人　坂大學の通稱

寶曆十三年　後櫻町天皇の御代（二四二三）

くまで夜なべをしてゐる。今夜もとんとんと桶の箍を入れてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には何の音も響かなかつた。

舜庵はその後江戸に便りを求め、その翌年の正月、村田傳藏が中にはいつて、名簿を捧げ、うけひごとをしるして、縣居の門人錄に名を列ねる一人となつた。爾來松阪と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、此は答へた。門人とはいへ、その相會うたことは僅かに一度、唯一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を距る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯南郡松阪中町なる新上屋の行燈の光は、かく相語つた老學者と若人とを照らした。而もその仄暗い燈火は、わが國文學史の上に不滅の光を放つてゐるのである。（賀茂眞淵と本居宣長）

本居宣長
前課參照

八　玉勝間鈔

本居宣長

近き世學問の道開けて、大かた萬づのとりまかなひ、さとく、賢くなりぬるから、とりどりに新なる說を出す人多く、その說よろしければ世にもてはやさるるによりて、なべての學者、いまだよくも整はぬほどより、われ劣らじと世に異なる珍しき說を出して人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。その中には、隨分によろしきことも稀には出でくめれど、大方いまだしき學者の、心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらむ、勝たむの心にて、かろがろしく、前後をもよく考へ合はせず、思ひよれる儘に打出づる故に、多くはなかなかなるいみじき僻事のみなり。

すべて新なる說を出すはいと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よく確なるよりどころをとらへ、いづくまでもゆき通

りて、たがふところなく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時には、うけばりてよしと思ふも、ほど經て後に今一たびよく思へば、なほわろかりけりと、我ながらだに思ひならるる事の多きぞかし。

おのれ古典を解くに、師の說とたがへる事多く、師の說のわろきことあるをばわきまへいふ事も多かるを、いとあるまじき事と思ふ人多かめれど、これ卽ちわが師の心にて、常に教へられしは「後によき考の出できたらむには、必ずしも師の說にたがふとてな憚りそ。」となむ教へられし。こはいとたふとき教にて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。

大かた古を考ふること、さらに一人二人の力もて悉くあきらめつくすべくもあらず。又よき人の說ならむからに、多くの中

には誤もなどかなからむ。必ずわろき事もまじらではえあらず。そのおのが心には、今は古の心悉く明かなり、これをおきてはあるべくもあらずとおもひ定めたることも、おもひの外に又人のことなるよき考も出でくるわざなり。あまたの年を經るまにまに、さきざきの考のうへをなほよく考へきはむるからに、つぎつぎに詳しくなりもて行くわざなれば、師の說なりとて、かならず泥み守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひたぶるに舊きを守るは、學問の道にはいふかひなきわざなり。

又、おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いとも畏くはあれど、それもいはざれば、世の學者その說に惑ひて、長くよきを知る期なし。師の說なりとして、わろきを知りながらいはず、包みかくして、よさまにつくろひをらむは、たゞ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み、古を思ひて、ひたぶるに

道の明かならむことを思ひ、古の意の明かならむことをむねと思ふが故に、私に師を尊むことわりの缺けむことをば、えしも顧みざることあるを、なほわろしと譏らむ人は譏りてよ。そは詮方なし。われは人に譏られじ、よき人にならむとて、道をまげ、古の意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これ卽ちわが師の心なればかへりては師を尊むにもあるべくや。

そはいかにもあれ、吾にしたがひて物學ばむ輩も、わが後に又よき考のいできたらむには、必ずわが說にな泥みそ。わがあしき故をいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明かにせむとなれば、かにもかくにも、道を明かにせむぞ、吾を用ふるには有りける。道を思はで徒らにわれを尊まむは、わが心にあらざるぞかし。

物學ぶともがら、物知り人にあひて物問ふに、ともすればまづ古書の中にもよに難き事として、誰も說き得ぬふしをえり出でて問ふならひなり。難きことをまづ明らめまほしく思ふも學者のなべての心なれども、然らば易き事ども、は皆よく明らめ知れるかと試むれば、いと易き事どもをだに未だえよくもわきまへず。さるものの、さし越えてまづ難きふしを明らめむとするは、いとあぢきなきわざなり。よく聞えたりと思ひて心もとゞめぬことに、思ひの外なる僻心得の多かるものなれば、まづたやすき事を幾度もかへさひ考へ、問ひも明らめて、よく得たらむ後にこそ難きふしをば思ひかくべきわざなれ。

よろづよりも、手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ學問、などする人は、ことに手悪しくては心おとりのせらるるを、それ

何かは苦しからむといふも、一わたりことわりはさることながら、なほあかずうちあはぬ心地ぞするや。

宣長いと拙くて、常に筆とるたびに、いと口惜しういふかひなくおぼゆるを、人の請ふまゝに、面なく短册一ひらなどかき出でて見るにも、我ながらだにいとかたはに見苦しう、かたくななるを、人いかに見るらむと恥づかしく胸痛くて、若かりしほどになどて手習はせざりけむと、いみじうくやしくなむ。

昨日は今日のむかしにて、はかなくのみ過ぎに過ぎゆく世の中をつくづくと思へば、あはれわが世もいくほどぞや。手を折りてかぞふれば、はやみそぢにもあまりにけり。命長くて七十八十生けらむにだに、早くなかばは過ぎぬるよと思へば、まだ世ごもれるやうなる身も、ゆくさきほどなきこゝちのして心ぼそ

玉勝間
十四卷目錄一
卷　本居宣長
の隨筆

くぞおぼゆる。　かくのみはかなく、こゝろなき木・草・鳥・けだものの
のおなじつらに、なにすとしもなくあかし暮しつゝ生けるかぎ
りの世をつくして、いたづらに苔の下に朽ちはてなむはいとく
ちをしく、いふかひなかるべきことと思ふにも、よろづにいたり
すくなくつたなき身にしあれば、何事をし出でてかは世の人に
もかずまへられ、なからむ後の世、朽ちせぬ名をだにとゞめまし
と、いとゞ人に似ぬおろかさへ取りそへてぞ、かなしくこゝろ
憂かりける　さりとて、はた身をえうなきものにはふらかしは
つべきにしもあらず。　かくのみつたなくおろかなるこゝろな
がら、何わざにまれおこたりなく、わざと心に入れてつとめたら
むには、つひにはひとつゆゑづけて、なのめにし出づるふしもな
どかはなからむと、あいなだのみにかゝりてなむ。（玉勝間）

西川義方
侍醫　醫學博
士　明治十七
年生
東郷元帥
元帥海軍大將
侯爵東郷平八
郎　昭和九年
薨、年八十八

九　病床の東郷元帥

西川義方

「東郷元帥病篤し。」昭和九年五月二十七日、あたかも日本海大海戰の記念日にあたつて、突如發表されたこの悲報は、如何ばかり強い衝擊を日本全國民の心に與へたことであらう。しかも、國を擧げての熱烈なる祈願も遂に空しく、同月三十日午前七時、元帥の英靈は永劫に天かけりましたのである。

私は昭和二年から約八年間、元帥が或は膀胱結石痛、或は神經痛、或は氣管支カタル、或は肺炎に罹られた折々、召されて主治醫を佐け、特にこの度御病篤くなられてからは、終始病床に侍して診療申し上げる光榮を擔つた。

始めて診察申し上げた時の事であつた。元帥の仰せられるには、「自分は大正十五年八月初旬から三ケ月の間、自らの常溫・平

脈、並びに呼吸を測定してをる。常溫は攝氏三五・五より三六・二、平脈は五五より六〇、呼吸は一分間一八である。」とのことで、健常時の準據を示された。

この度の喉頭癌の御養生中にも、「今日は體溫が三十六度六分から三十六度七分に昇つた。何故であるか、西川に聞け。」との御言葉があつたさうである。そこで、「これは膀胱結石のためのカタルの熱であるから、長くは續きますまい。」とお答へした。總べてこのやうに、先づ常態を的確に調査しておいて萬一に備へ、少しの變化にも速かにその異常を悟り、善處せられたのである。

かくの如き元帥の細密な注意と、透徹した態度とは、常に必ず他の總べての方面に於て發揮せられ、あの確乎不動の大盤石心を玉成されたものと思はれる。

元帥は常に默々として何事も語られなかつた。この度の病

旗艦三笠
排水量一五三六二噸、速力一八・五節
現在は神奈川縣横須賀軍港自濱陸岸に記念艦として保存されてゐる

が難症の癌腫であるといふことは、元帥御自身も恐らくは半年程前から、すでに感得せられてゐたと察せられる。しかも、元帥は一度も問はれず、醫師も一度も語らず、かくして、恐るべき彼の癌腫は、薄樣紙たゞ一枚を表裏として、元帥と醫師との間に宿りつゞけたのである。

この度の病に罹られてから、脈搏を觸診する毎に、元帥はいつも暫くはその手を下げず、つくづくと見入つてをられた。「いたくも肉が落ちたものだ。」といふ御心持と察せられて、そゞろに瞼の熱くなるを覺えたのであつた。その左の手こそは、皇國の興廢を賭した、あの日本海海戰の折、旗艦三笠艦上に立つて、一文字吉房の御劍をしつかと握りつめられたその手だ。また、その右の手こそは、雙眼鏡をかざして、近づき來るバルチック艦隊を凝視せられたその手だ。これを思ひ、かれを思うて、今回の病狀に

バルチック艦隊司令長官はロヂエストウエンスキー中將旗艦はオスラビヤ

及ぶと、萬感交々至つて、ひたすら神明の加護を祈るのみであつた。

元帥はまた我等の診察申し上げる度毎に、極めて慇懃な挨拶をされた。病頓に篤く、醫師の數も加つた頃には、談話も既に難儀となり、手を合はせて一々感謝の意を表された。

我等醫師の一致した意見で、一月早々から差上げたラヂウムの照射療法によつて、幸に喉頭の癌腫は一時次第に輕快の傾向を示してきた。然るに、三月に入つて氣管支カタルと右側坐骨神經痛とを併發し、漸くにしてその輕癒を見たと思つてゐると、遺憾なことには、また再び膀胱結石痛の發作があり、そのため照射療法は久しく不可能になつた。

かくの如くして御病狀の增進は、如何とも術なく、元帥には重ねて我等の願を容れられ、五月十九日から再び照射療法を始め

られた。しかし、この時既に榮養不良に陷られ、ラヂウムの靈效も遂に再びその力を發揮するに由がなかつた。

五月二十七日、今日ぞ日本海海戰の記念日、國を擧げての歡びの日である。この朝診察申し上げると、十九日頃から目立つて衰へられた元氣の、今日は殊更に憂慮すべき御容態である。本年の一月以來、日夕私等の腦裏を支配してゐた一事は、その御病狀の公表といふことである。後れては悪し、早まつてはまた悪し、この點に惱まされつゞけたのである。が、今朝のこの御容態を拜見しては、もはや躊躇すべきでないと確信し、竟に決意して、醫診上の資料を當路に捧げた。かくて午後六時、海軍省の公表となり、また放送もあつたといふことは、治療に夢中であつた私等が、後になつて始めて知つたことである。

二十九日の朝が來た。前日來元帥には三度大量の葡萄糖溶

彪氏
元帥の嗣子
内匠寮御用掛
現侯爵　明治
十八年生

小笠原子爵
海軍中將小笠
原長生　慶應
三年生

令息御二人
彪と次子實
明治二十三年
生

液の皮下注射を受けられたが、故あつて今朝はその代りに、少量の靜脈内注射を差上げた。その折に元帥は眠つてをられる様子であつた。後刻診察に伺つた時、元帥は眼をお開きになり、肘を上げられて、「やつたよ。」と云はれた。よつて、注射實行の御禮を述べ、「お渴きは如何。」とお尋ねすると、薄い葛湯をお望みになり、かろく二匙取られて、「あゝ旨い。」と如何にもお氣に召された様子であり、尙かろく一匙召されて、再び微睡を取られた。

程なく、宗秩寮から令息彪氏に出頭すべき由傳達があつた。やがて令息歸邸後、小笠原子爵から、

「畏き邊から陞爵の御沙汰がありました。令息御二人と私とで元帥にお傳へしますから、醫師として立會つて下さい。」

と告げられた。よつて用意を整へて病室に入つた。

何といふ嚴肅さ、陞爵の御沙汰を頂いてゐる元帥の左右の手

家内
元帥夫人　名
はテツ　昭和
九年歿、年七
十四

園田男爵夫人
名は八千代
元帥の二女
明治二十四年
生

は感激に震へ、室内は寂として靜まりかへつてゐる。令息御二人と子爵とは御臥位の元帥の前にあつて、その感涙を見守られ、私は背後にあつて、その御項・御手などの震へを見上げてゐた。やがて元帥は恭しく押頂かれた御沙汰を令息彪氏に渡された。

かくて、令息と小笠原子爵とは退室せられ、病室に侍する者は私一人となつた。その時、元帥は突然「西川さん、西川さん。」と低聲ながら、確と二聲お呼びになつた。急いでお側によりそひ、「はい、何か御用で。」とお尋ね申し上げると、「家内に、家内に。」と微かに仰せられた。お察しするに、「家内にこの光榮を傳へよ。しかし、家内にはまだ我が容態の程を語つてゐないから、醫師として汝より程よく傳へよ。」との御希望に相違あるまい。折しも園田男爵夫人が見えられたので、「丁度よい所です。御父上様が御母上様に」と仰せられます。あなたの方がよろしいでせう。よくお伺ひ

下さい。」と座を讓つて、私は元帥の御頭の方ににじり寄つた。園田男夫人は、

「お父上様、お母上様に何の御用です。」

とお尋ねになりますと、御手を振られ、御首を上の方に向けて、右手を高く伸ばされて、

「西川さん、あなたが。」

と仰せられる。餘りのことに頭を垂れて、

「よくわかりました。御病症のことは、醫者の私からよく申し上げます。」

とお答へすると、重ねて輕くおうなづきになつた。そこで、中八疊の間を隔て、數年來病臥中の夫人に今日のお慶びと、元帥の御容態のあらましを申し上げた。夫人よりは、

「何分起居不自由のために親しく御見舞も叶ひませぬが、この

上十分に御養生あつて御快癒遊ばされんことをお祈り申し上げます。」

とのお言葉があり、再びその旨を元帥にお傳へすると、さも御滿足氣に拜された。

元帥が生死の境界にあつて、かくの如く少しも平素の態度を失はれず、從容として夫人の御身の上を慮らるるその溫情、たゞ感激の涙禁じがたきを覺えるのみであつた。

程なく、夫人のベットは元帥の病床近く、中八疊の御居間に運ばれた。間の襖を開くと、仰臥中の元帥には右方を御覽になり、視線はしかと夫人の御面に止まり、二度ばかり懇ろに頭を下げられた。侍するもの、人も我も皆涙が溢れて座に堪へぬ思がした。やがて襖は靜かに閉された。

慌しき中に午後が來た。御容態はたゞならず、一同深い憂愁

に包まれつゝ、息を凝らして代る代る病床を見守つてゐる。夕が近づくにつれて、御病は次第に革まり、この上は唯神の御加護を待つのみとなつた。いつしかに夜も更けて三十日に入つた。邸内は森閑として靜寂は極まつた。

御病勢は刻一刻と迫つて來る。病室には、既に御家族御親近と、海軍要路の大官が詰められ、我等醫師十四人は息を凝らし、眼を睜つて、只管御容態を見守つてゐる。

明けやすき夏の夜はいつしか黎明となつた。憂愁の霧は動かず、新緑を洩れる日影も冷やかに、庭内は唯寂の一字に盡きる。御容態は益〻險悪。午前六時三十分には全く危篤に陥られ、同じく七時、ねむるやうに薨去せられた。頭を上げて拜すると、御溫容は、尊く澄みきはまり、正に神々しきかぎりであつた。（縱と横）

良寛
歌僧　諱は大愚　俗姓は山本　天保二年（一四九一）寂年七十五

高野の山
和歌山縣伊都郡の南部にある山

一〇　短歌鈔

良　寛

霞たつ永き春日にうぐひすの鳴くこゑきけば心はなぎぬ

このみやのみ坂に見れば藤浪の花のさかりになりにけるかも

紀のくにの高野の山の古寺に杉のしづくを聞きあかしつつ

わがまちし秋は來にけり高砂の尾上にひびくひぐらしの聲

月よみの光を待ちてかへりませ山路は栗のいがの多きに

飯乞ふと里にも出でずなりにけり昨日も今日も雪の降れれば

このゆふべいはまのたきつ音せぬは高嶺のみ雪つもるなるらし

平賀元義
歌人　國學者
慶應元年（二五二五）歿、
年六十六

比波の山
比婆山、岡山縣比婆郡比和町にあり　昔比波と書けり

吉備の中山
岡山縣吉備津神社の後方にある山　歌枕の一

比波の山雪の上より吹きおろす春の嵐は寒けかりけり

平賀元義

もとしげき吉備の中山櫻ちり青葉繁りぬ春盡きむとす

牛飼の子らにくはせと天地のかみの盛りおける麥飯の山

わだつみの潮の八百路の八潮路ゆ吹きくる風は涼しくありけり

兒島の海
岡山縣南部に於て瀬戸内海の一部が兒島半島に圍まれたる地域

逢崎
岡山縣兒島郡大崎

上山
同英田郡河會村大字上山

淺原山
同都窪郡菅生村大字淺原にあり、淺原の北嶺を淺原峠といふ

柞葉のははをおもへば兒島の海逢崎の磯なみ立ち騒ぐ

上山は山風さむしちちのみの父のみことの足冷ゆらむか

あかねさす日は照りながらくれなゐの淺原山ゆ雪のちり來る

きはまりて貧しき我も立かへり富み足り行かむ春ぞ來向ふ

伊原青々園
名は敏郎　劇評家　文學博士　明治三年生

二　感想五題

伊原青々園

茶法があるために、抹茶は上品なものとされてゐるが、また其の茶法が面倒くさいために、茶の味だけは好んでも、敬して遠ざける人が少くない。茶法の存するのは、茶のために幸でもあり、不幸でもある。

しかし、實際には飲食にも坐作にも法のないものはない。抹茶には、其の法が比較的に勵行され、嚴守されてゐるだけの相違である。茶法などは全く知らない若い人で、それが洋食を食べてゐるのを見ると、まるで茶人の會席に於けるやうに手際の鮮かなのがある。抹茶でも洋食でも、その法のあることは同じだからである。

歌舞伎座が今の椅子席となる前に、軍隊を招待して芝居を見せた事があつた。千人近くの兵士が上り口で靴をぬいで、歸りには其のまゝ置いてある靴を銘々にはいて、何の間違も混雜もないのに下足番が驚いたといふ。

すべて軍隊生活には茶法に似た所が多い。茶法の源は禪僧の共同生活を支配した清規から來てゐることを思ふと、それが軍隊生活の作法に似てゐるのに不思議はない。

大震災の時である。或料理屋の主人が燒出されて郊外をうろついてゐると、露店の西瓜屋に立つてゐる男は、よく自分の内へ來る客だつた。それは成金の贅澤屋で、何の料理を出しても必ず「まづい。」と小言をいふ人だつたが、よごれた浴衣に細帶をしめて、西瓜の切身を貪るやうに食つてゐた。これを見て可笑し

くもあり、氣の毒でもあつたと其の人が語つた。

食物の贅や通をいひ得るのは、平安無事の時だけである。地震や火事の場合とか、でなくても旅行して僻地に泊つた時、若しくは振舞になつて主人の好意を無にしないためには、まづい物でも我慢しなくてはならぬ。私は平素なるべく好き嫌ひをせず、まづい物も力めて食べるやうにしたいと思つてゐる。

子供にも、唯うまい物を食べさせようと心を碎くのみが親心ではないであらう。うまい物をうまいと食べ得るやうに、又まづい物をも平氣で食べ得るやうに、否、更に進んでうまい物もまづい物も感謝して食べ得るやうに、平素心身を鍛へてやることこそ、一層深い親心といはなくてはならないであらう。

これも震災の時の話である。わたしは貨物自動車で市中の

押上
東京市本所區

吾妻橋
淺草區・本所區を通ずる隅田川に架せる橋

淺草の森
東京市淺草區淺草寺の境内

燒跡を見廻つたが、押上から吾妻橋まで來ると、荒涼たる焦土の間に淺草の森と觀音堂の美しく殘つたのを見て、どんなに心を慰められたらう。それから中秋に薄や桔梗や女郎花を何時もの通り八百屋で賣つてゐたのも嬉しかつた。美しいものが人間生活に必要だといふ事を痛切に感じた。

病院にはいつて三日ばかりお菜なしで白粥だけ食べさせられたことがあつたが、三度三度のうまかつたことは今に忘れられない。漸くお菜を許されるやうになつて、この上どんなにうまからうと思ひのほか、お菜の鹽梅がいゝ時はうまいが、鹽梅のわるい時は白粥だけの時よりまづかつた。それで、食味の第一義は簡素と自然とにあることをつくづく悟つたが、それは食味ばかりでなく、生活上の一切に亙ることである。（詩と隨筆集）

小泉信三
經濟學博士
慶應義塾塾長
兼大學總長
明治二十一年生

新潟
新潟縣の市
信濃河口に跨がる港市

蒲原郡
新潟縣にあり明治十一年東、西、中、南、北の五郡に分る

三　旅行雜談

小泉信三

地方に旅行してどんな事に興味があるかといふと、先づ其の土地の歴史を尋ねてみることである。それも大概幕府以前には遡らない。舊藩時代の民政、士族と町人・農民との關係、士民の對立が今も尚殘つてゐるかどうか、士族屋敷町の跡はどうなつてゐるか、舊藩主又は藩士の大身中に現在資本家として有力なものがあるか否か等の事が、人に尋ねたい項目である。それから、最も興味を持つてゐるのは、地方富豪の致富成功の徑路である。昨年の暮新潟へ行つた時には、案内されて蒲原郡の大地主數人の家を訪問した。此等の地主の所有地は、屢〻一千町歩を超え、其の邸宅は城郭にまがふといつてもさほどの誇張ではない程のものである。どうしてあの地方に限つてこの樣な大地主

溝口侯
越後新發田藩主　十萬石

沼垂（ぬまたり）
今、新潟市内の町　信濃川右岸にあり

信濃川
上流は千曲川と稱す　八ヶ岳と關東山塊との間に發し東北流して新潟縣に入り日本海に注ぐ　我が本州第一の長流　流程約三七〇粁

鹽釜
宮城縣宮城郡の町

がかたまつてゐるかと思つて色々きいてみたが、はつきりしなかつた。使用人其の他家内の人々の風俗は、見受けるところ概して武家風でなくて、物堅い商人風である。それでひそかに、武人の土着ではなくて、多分何時かの時代に商業資本が大規模に土地に投入された結果であらうと想像してゐたが、其の後或本を見ると、往年藩主溝口侯が、其の領内沼垂の商權が信濃川對岸の新潟に奪はれた機會に、思ひ切つて重農政策に轉換し、大規模の開墾及び土地改良を企てて、實收石高の非常な增加を實現したことがある。其の時に資金を以て此の事業を援けた者の子孫が、今の大地主だと書いてあつた。此の種の觀察は平生最も好む所であつて、旅行の樂しみの一つである。

産業、殊に其の土地に興つた新しい産業の話を聞くのも好きである。鹽釜で聽いた、牡蠣の種子が米國へ輸出されるといふ

北陸
我が國八道の一　石川縣・富山縣・新潟縣をさす

話は珍しかつた。米國の牡蠣養殖場では、牡蠣は、成長はするけれども、繁殖しない。そこで日本から其の種子を買つて、それを育てて賣るといふのである。

食物に就いては、私は特に趣味があるといふ方ではない。しかし、旅行して、食膳の上に地方と季節とを味はふことはいゝものだ。秋田のはたはた、金澤のごり、何れも特に旨い魚だとは思はなかつたが、面白く味はつた。佐賀にはむつごらうといふ奇魚があるさうだ。沙魚（はぜ）の一種で、氣味の惡いことには、海水の引去つた干潟の上を匍行して餌を索めるといふことだ。味はひは惡くないといふことだつたが、あまり食指は動かなかつた。幸か不幸か、私の佐賀に遊んだのは二月で、季節外れであつたから、其の姿を見なかつた。食物で驚いたのは、メロンの普及である。先日北陸を旅行した時、富山でも金澤でも福井でも、何時も

香港
支那廣東省東南部のイギリス領直轄植民地
ジャンク（戎克）
支那特有の運搬船　一種の帆船
下關
山口縣の市　西日本の重要貿易港

食後にはメロンが出された。我々には中々日本では味はへないものといふ記憶がまだ新しいから、これには感心した。珍貴な果物が通俗化した例には、前にバナナの普及がある。勿論メロンが、今日のバナナ同樣有りふれたものになるだらうといふのではないが、併しバナナが立派な贅澤品であつたのは、さほど遠い昔の事ではない。私など少年の頃には、バナナは決して東京市中の何處にもある果物ではなくて、賣つてゐる店は數へられた。大正の初め洋行の途次、香港でジャンクに一杯青バナナの積込んであるのを見て、驚いた記憶がある。それが數年前、偶〻下關の港で見ると、漁師がこれを小さく切つて釣の餌に用ひてゐるといふ始末である。

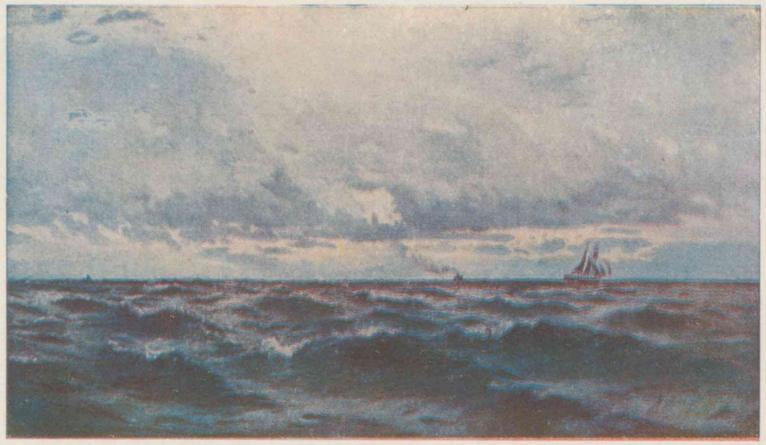
言葉に就いては、元來東京生れのものは、地方の言葉を輕蔑する惡癖がある。しかし、地方訛は東京でこそ耳障りであるが、其

ニュアンス
微妙な陰影

俳諧歳時記
二卷二册　瀧澤馬琴著　春夏秋冬雜の五部門に四季の詞の意味・故事等を說きしもの　但しここにいふは改造社出版のもの　新年・春・夏・秋・冬の五卷

の土地に於て其の土地の純粹の言葉を聞くのは、好いものである。なまじ東京語で話されるより趣があり、耳にもよくひゞく。或土地に於ける其の土地の人々には、其の土地の言葉でなければ現せない感情のニュアンスがある。それを味はひ得た時には、愉快であり、又一種のユウモアを感ずる。

旅行に携へる本では、「俳諧歳時記」がよい。これは俳句を作る爲ではなく、季節季節、または土地土地の風土・民俗・動植・金石などを觀察して、其の趣を味はふための手引とするのである。記述も例句も豐富で、いつも便宜を與へられる。今年の夏東北地方へ行き、酒田の某氏の別莊に招かれた時の事である。母屋から離れた浴室で湯に入つてゐると、雨の降つてゐる日であつたが、暗く繁つた庭の大樹の梢に聞慣れぬ鳥の聲がする。一寸梟が段をつけて鳴いてゐるかと思ふやうな聲である。あとで人に



海

きくと、郭公だといふ。郭公とはどんな鳥か、時鳥とはどう違ふか、すぐそれが人々の話題になつた。歳時記は、こんな時にも疑を解いてくれる。卽ち其の夏の部、閑古鳥の條下を見ると、「閑古鳥、今云ふ郭公なり。形狀殆ど時鳥の如く、色彩も背灰色、腹白色にして黑き横條あり。此の鳥も亦自ら巢を營まず、時鳥の如く他鳥の巢に寄託して孵化せしむるも形は時鳥より稍大きく、鳴聲は全く相違せり。春渡來して、夏月深山の幽邃に在りて、クヮツクークヮツクーと鳴き、甚だ寂寥を感ぜしむ。人家に近づくことなし。秋南方に去る候鳥なり。」とあり、又「時鳥と郭公は姉妹鳥にして形・色共に見分け難きも、今日にては判然區別されゐるなり。その鳴聲、ほととぎすはテッペンカケタカと聞え、くわつこうはクヮツクーと鳴く。大きさも郭公は杜鵑より一まはり大なり。」と注意してあつた。（學窓雜記）

吉江喬松
文學博士　早稲田大學教授
昭和十五年歿
年六十三

印度洋
三大洋の一
面積太平洋の
約五分の一

コロンボ
印度セーロン
島の首都

一三　印度洋

吉江喬松

コロンボから十二晝夜、三千七百海里の間は、波の烈しい日とては一日か二日であつた。併しそれとても、私一人にとつては、全く食卓へ出られないほどではなかつた。

コロンボを出帆した十月七日の午後一時から十二晝夜餘を經過しないうちに、我々の船は赤道を通過して南半球へはいつた。印度洋のたゞ中をこの季節に航行する船としては當然のことではあらうけれど、我々は豫期しないほどの涼しい氣候の中で熱帶を、太陽の直射の下を通過するのであつた。

風は、或時は南から、船の煙を後方へ斜に靡かして吹いた。或時は北から、同じ角度に左舷の波の上へ黑い煙を這廻らさせた。貿易風の季節は既に過ぎたので、たゞそのなごりの微風のな

かを、爽涼な感じを味はひながら、南西へ南西へと、我々の船はアフリカの大陸を目がけて下つて行くのであつた。

晴れ渡つた日には、早朝から日光は燃えるやうな、併し我々の溫帶地に見る如き曇つた赤さではなく、黃金色に澄んだ光を、上下二重の虛空一面に溢らした。實際、熱帶には殆ど薄明がない。殊に大洋の上に於ては、闇が直ちに光に接した。日が直ちに夜の歩みの後を追うた。まだ闇が水の曠野の上に立籠めてゐると思つてゐると、何の豫表もなく、何の警告もなく、全く不意打に、水平線に日の一角が浮かび出る。

初は光を發しない。たゞ朱玉の一片である。闇もまだ氣がつかない。波もまだ騷がない。見る見るその朱玉は水際を拔け出て、忽ちに金光をぱつと四散せしめる。第一に目醒めて騷ぎたつものは波である。きらつとその光波が空際から傳播す

ると、もうそれが八方へ散つて、爭つてその洗禮を受けようとする。闇はもうこの裏切に逢つては全く力をなくしてしまふ。大きな幻のゆらぎ！今までの自分の領土を、夜の國を、直ちに日の前へ展開して、何處へ逃げる力もなく、居ながらにして姿を消してしまふ。

落日の場合でもさうである。一日の間、たゞ大洋の水と我々の船とのみを照らしてゐた太陽が、まづ第一に水平線へ休息の席を求め得た時次には最後の力を一時に集め出して、全體の光を宇宙に發散せしめた後で吸込まれるやうに水平線へ沒した時、夜の翼は直ちに水の上へ蒼空へと一面に擴げられる。日は惜しげもなく、光の領土を闇の前へ投出す。闇は急速にその利權を回復する。

大洋の果てしない荒漠の上で、晝と夜とはこの烈しい對照を、

見せて交代する。夜を支配するものは水の世界であり、晝を來らすものは蒼空であるやうに、上下二つの無限の領土は、虚空を兩分して明暗の影を交互に投じ合ふ。

ところが、この急激に落來る印度洋の夜の天空を、月の光が次第に照らすやうになつて來た。最初、雲の間に片月の影を認めたとき、單調の破られる一種の懷かしさを感じたが、宵ごとにその感じは次第に強くなつて來た。

實際、この穩かな、人の心を押鎭める清涼な月の光が、果てしなき、波の頭を照らすのを見るときは、陸上で感ずるよりも一層の懷かしさを覺えるものである。日中の餘りに華やかな、眩惑するやうな魅するやうな太陽の光と對照して、一層の柔かさと靜けさとを味ははせるが故であらう。

たゞ熱帶の月には、我々の地帶で大方の場合に見るやうな、銀

彼南
ピナンなり
マレー半島の西海岸にあり
マラッカ海峽の北部を扼す
一小島イギリス領海峽植民地の一部

白の、磨ぎ澄ました、滴るやうな光ばかりでなく、それに幾分の黄色を加へ、光度も強くなつてゐるのである。

彼南あたりの陸上でも、洋上のこの甲板でも、滿月の夜には新聞ぐらゐは讀むことが出來る。けれど、晝間の見る目を痛くさせ、腦神經まで攪亂するやうな日の光に比べると、何といつても、我々溫帶人に最も新しい感じを與へるものは、この洋上の月である。この洋上の月は異境の情を起させるといふよりは直ちに故鄕にゐる感じを與へる。

それに、天の高く水の果てしないといふ感じを深く味ははせるものは、大洋上の月夜である。晝間とても船外に、波浪を除いては何の響もないのであるが、夜更けて紫紺の空に高くかゝつてゐる月を仰いで立つてゐると、如何にも靜寂な感じが身に沁み、悠久の思が胸をめぐる。

スクリウ
螺旋推進器

印度洋特有であるといふ一波長二三海里にも亙る高い波のうねりが、その濃き紺青の兩翼を思ふまゝに擴げて、天際に頭をもたげるのもかゝる時である。月光は、その大鵬の翼の上へ、銀絲の無數の雨をそゝぎかける。瞬く間に、その翼の羽叩きは、見える限りの海面へ、ゆるやかな動搖と、暗默の不安とを與へて、その進路に當る何ものをもその中に包み、その上に載せようとする。船も忽ちその上に乘せられてゆるやかにゆられるけれど、船中の人間には、別にそれが際立つては感じられない。たゞ水中で、晝夜を分たず、一分間六七十の囘轉數を繰返してやまない船尾の暗車(スクリウ)が、その不安を受けて、船の後方へ描き出す波の渦卷に、複雜した形を見せるだけである。

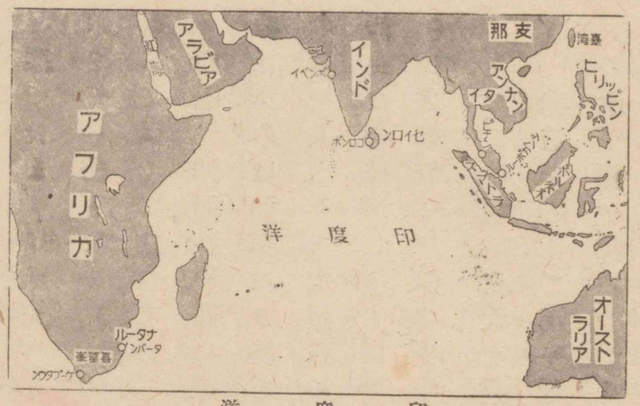
併し、老練な船乘は、水中の暗車と同じく直ちにこのうねりを身に感じて、甲板を歩きながら、暗車の響に耳を傾けてゐる。そ

して空を仰いで、滿月の光が檣頭(マスト)に碎け、四方に散り、いま船を背に乘せたまゝ、なほ先へと身を伸ばして行く大波の頭が、時に亂れて銀の房となり、白玉の群となるのを照らし出すのを、じつと眺めて默つて立つてゐる。

實際、大洋通ひの船に乘つてゐる人々に、眞に船乘の樂しみを味はふのは如何なる時であるかと尋ねると、「印度洋あたりで、月の晩、一人きりで夜更けの甲板に立つてゐると、何ともいへない靜かな心持がします。まあ、船乘らしい氣分といつたらそんなものでせうか。」と、多くの人は答へた。

また、この頃の夜天を樂しましめるものは、南極星(サウザンクロス)の出現である。赤道を越えて南半球へはいつたばかりの日には、如何に南方の水平線を眺めやつても、我々の目に、別に異なつた星影は映らなかつた。船橋(ブリッヂ)に立つて終夜見張をしてゐる士官の一人は、

早曉の四時頃、南方の天際に見えるから、見えたらば直ぐ告げてやると約束してくれたが、遂にその運びに行かなかつた。その間に三四日經過した。すると、今度はもう夕方から、華やかな日が靜かな夜に直ちに接する天の一方、南の水平線から餘り高くない所に、四つの星が十字を圍むやうな形に輝いてゐるのを認めた。



印度洋

濃い紫色の空が、少し下つて色淺く、微明るく、水と接する一線を下に見て、燦爛と閃くこれ等の星の光は、北斗の七星に比べると稍強いやうに思はれた。南極を中心と

マダガスカル
印度洋の西部にある佛領の大島

して周圍二十度ぐらゐの天上を運行回轉するこれ等の星としては、今我々に最も近く見えるのかも知れない。この十字星の上に、點星と呼ばれる二個のやゝ小さな星が輝いてゐる。そして、我々が今見る十字星は、クロッスを垂直の姿に立たしめないで、稍斜になつて、その尖端が直ちに波を射てゐる。その下には濃い藍青の遠波がおだやかな胸を開いて、その尖端を抱かうとしてゐる。

若し南半球を故郷としてゐる人が、久し振に北方から赤道を越えての歸り路に、遠く洋上に閃くこの星を眺めやつたならば、胸を踴らさずにはゐられまい。我々が夜毎に仰いだ北斗は、もう波間に影を沈めてしまつた。空の色にも、星の配置にも、異國の感じは漂つてゐる。

マダガスカルの南端の一角が朝靄の中にぼかし出された。

ナタル港
ダアバンを稱す　南アフリカ聯邦ナタル州唯一の商港
ダアバン市
ナタル港の市街

幻のやうな山影、波に消え沈む一帶の陸地、それも一日ならずして、また積水の累層の中に隱れてしまつた。そしてアフリカの大陸がその凸凹した岩角と、濃綠色の丘陵とを我々の眼前に連亙せしめたのは、更に一日たつてからであつた。

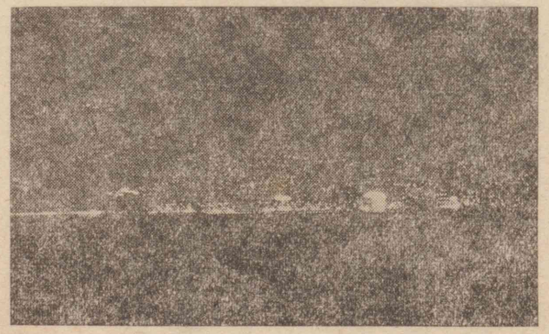
ナタル港では、溝のやうに狹い、岩壁の間をすれすれにはいつて、船は丘陵の下、石炭庫の側へ横づけになつた。いま我々の前に見えるのは、赤い瓦を葺いた、綠葉の中に埋つたダアバン市の人家の連なりである。湖水のやうに穩かで平かな灣內には、白い淺瀨も所々に見えて、その上に眞白な海鴨が列をなして並んでゐる。市街はその淺瀨の手前の波打際から丘陵の上へかけて、下街は商館の並列、丘上は居住街と區別して、その中間に會堂の尖塔が其處此處に聳えてゐる。

そして、丘陵の背後からは陸地の奥の山々が夕方の風を靡か

モウパッサン(1850—1893)
フランスの小說家
門司
福岡縣北端の港市
香港
前課參照
シンガポール
イギリス領海峽植民地の首府　東南アジアの最も重要なる商業市

して遠く見え隱れてゐる。

今夜は久し振で暗車の響もしない後部甲板から、陸上の市街の灯影に照らさるる全景を眺めやつた。「海上から見た市街の灯影ほど美しいものはない。」とモウパッサンは言つてゐるが、實際それは、門司でも、香港でも、シンガポールでも、彼南でもさうであつた。しかも、この春半ばの南亞の港には稍冷たい夜の空氣にも高い花の香が漂つてゐた。水にも黃色な花粉が渦紋をまいてゐた。そして市街の灯は華やかに明るく、丘上より海岸まで幾多の星を撒散らしたやうに、樂しく輝いてゐる。(輝く海)



香港夜影

大槻磐溪　名は清崇　儒者　明治十一年歿、年七十八

佐野　今の栃木縣安蘇郡佐野町

天德寺了伯　佐野了伯　初め修理大夫と稱す　豐臣秀吉の臣　慶長六年（一二六一）歿、年四十四

佐々木高綱　通稱四郎　源頼朝の臣　後出家す　歿年不詳

一四　平語を聽く

大槻磐溪

佐野の城主天德寺了伯、北條氏に屬して、驍名夙に顯る。嘗て瞽師の琵琶を善くする者某を招きて平語を演ぜしむ。瞽師、爲に二曲を唱ふ。一は佐々木高綱の事に係はり、一は那須宗高の事に係はる。了伯一曲を聽く毎に嗚咽歔欷して已まざりき。

他日從容として左右に問ひて曰く、「昨、平語を聽く、若何。」と。皆曰く、「甚だ樂しむべきなり。たゞ、演ぜしところは皆赫々たる功名の事に係はる。しかるに君獨り泣きて已まざりしは何ぞや。」と。了伯これを聞き、天を仰ぎて大息して曰く、「吾今にして汝等の我が用を爲すに足らざるを知るなり。

顧ふに高綱の鎌倉公を辭するや、其の愛するところの名馬を乞ひて、先登を必すべからざるの前に約せり。其の心固より生

那須宗高　通稱與市　源義經の臣　歿年不詳

鎌倉公　源頼朝

きて還るの理なし。宗高馬を兩軍屬目の中に立てて扇眼を海波數百歩の外に射る。不幸にして一發中らずんば、唯自刎して以て海に投ずるあらんのみ。吾二子の心事を推究して此に至れば、則ち感慨悲壯、自ら涕淚の睫に交るを覺えざるなり。今日弓箭の士、果して能く二子の心を以て心と爲さば、則ち何の戰か勝たざらん、何の功か成らざらん。汝等乃ち曰く、『其の樂しむべきを見て、其の悲しむべきを見ず。』と。吾是を以て其の能く爲す無きを知るなり。」と。

古人云ふ、「活眼を以て活書を讀む。」と。天德寺氏の平語を聽くは、移して以て讀史の法となすべし。（近古史談）

熊谷次郎直實
平貞盛の後裔
源頼朝の臣
後法然上人に
投じて弟子と
なり、名を蓮
生と改む　承
元二年（一八
六八）寂

一五　小枝の笛

さる程に一の谷の軍やぶれにしかば、武藏の國の住人熊谷の次郎直實、平家の公達の、助船に乘らんとて汀の方へや落行き給ふらん、あつぱれよき大將軍に組まばやと思ひ、細道にかゝつて、汀の方へ歩まする處に、こゝに練緯に鶴縫うたる直垂に、萌黃匂の鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ、金づくりの太刀を佩き、二十四さいたる斑生の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢葦毛なる馬に金覆輪の鞍置いて乘つたりける武者一騎、沖なる船を目にかけ、海へさつと打入れ、五六段ばかりぞ泳がせける。

熊谷「あれはいかに、よき大將軍とこそ見參らせて候へ。まさなうも敵に後を見せ給ふものかな。かへさせ給へ、かへさせ給へ。」と、扇をあげて招きければ、招かれて取つて返し、汀に打上らん

とし給ふ所に、熊谷波うちぎはにておしならべ、むずと組んでどうと落ち、取つておさへて首をかゝんとて、兜をおし仰けて見たりければ、薄化粧して鐵漿黑なり。わが子の小次郎が齡ほどして、十六七ばかんなるが、容顏まことに美麗なり。「そもそもいかなる人にてわたらせ給ひ候やらん、名乘らせ給へ。助け參らせん。」と申しければ、「まづかういふ和殿は誰そ。」「ものその數にては候はねども、武藏の國の住人熊谷の次郎直實。」と名乘り申す。「さては、汝が爲にはよい敵ぞ。名乘らずとも、首を取つて人に問へ。見知らうずるぞ。」とぞのたまひける。

熊谷「あつぱれ大將軍や。この人一人討ち奉りたりとも、負くべき軍に勝つべきやうなし。また、助け奉りたりとも、勝つ軍に負くる事もよもあらじ。今朝一の谷にて、わが子の小次郎が薄手負うたるをだにも、直實は心苦しく思ふにこの殿討たれ給ひ

土肥　土肥實平　頼朝の臣
梶原　梶原景時　頼朝の臣

ぬと聞き給ひて、さこそは嘆き悲しみ給はんずらめ。助け參らせん。」とて、後を顧みたりければ、土肥・梶原、五十騎ばかりで出で來る。熊谷涙をはらはらと流して、「あれ御覽候へ。いかにもして助け參らせんとは存じ候へども、味方の軍兵、雲霞の如くに充ち滿ちて、よも遁し參らせ候はじ。あはれ、同じうは直實が手にかけ奉つて、後の御孝養をも仕り候はん。」と申しければ、「たゞ何さまにも、とうとう首を取れ。」とぞのたまひける。熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず。目もくれ、心も消えはてて、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く泣く首をぞかいてげる。

「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しにたゞ今かゝる憂き目をば見るべき。なさけなうも討ち奉つたるものかな。」と、袖を顏に押當てて、さめざめと

經盛　平忠盛の子
忠盛　貞盛五世の孫　清盛の父
平家物語　異本多し　普通は十二卷に劍卷・灌頂卷二卷を加ふ　平家の勃興より滅亡までを記す　作者不詳

ぞ泣きゐたる。首を包まんとて、鎧直垂をといて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ腰にさゝれたる。「あないとほし、この曉、城の内にて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。當時味方に東國の勢何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛もつ人はよもあらじ。上臈は猶も優しかりけるものを。」とて、是を取つて大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば修理の大夫經盛の乙子大夫敦盛とて、生年十七にぞなられける。それよりしてこそ、熊谷が發心の心は出で來にけれ。

件の笛は、祖父忠盛笛の上手にて、鳥羽の院より下し賜はられたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるによつて、持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。狂言・綺語のことわりといひながら、遂に讃佛乘の因となるこそあはれなれ。（平家物語）

九郎大夫判官　源義經　義朝の第九子　文治五年（一八四九）歿、年三十一

一院　後白河天皇

田代冠者信綱　父は爲綱　初め頼朝に仕へ後義經に從ふ

金子十郎家忠　平高望より出づ　初め義朝に仕ふ

同與一親範　家忠の弟

伊勢三郎義盛　伊勢の江村の人　初め江の

二六　佐藤嗣信の最期

九郎大夫判官、其の日の裝束には、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧著て、金作の太刀を帶き、切斑の矢負ひ、滋籐の弓の眞中取つて、船の方を睨まへ、大音聲を上げて、「一院の御使、檢非違使五位尉源義經」と名乘る。　其の次に、伊豆國住人田代冠者信綱、武藏國住人金子十郎家忠、同與一親範、伊勢三郎義盛とぞ名乘つたる。　續いて名乘るは、後藤兵衞實基、子息新兵衞基清、奥州佐藤三郎兵衞嗣信、同四郎兵衞忠信、江田源三、熊井太郎、武藏坊辨慶と聲々に名乘つて馳來る。　平家の方には、「あれ射取れや。」とて、或は遠矢に射る船も有り、或は差矢に射る船も有り。　源氏の兵共、弓手になしては射て通り、馬手になしては射て通り、上げ置いたる船の陰を、馬休め所にして、をめき叫んで攻め戰ふ。

三郎と稱す　源義經四天王の一人

後藤兵衞實基　藤原秀郷の苗裔　父は實遠　初め義朝に仕ふ

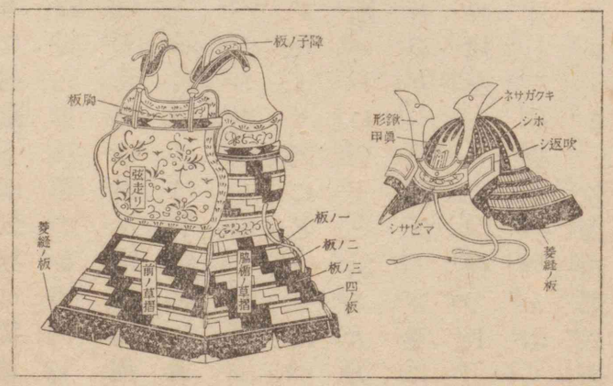
新兵衞基清　佐藤仲清の子　實基の養子

佐藤三郎兵衞嗣信

陸奥國信夫莊司元治の子　源義經四天王の一人　文治元年（一八四五）歿、年二十八

同四郎兵衞忠信

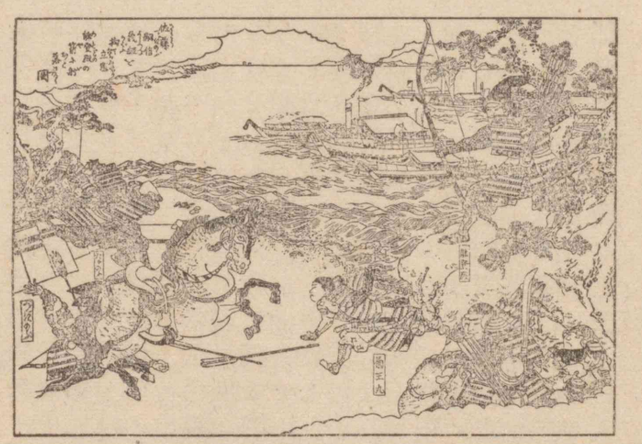
能登守教經、「船軍はやうある物ぞ。」とて鎧直垂は著給はず、唐卷染の小袖に、唐綾威の鎧著て、いか物作の大太刀帶き、二十四差したるたかうすべうの矢負ひ、滋籐の弓を持ち給へり。　王城一の强弓精兵にておはせしかば、矢先に廻る者、射透さずと云ふ事なし。　中にも九郎大夫判官を射倒さむとねらはれけれども、源氏の方にも心得て、奥州の佐藤三郎兵衞嗣信、同四郎兵衞忠信、伊勢三郎義盛、源八廣綱、江田源三、熊井太郎、武藏坊辨慶など云ふ一人當千の兵共、吾も吾もと馬の頭を立並めて大將軍の矢面に塞がりけれ



鎧の名どころ

鬪信の弟　同四天王の一人　文治二年歿
江田源三　江田廣基　源三はその名
熊井太郎　源家譜代の臣
志内六郎の甥　武藏坊辨慶　初め叡山西塔の僧　文治五年（一八四九）歿
能登守教經　平教經　教盛の子　文治元年歿、年二十六

ば、力及び給はず。「矢面の雜人原、そこのき給へ。」とて、差詰め引詰め散々に射給へば、矢場に鎧武者十餘騎ばかり射落さる。



平家物語圖會

中にも眞先に進んだる奥州の佐藤三郎兵衞が、弓手の肩を馬手の脇へつと射拔かれて、暫しもたまらず、馬より、倒にどうと落つ。能登殿の童に、菊王と云ふ大力の剛の者あり。萌黃威の腹卷に、三枚甲の緒をしめて、白柄の長刀の鞘を外し、三郎兵衞が首を取らんと走りかゝる。佐藤四郎兵衞、兄が頸を取らせじと、よつぴいてひやうと射る。童が腹卷の引合

越前の三位　平通盛　教盛の子　壽永三年（一八四四）歿

せをあなたへつと射ぬかれて、犬居に倒れぬ。能登守是を見て、急ぎて舟より飛んで下り、左の手に弓を持ちながら、右の手で菊王丸を提げて、船へからりと投げられたれば、敵に頸は取られねども、痛手なれば死ににけり。是は、本は越前の三位の童なりしが、三位討たれて後、弟の能登守に仕はれけり。生年十八歳にぞなりける。此の童を討たせて、餘りに哀れに思はれければ、其の後は軍もし給はず。

判官は佐藤三郎兵衞を陣の後へ舁き入れさせ、馬より下り、手をとらへて、「三郎兵衞、如何覺ゆる。」と宣へば、息の下に申しけるは、「今はかうと存じ候。」「思ひ置く事はなきか。」と宣へば、「何事をか思ひ置き候べき。君の御世に渡らせ給はんを見參らせで、死に候はん事こそ口惜しう覺え候へ。さ候はでは、弓箭取るものの、敵の矢にあたり死なん事、本より期する所で候なり。就中に源平の

八島　屋島とも書く、香川縣木田郡屋島町　高松市の東方七粁

一谷　兵庫縣武庫郡今は神戸市内にある古戰場　鵯越　一谷の後方鐵拐嶺の北にあり

御合戰に、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信と云ひける者、讃岐國八島の磯にて、主の御命に替り奉つて討たれけりと、末代の物語に申さん事こそ、弓矢取る身は今生の面目、冥途の思ひ出にて候へ。」と申しもあへず、唯弱りに弱りにければ、判官涙をはらはらと流し、「此の邊に貴き僧やある。」とて、尋ね出し、「手負の唯今落入るに、一日經書いて弔へ。」とて、黑き馬の太う逞しいに、金覆輪の鞍置いて彼の僧にたびにけり。判官五位尉になられし時、五位になして大夫黑と呼ばれし馬なり。一谷の鵯越をも此の馬にてぞ落されたりける。弟の四郎兵衛を始として、是を見る兵共、皆涙をながし、「此の君の御爲に命を失はん事、全く露塵程も、惜しからず。」とぞ申しける。（平家物語）

德富蘇峯　名は猪一郎　思想家　貴族院議員　東京日日新聞社賓　文久三年生

乃木大將　名は希典　日露戰役に於て第三軍司令官に補せられ攻圍半歲にして旅順を陷る　後從二位伯爵に敘せらる　大正元年九月十三日歿、年六十四

一七　乃木大將の殉死

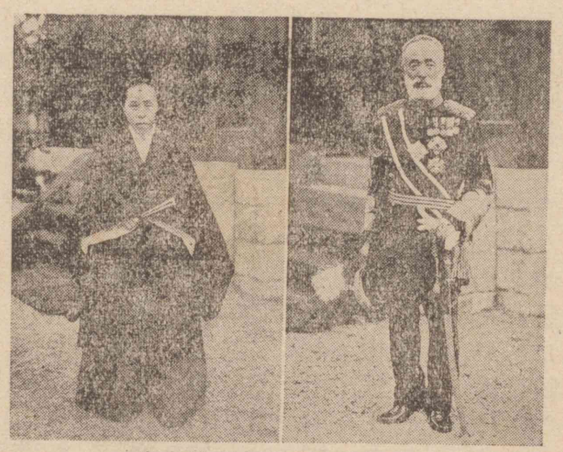
德富蘇峯

乃木大將の自刃は、深夜の警鐘の如く、青天の霹靂の如く、深甚なる印象を天下に與へたり。何人も苟も心ある者は、自己に與へられたる一大鉗鎚として、之を受用するを禁ずる能はず。然りと雖も、若し大將自刃の目的こゝに存すと云はば、これ決して大將の本意にあらじ。恩賞は功勞に伴なふ。然も、若し恩賞を邀へんが爲に身を致して君國に奉ずと云はば、これ忠臣・義士の心を以て、單なる商賣根性となすものなり。大將の一死を我に善用し、國に善用し、世道・人心に善用するは、吾人の責任なり。されど、後人に教訓せんが爲に、時世を警醒せんが爲に、汚風惰俗に大鐵槌を下さんが爲に、特に自刃したりと云ふ者あらんか、大將の心事を誣ふるも亦甚だしきものといはざるべからず。

明治十年の役
西南の役　當時乃木大將は久留米第十四聯隊長たり

吾人の所見によれば、大將自刃の理由は、其の遺言書の第一條に於て盡くしたり。曰く、

自分此度御跡を追ひ奉り自殺候段恐入候儀其罪は不輕存候然る處明治十年之役に於て軍旗を失ひ其後死處得度心掛候も其機を得ず皇恩の厚に浴し今日迄過分の御優遇を蒙追々老衰最早御役に立候時も無餘日候折柄此度の御大變何共恐入候次第


殉死前日の乃木大將夫妻

茲に覺悟相定候事に候と。

大將自刃の行徑や、此の如く明白なり。其の心事や此の如

吉田松陰
諱は矩方　通稱寅次郎　慷慨憂國の先覺者　安政六年（一八五九）歿年二十九
元龜・天正
所謂戰國時代
古羅馬
古代ヨーロッパの國名
ストイック派
アリストテレスの後に起りたるギリシヤ哲學の一派
南山役
明治三十七年

く光明なり。豈紛々聚訴の餘地あらんや。

大將の後半生は、殆ど吉田松陰の士規七則の標本たりき。元龜・天正間の武士等到底其の足元にも寄り附く可くもあらず。古羅馬のストイック派の英雄も、或は三舍を避くるが如き簡素嚴峻・剛健の生活なりき。

吾人は茲に大將の事歷を說くの煩を要せず。明治三十七八年戰役に於て、彼は第三軍の將として出征したり。彼の責任や眞に重大なり。彼は二兒と共に家を出で、「三棺を竝べざれば、葬送する勿れ。」と、家人に戒めたりといふ。されど彼も亦人の父なり。

山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場。
征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

これ南山役後の作にして、無心にして之を讀む、なほ黯然たらざ

五月日露軍の南山に於ける會戰

一兒 乃木勝典 金州にて戰死、年二十六

他の一兒 乃木保典 二〇三高地にて戰死、年二十四

るを得ず。況や此の時に於て、大將が其の一兒を失ひたる事實を知る者は、其の胸中を忍びて、自ら泣かざらんと欲するも能はざるなり。大將は本來多感の質なり。たゞ武士道の錬磨によりて、剛腸の武夫たりしのみ。一首二十八字、字々これ血涙の結晶のみ。

旅順攻圍軍は、近古未曾有の慘烈なる經驗を嘗めたりき。中隊・大隊は固より、殆ど聯隊の全滅さへも繰返されたり。而して、豫期を超ゆること半歲にして、漸く開城を見るに至れり。大將は此の役にまた他の一兒を失へり。此の如くして二棺は既に出來たり。他の一棺は如何。

皇師百萬征強虜。野戰攻城屍作山。
愧我何顏看父老。凱歌今日幾人還。

大將は實に一將功成萬骨枯の事實を痛切に感じたり。其の銳

敏なる良心・責任感は、又もや大將を驅りて、幾回か自決せしめんとせり。されど、時未だ到らず、餘儀なく其の死處を待てり。

明治三十七八年役以後の大將は、殆ど軍服を纏ひたる聖僧なりき。しかも、獨善は其の屑しとする所にあらず。大將は結髮以來、尊皇愛國の大義を聽き、治國平天下の大道を學ぶ。今や滔滔たる世潮に對して、固より沒交渉たる能はず、力の限り之を支持し、之を矯正し、躬ら行ふ所を以て、之を他に及ぼさんと欲したりしや明けし。而して、大將を學習院長に擢用し給ひしは實に明治天皇の明鑑にして、眞に適材を適所に措きたるものといふべきなり。

大將は明治天皇の知遇を辱うし、特に三十七八年以來、其の孤獨なる家庭、淡枯なる生活に於て示したる自損利他、奉公・獻身の精誠は、深く天皇の鑑奬・嘉諒し給ふ所となり、或は彼を軍職に大

用せんとの議を上る者ありしも、天皇は固く執りて容し給はざりしといふ。これ彼を以て人の師表たる可き者と御推信ありしが爲のみ。大將の進路は、曲折あり、頓挫ありて、決して和易・輕快なりしと云ふを得ず。然も、其の晩節に於て、かくも聖天子の知遇を辱うす。大將が鞠躬盡瘁、老の將に至らんとするを知らざりし心事、また以て察すべきにあらずや。

然るに、計らざるに、天皇の御大患に逢ひ、遂に崩御に逢ひ奉りぬ。思ふに、大將は、代り奉らるべきものならば、畏れながら身を以て代り奉らんと祈りしならん。大將は最後まで御平癒を信じたりき。而して、そは水泡に歸したり。此に於て、一死以て、天皇に殉じ奉る。餘人にありては知らず、大將にありては極めて自然の事なり、極めて尋常の事なり。求めてやまざりし死處はこゝに與へられたるなり。

夫人名は靜子 大正元年九月十三日歿、年五十四

うつし世を神さりましし大君の御跡慕ひて我はゆくなり

たゞ此の如きのみ。蓋し大將は天皇に殉じ、夫人は大將に殉じたり。大將夫妻の死は、宛も天皇の大喪儀の最も莊嚴なる誄歌を合奏したるものなり。此の如くして豫期せられたる三棺は、豫期せられざる四棺となりぬ。乃木家闔門、國事・王事に斃れたり。明治・大正の過渡に於ける、血を以て描ける千古の一大悲史は、此の如くして成れり。嗚呼哀しきかな。（皇室と國民）

國のため散るひとひらは惜しまねどあだにぞちるな大和櫻は

乃木希典

島木赤彥
本名久保田俊彥　歌人　大正十五年歿、年五十一
去年
大正六年

八　暴風

島木赤彥

去年九月三十日夜の暴風雨には、予はF君と共に夜明まで二階の雨戸を押してゐた。風の正面に立つ戸は五枚である。その一枚が外れて風が二階から侵入したら、自分の家はもう助らぬと思つてゐた。二人の手では、五枚のうち四枚しか押すことが出來ぬ。それも、時々大きなのが突當つて來ると、二枚づつ受持つてゐる二人の力が、最も危い中央の一枚に集中されねばならぬ。危い戸は弧をなしてこちらに吹撓められる。その弧の頂點を精一杯に押返さうとする力の次第に弱くなる時、予は運命を心に感じ始めてゐた。

下には妻や子供が逃仕度をして土間に立つてゐる。二階から聲が掛らねば一歩も外へ出てはならぬと命令を下してゐる

のである。逃出すべき命令を下さうか、下すまいかと思案しながら、風の刻々に吹きつのる戸に向つてゐた予は、口中に唾液が全く乾いてゐた。――予はかういふ中にも幾分心の落着を發見し得たのと、家族の恐怖心を少しでも薄らがせようと考へたのとによつて、戸を押しながら、大きな聲で追分節を唄ひ出した。唾液の乾いてゐることに氣がついたのは、この時である。

翌る朝、風が收つて戸外に出た時、四隣の光景が、予の想像以上に荒れてゐるのを見て、今更に昨夜の危險を想ひかへして、新しい恐怖を感じた。隣家の一軒は全く平に吹潰され、軒並びの二階建の家は、何れもその二階と屋根とを吹きさらはれてしまつてゐたのである。

昨夜、F君と予とが終夜嵐に逆らつて一枚の戸を押支へてゐたのは、余等の住する家屋全體を押支へてゐたのである。嵐の

夜の家を押支へるためには、唯一枚の戸を押せばよかつたのである。そして、その一枚の戸を押すためには、風に吹撓ふ戸の、弧の項點を押すことが必要にして充分なる條件であつたのである。弧の項點を押したといへば唯それだけである。一枚の戸を押したというても唯それだけのことである。しかし、それが一軒の家を押支へたのであることを思ふ時、一枚の戸は單なる一枚の戸ではなく、弧の項點は單なる弧の項點ではなくなつてくるのである。

これを余の日常苦しんでゐる作歌の道に關係していへば、我我の求める寫生は、嵐の中の家から唯この一枚の戸を捉へようとすることである。卽ち物及び現象の中核に潛み入つて、直ちにその性命を捉へようとすることである。それはやがてまた、作者自身の性命を捉へようとすることでもある。ちやうど一

枚の戸を押すことが、一つの家屋を支へることであり、更に一家族の生命を支へることであつたのと相違する所はないのである。

寫生を以て、單に物及び現象を寫すに止まるものとするのは、未だ深く寫生に沒頭せぬ人の起しやすい考である。歌の題材が人事であるか自然物であるかといふ如きは、何等重要な區別を劃すべき意義を有する問題ではない。寫生の眞義は、人事についても自然物についても、常にかくの如き一枚の戸を捉へんとするにある。更に精しく言へば、一枚の戸が風に吹撓ふ弧の項點を捉へんとするにある。項點を捉へ得て、しかもその項點を支へる力が不足する時、我々はこゝに始めて眞の恐怖を感じ、全人的の苦悶に直面するのである。（赤彦全集）

國木田獨歩
名は哲夫 文學者 明治四十一年歿、年三十八

一九 非凡なる凡人

國木田獨歩

僕の子供の時からの友人に桂正作といふ男がある。今年二十四で、今は横濱の或會社に技手として雇はれ、專ら電氣事業に從事してゐるが、先づ此の男ほど類の變つた人物はあるまいかと思はれる。

非凡人ではない。けれども、凡人でもない。さりとて、偏物でもなく、奇人でもない。非凡なる凡人といふのが最も適評かと僕は思つてゐる。

僕は知れば知るほど、此の男に感心せざるを得ないのである。感心すると言つたところで、秀吉や、ナポレオンや、其の他の天才に感心するのとは違ふ。此の種の人物は千百歳に一人も出るか出ないかであるが、桂正作の如きは、平凡なる社會が常に產出

豐臣秀吉
慶長三年（一二五八）歿、年六十三

ナポレオン
（1769—1821）
フランスの英雄

源義經
幼名牛若丸
文治五年（一八四九）衣川の戰に自盡、年三十一

し得る人物である。又、平凡なる社會が常に要求する人物である。であるから、桂のやうな人物が一人殖えれば、それだけ社會が幸福になるのである。僕が桂に感心するのは、此の意味に於てである。又、僕が桂を非凡なる凡人と評するのも、此の故である。

僕等が未だ小學校に通つてゐる時分であつた。或日、其の日は日曜で、僕は四五人の學校仲間と小松山へ出かけ、戰爭の眞似をして、我こそ秀吉だとか、義經だとか、十三四にもなりながら馬鹿げた腕白を働いて大あばれにあばれ、遂に喉が渴いて來たので、山の直ぐ麓にある桂正作の家の庭へ、裏山からどやどやと駈下りて、案内も乞はずいきなり井戸端に集つて、われがちにと水を汲んで飲んだ。

すると、二階の窓から正作が顏を出して此方を見てゐる。僕

はこれを見るや「來ないか。」と呼んだ。けれども、彼は平常にない眞面目くさつた顏つきをして、頭を横に振つた。腕白の方でも人並のことをしてのける桂正作が、不思議に今日は出て來ないので、僕等も強ひては誘はず、其のまゝ又山に駈登つてしまつた。

騷ぎくたびれてみな散り散りに我が家へ歸り、僕は一人桂の宅に立寄つた。默つて二階へ上つて見ると、正作は「テーブル」に向ひ、椅子に腰をかけて、一心に何か讀んでゐる。

尤も「テーブル」といつても、粗末な日本机の兩脚の下に繼臺をした品物で、椅子も足繼の下に箱を置いただけのものである。けれども、正作は眞面目に此の工夫をしたので、學校の先生が日本流の机は衞生に悪いと言つた言葉を成程と感心して、直ぐこれだけの事を實行したのである。そして、其の後常に此の椅子・テーブルで彼は勉強してゐたのである。其のテーブルの上に

西國立志編
スマイルス著「セルフヘルプ」の譯本
英米人の立志傳

日本外史
二十二卷 頼山陽の著 源羽二氏より德川氏に至る武家の漢文歴史

は教科書其の他の書籍を丁寧に重ね、筆墨の類まで決して亂雜に置いてはない。彼は日曜の好い天氣であるにも拘らず、何の本か脇目もふらずに讀んでゐるので、僕は其の傍に行つて「何を讀んでゐるのだ。」と言ひながら見ると、洋綴の厚い本である。

「西國立志編だ。」と答へて顏を上げ、僕を見た其の眼差は未だ夢の醒めない人のやうで、心はなほ書籍の中にあるらしい。

「面白いかね。」

「うん面白い。」

「日本外史と何方が面白い。」と僕が問ふと、桂は微笑を含んで、漸く我に復り、いつもの元氣のよい聲で、

「そりやあ此の方が面白いよ。日本外史とは物が違ふ。昨夜僕は梅田先生の處から借りて來てから讀みはじめたけれども、面白くて止められない。僕はどうしても一册買ふのだ。」と言つ

て、嬉しくて堪らない風であつた。

其の後桂は遂に西國立志編を一册買ひ求めたが、其の本といふのは粗末至極な洋綴で、一度讀み了らない中に既にばらばらになりさうな代物ゆゑ、彼はこれを丈夫な麻絲で綴ぢ直した。

此の時桂も僕も數へ年の十四歳であつた。桂は一度西國立志編の美味を知つて以後は、何度此の書を讀んだか知れない。殆ど諳誦するほど熟讀したらしい。そして今日と雖も常にこれを座右に置いてゐる。

げに桂正作は活きた西國立志編と言つてよからう。桂自身も言つてゐる、「若し僕が西國立志編を讀まなかつたらどうであつたらう。僕の今日あるのは全く此の書のお蔭だ」と。

西國立志編を讀んだものは、洋の東西を問はず幾百萬人あるか知れないが、桂正作のやうに「余を作りし者は此の書なり。」と明

言し得る者が果して幾人あるだらう。

小學校を卒業するや、僕は縣下の中學校に入學して、暫く故郷をはなれたが、正作は家の都合でさういふわけにゆかず、周旋する人があつて某銀行に出ることになり、給料四圓か五圓かで、某町まで二里の道程を朝夕往復することになつた。

間もなく冬期休暇になり、僕は歸省の途についた。故郷近く來ると、五六間さきを、古ぼけたトンビを着、古ぼけた手提カバンを持つて、靜かに坂を登りつゝある少年がある。其の姿が如何にも桂正作に似てゐるので、「桂君ぢやないか。」と聲を掛けた。後を振向いて破顔一笑したのはまさしく正作であつた。

「冬期休暇になつたのか。」

「どうだ、君は未だ銀行に通つてるか。」

「うん、通つてゐるけれども少しも面白くない。」

ワット
(1736—1819)
イギリス人
蒸氣機關の發明者

スティブンソン
(1791—1943)
イギリス人
蒸氣機關車の發明者

エヂソン
(1847—1931)
アメリカの大發明家

「どうして」と僕は驚いて聞いた。

「どうしてといふ譯もないが、君なら三日と辛抱が出來ないだらうと思ふ。第一、銀行業からして僕の目的ぢやないのだもの。」

「何が君の目的なのだ。」

「工業で身を立てる決心だ。僕は毎日此の道を往復しながら色々考へたが、發明に越す大事業はないと思ふ。」

ワットやスティブンソンやエヂソンは、彼が理想の英雄である。そして、西國立志編は彼の聖書である。僕の默つて頷くを見て、正作は更に言葉をつぎ、

「だから、僕は來春は東京へ出ようかと思つてゐる。」

「東京へ？」と驚いて問返した。

「さうさ東京へ。旅費はもう出來たが、彼地へ行つて三月ばかり食へるだけの金を持つてゐなければ困るだらうと思ふ。

眞書太閤記
三百六十卷
豐臣秀吉の一生を詳記せる書

だから僕は父に賴んで、來年の三月までの給料は全部僕が貰ふことにした。四月早々出立するだらうと思ふ。」

桂正作の計畫は總べて此の筆法である。彼は隨分少年にありがちな空想を描くけれども、計畫を立ててこれを實行する上に於ては、少年の時から今日に至るまで少しも變らず、一定の順序を立てて、一歩一歩と着々實行して、遂に目的通りに成就するのである。無論これは西國立志編の感化でもあらう。けれども、一つには彼の性情が祖父に似てゐるからだと思はれる。彼の祖父の非凡の人であつたことを今こゝで詳しく話すことは出來ないが、其の一つを言へば、眞書太閤記三百卷を寫すのに、十年計畫を立てて遂に見事に寫し了つたことがある。僕も桂の家でこれを實見したが、今でも其の氣根の大いなるに驚いてゐる。正作は確に此の祖父の血を受けたに違ひない。若しくは

此の祖父の感化を受けただらうと思ふ。

途上種々の話で吾々二人は夕暮に歸宅し、其の後僕は毎日のやうに桂にあつて互に將來の大望を語り合つた。冬期休暇が終り、僕が中學校の寄宿舍に歸るべく故郷を出立する前の晩、正作が訪ねて來た。そして言ふには、「今度會ふのは東京だらう。三四年は歸郷しないつもりだから。」と。僕も其のつもりで正作に別れを告げた。

明治二十七年の春、桂は計畫通りに上京し、東京から二三度手紙をよこしたけれども、何時も無事を知らせるばかりで、別に着京後の樣子を告げてない。又故郷の者も、誰もどうして正作が暮してゐるか知らない。父母すら知らない。たゞ何人も疑はないことが一つあつた。曰く、桂正作は何等かの計畫を立てて、其の目的に向つて着々歩を進めてゐるだらうといふ事實であ

る。

築地
東京市京橋區

僕は三十年の春上京した。そして、宿所が定まるや、早速桂の住所を訪ねた。此の時二人は既に十九歳であつた。

午後三時頃であつた、僕は築地某町を隅から隅まで探して、漸くのことで桂の住家を探し當てた。とある横町の、貧しげな家ばかり並んでゐる中に挾まつた九尺間口の二階屋、其の二階が「活ける西國立志編」君の巣である。

「桂君といふ人が貴方の處にゐますか。」

「へい、いらつしやいます。あの書生さんでせう。」といふ挨拶。聲を聞きつけてみしみしと二階を下りて來て、「やあ」と現れたのが、一別以來三年逢はなかつた桂正作である。

足も立てられないやうな汚い疊を二三枚歩いて、狹い急な梯子段を登り、通された部屋は六疊敷、煤けた天井が低く頭を壓し

疊も黑く壁も黑い。けれども、黑くないものがある。それは書籍である。

桂ほど書籍を大切にするものは少い。彼は如何なる書物でも決して机の上や座敷の眞中に放置するやうなことはしない。かういふと桂は書籍ばかり大切にするやうだけれど、必ずしもさうでない。彼は身の周りのもの總べてを大事にする。

見ると机も可なり立派で、書籍箱もさまで黑くない。机の上を見ると、教科書用の書籍その他が例の如く整然として重ねてある。其の他周圍の物總べてが、皆其の處を得てきちんとしてゐる。

彼は例の如く、最も快活に胸臆を開いて語つた。僕の問ふがまゝに、上京後の彼の生活をば、恥ぢもせず、誇りもせず、平易に、率直に、詳しく話して聞かせた。

彼ほど虛榮心の少い男は珍しい。其の境遇に處し、其の信ずる處を行うて、それで滿足し、安心し、そして勉勵してゐる。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことをして、運命に安んじて、しかも運命を開拓しつゝ進んで行く。僕は聞いてゐる中にも、益彼を尊敬する念を禁じ得なかつた。

彼は計畫通り三ケ月の糧を蓄へて上京したけれども、坐してこれを食ふ男ではなかつた。何がな面白い職を得たいものと、先づ東京中を足に任せて遍巡り歩いた。

日清の間が切迫して來るや、彼は直ぐ新聞賣になり、號外で意外の金を儲けた。

かくて其の年も暮れ、二十八年の春になつて、彼は首尾よく工手學校の夜學部に入學し得たのである。

かつ問ひかつ聞いてゐる中に、夕暮近くなつた。

「飯を食ひに行かう。」と桂は突然言つて、机の抽斗から手早く墨口を取出して懐へ入れた。

「何處へ。」と僕は驚いて尋ねた。

「飯屋へさ。」と言つて正作は立ちかけたので、

「いや、飯なら僕は宿へ歸つて食ふから、心配しないはうが可いよ。」

「まあ、そんなことを言はないで一緒に食ひ給へ。そして、今夜は此處に泊り給へ。まだ話が澤山殘つてゐる。」

僕も其の意に從ひ、二人して宿を出た。路の二三町も歩いたが、桂は其の間も愉快に話しながら、國元のことなど聞き、今年の中に一度故郷に歸りたいなど言つてゐた。けれども、僕は桂の生活の模樣から察して、三百里外の故郷に往復することの、到底言ふべくして行ふべからざるを思ひ、別に氣にも留めず、歸れた

ら一度歸つて父母を見舞ひ給へ位の輕い挨拶をして置いた。

「此處だ。」と言つて、桂は先に立つて繩暖簾を潛つた。僕はびつくりして暫時ためらつてゐると、内から、

「おい君」と呼んだ。しかたが無いから入ると、桂は程よき場處に陣取つて、笑みを含んで此方を見てゐる。見まはすと、桂の外に四五名の勞働者らしい男が居て、長い食卓に着いて、飯を食ふ者、酒を飲むもの、殊の外靜肅である。

「僕は三度三度此處で飯を食ふのだ。」と桂は平氣で言つて、「君は何を食ふか。何でも出來るよ。」

「何でもいゝ、僕は。」

「さうか、それでは。」と桂は女中に向つて二三品命じたが、其の名は符牒のやうで僕には解らなかつた。暫くすると、刺身・煮肴・汁などと飯を盛つた茶碗に香の物が出た。

桂はうまさうに食始めたが、僕は何となく汚らしい氣がして食ふ氣にならなかつたのを、無理に食始めると、思はず涙が込上げて來た。あゝ、此の飯は此の有爲なる、勤勉なる、獨立自活して自ら敎育しつゝある少年が、勞働して儲け得た金で、心からの馳走をしてくれる好意だ。それを何ぞや、不味さうに食ふとは。桂は此處で三度の食事をするではないか。これを厭々ながら食ふ自分は彼の竹馬の友といはれようか。さう思つて僕は思はず涙を飲んだのである。そして、僕は急に胸がすがすがして、桂と共においしく食事をして、繩暖簾を出た。

其の夜は、二人で薄い蒲團の中に、夜の更けるのも知らず、小さな豆ランプの覺束ない光の下で、故郷のことや、他の友のことや、將來の望やを語り合つた。

其の後の桂と僕とは互に往來してゐたが、早くも其の年の夏

期休暇が來た。すると、一日桂が僕の下宿に來て、

「僕は故郷へ歸つて來ようかと思ふ。實はもう決めてゐるのだ。」と言ふ。

「それはいゝけれども君……」と僕は直ぐ旅費等のことを心配して口を開くと、「實は金も出來てゐるのだ。三十圓ばかり貯蓄してあるが、往復の旅費と土產物とで二十圓あつたら可からうと思ふ。三十圓すつかり使つてしまふと後で困るからね。」と言ふのを聞いて、僕は今更ながら彼の用意のほどに感じ入つた。彼の話に依ると、二年前から歸省の計畫を立てて、其のつもりで貯金してゐたとのこと。

そこで、僕も大いに喜んで彼の歸國を送つた。彼は二年間の貯蓄の三分の二を平氣で擲つて、錦繪を買ひ、反物を買ひ、母や、弟や、親戚の女・子供を喜ばすべく、欣々然として新橋を立つた。

翌三十一年に彼はめでたく學校を卒業し、電氣部の技手として、横濱の會社に給料十二圓で雇はれた。其の後今日まで五年になる。其の間彼は何をしたか。たゞ其の職分を忠實に勤めただけか。さうではない。

彼は大いなる事をしてゐる。彼には弟が二人あつて、二人とも手に行かない突飛者、一人を五郎といひ、一人を荒雄といふ。五郎は正作が横濱の會社に出たと聞くや、國元を飛出して、東京に來た。正作は五郎の爲に所々奔走して、或は商店に入れ、或は家僕としたけれど、五郎は到る處で失敗し、到る處を逃出してしまふ。正作は根氣よく世話をしてゐたが、遂に五郎を自分の傍に置き、種々に訓戒を加へ、西國立志編を繰返して讀ませ、そして工手學校に入れてしまつた。僅かの給料で自ら食ひ、弟を養ひ、三年の間、辛苦に辛苦を重ねた結果は三十四年に至つて現れ、五

郎は技手となつて今は東京芝區の某會社に雇はれ、眞面目に働いてゐる。

荒雄も亦、國を飛出した。今は正作と五郎と二人で、此の弟の教育に苦心してゐる。

國木田獨歩肖像

今年の春であつた。夕暮に僕は横濱野毛町に桂を訪ねると、宿の者が「桂さんは未だ會社です。」と言ふから、會社の樣子も見たく、其の足で會社を訪うた。桂の仕事をしてゐる場處に行つて見ると、一本の太い鐵柱を擁して數人の人が立つてゐて、正作は一人其の鐵柱の周圍を幾度となく廻つて、熱心に何事かしてゐる。

最早電燈が點いて、白晝の如く此の一群の人を照らしてゐる。人々は默して正作のするところを見てゐる。器械に狂ひの生じたのを正作が檢分し、修繕してゐるらしい。

桂の顏、樣子。彼は無人の地にゐて、我を忘れ、世界を忘れ、身も魂も、今其のなしつゝある仕事に打込んでゐる。僕は、桂の容貌のかくまでに眞面目なのを見たことがない。僕は一種莊嚴の感に打たれて、思はずそこにたゝずんだ。（獨步全集）

內村鑑三
宗教家 昭和五年歿、年七十

トルヴァルドセン（1768—1844）有名なるデンマルクの彫刻家

二〇 樅の林

內村鑑三

今日世界の樂園といはれてゐるデンマルクは、我が九州大の本國と三つの屬島とから成つてゐる小國で、其のゆたかな富源は、一にその九州大の本國にあるのであります。

然るに、此のデンマルク本國は、本來決して富饒の地ではないのであります。一の鑛山があるでなく、大港灣の萬國の船舶を惹くに足るものがあるのでもありません。デンマルクの富は主として其の土地に在るのであります。其の牧場と、其の家畜と、其の樅と白樺の森林と、其の沿海の漁業とに在るのであります。殊に其の誇とする所は、乳產であります。牛酪と乾酪とであります。デンマルクは實に牛乳を以て立つ國であると云ふ事が出來ます。トルヴァルドセンを出して世界の彫刻術に一

アンデルセン（1805—1875）お伽話作者として有名なるデンマルクの小說家　詩人

シュレスウイヒ・ホルスタイン　今は北プロシヤの一州　北海とバルチック海との間に位す

新紀元を劃し、アンデルセンを出して近世お伽話の元祖たらしめたデンマルクは、實に柔和なる牝牛の產を以て立つ、小さくて靜かな國であります。

然るに、今を去る五十年前のデンマルクは、最も憐れな國でありました。千八百六十四年に獨・墺二强國の壓迫する所となり、其の要求を拒んだ結果終に開戰の不幸を見、デンマルク人は善く戰ひましたが、遂に敗れて再び起つ能はざるに至りました。デンマルクは和を乞ひました。而して、敗北の賠償として、獨・墺の二國に南部最良の二州シュレスウィヒとホルスタインを割讓しました。戰爭は終を告げました。然し、デンマルクはこれが爲に窮困の極に達しました。元より多くも無い領土、而も其の最良の部分を持去られたのであります。如何にして國運を恢復せんか、如何にして敗戰の大損害を償はんか。これが此の

時に方つてデンマルクの愛國者等の腦漿を絞つた問題でありました。國は小さく、民は少く、殘つた土地には荒漠が多いといふ狀態でありました。

國民の精力は斯かる時に試されるのであります。戰は敗れ、國は削られ、國民の意氣は銷沈し、何事にも手の着かない時、斯かる時に國民の眞の價値は判明するのであります。戰勝國の戰後の經營は、どんな詰らない政治家にも出來ます。國威宣揚に伴なふ事業の發展は、どんな詰らない實業家にも出來ます。難しいのは、戰敗國の戰後の經營であります。國運衰退の時に於ける事業の發展であります。戰に敗れて精神に敗れない民が、眞に偉大な民であります。國の興ると亡びるとは、此の時に定まるのであります。どんな國にも時には暗黑が臨みます。其の時之に打勝つことの出來る民が、永久に榮える民であります。

恰も疾病の襲ふ所となつて始めて人の健康がわかると同然であります。平常の時には、弱い人も強い人と違ひません。疾病に罹ると、弱い人は斃れ、強い人は存るのであります。其の如く、眞に強い國は國難に遭遇して亡びないのであります。其の兵は敗れ、其の財は盡きても、なほ起ち上る力を蓄へてゐるものであります。これは誠に國民の試煉の時であります。此の時に亡びない國民は、運命の如何に拘らず永久に亡びないのであります。

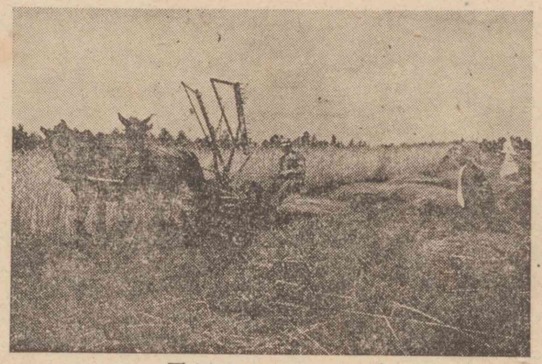
デンマルク人は、戰に敗れて家に還つて來ました。還り來れば國は荒れ、財は盡き、見る物として悲憤慷慨の種ならざるはない有樣でありました。然るに茲に彼等の中に一人の工兵士官がありました。彼の名をダルガスといひました。クランス系のデンマルク人でありました。ダルガス、齡は今三十六歳、工兵

ユトランド
バルチック海
口の半島デ
ンマルク王國
の一部

士官として戰爭に臨み、橋を架し、道路を築き、溝を掘る際、彼は細かに彼の故國の地味地質を研究しました。而して、戰爭が未だ終らないのに、彼は既にその胸中に故國恢復の策を立てました。即ちデンマルク國の歐洲大陸に連なる部分で、其の領土の大部分を占めるユトランドの荒漠を化して、之を沃饒の地にしようとの大計畫であります。故に彼の同僚が戰に敗れ、絶望に壓せられて其の故國に歸つて來た時に、ダルガス一人は其の面に微笑を湛へ、其の頭に希望の春を戴いて來ました。他人の失望する時に、彼は失望しませんでした。彼は、彼の國人が劍を以て失つた物を、鋤を以て取返さうとしました。今や敵に對して復讐戰を計畫するに非ず、鋤と鍬とを以て殘る領土の荒漠と闘ひ、之を田園と化して、敵に奪はれた物を補はうとしました。

しかし、ダルガスは單なる夢想家ではありませんでした。工

兵士官なる彼は、土木學者であり、地質學者であり、又植物學者でもありました。即ち彼は詩人であつたと同時に、又實際家であつたのであります。理想を實現するの術を知つてゐたのであります。



デンマルクの田園

ユトランドはデンマルクの半分以上であります。而して、其の三分の一以上が不毛の地であつたのであります。面積一萬五千平方哩のデンマルクにとりましては、三千平方哩の曠野は過大の廢物であります。これを化して良田沃野となして、外に失つたものを内に償はうとするのが、ダルガスの夢であつたのであります。而して、此の夢を實現

するに方つて、ダルガスの執るべき武器はたゞ二つでありました。其の第一は水でありました。其の第二は樹でありました。ユトランドの荒地は、今より八百年前の昔には、其處に繁茂した良い林がありました。降つて今から二百年前までは、處々に櫛の林を見ることが出來ました。然るに、文明の進むと共に人の慾心は增進し、彼等は土地から取ることにのみ急であつて、之に酬いるのに緩でありました。故に、地は年を追うて瘠せ衰へ、終に五十年前この憐れむべき狀態に立到つたのであります。

これを元始の沃饒に還す方法は、先づ溝を穿つて水を注ぎ、ヒーズと稱する荒野の植物を驅逐し、之に代へるのに馬鈴薯或は牧草を以てするのであります。此の事はさほどの困難ではありませんでした。然し、難中の難事は、荒地に樹を植ゑることでありました。此の事に就いて、ダルガスは非常の苦心を以て研

レバノン
舊譯全書に出でたるパレスチナの山名
莊嚴と森林の繁茂とを以て名高し

究しました。植物界廣しと雖も、ユトランドの荒地に適し、其處に成育して、レバノンの榮をあらはす樹は有りや無しやと、彼は研究に研究を重ねました。而して、彼の心に思ひ當りましたのは、ノルウェー産の樅でありました。是はユトランドの荒地にも成育すべき樹であらうと思ひました。然しながら、實際に之を試驗して見ますと、思ふ通りには行きません。樅は生えますが、數年ならずして枯れて了ひました。ユトランドの荒地は、今や此の強硬な樹木をさへ養ふに足る養分を殘してゐませんでした。

然し、ダルガスの熱心は、これがために挫けませんでした。彼は、天然は此の難問題をも解決してくれると確信してゐました。故に、彼は更に研究を續けました。而して、彼の頭にふと浮かび出ましたのは、アルプス産の小樅でありました。之を移植した

らどうかと彼は思ひました。而して、之を取つて來てノルウェー産の樅の間に植ゑました所が、兩種の樅は相並んで生長し、年を經ても枯れなかつたのであります。茲に於て大問題は釋けました。ユトランドの荒野に始めて綠の野を見ることが出來ました。綠は希望の色であります。ダルガスの希望、デンマルクの希望、其の民二百五十萬の希望は實際に現れました。

しかし、問題は未だ殘つてゐました。綠の野は出來ましたが、綠の林は出來ませんでした。ユトランドの荒地から建築用の木材をも伐り得ようといふダルガスの熱望は、事實となつて現れませんでした。樅は或程度まで成長して、それで成長を止めました。其の枯死はアルプス産の小樅の併植を以て防ぎ得ましたけれども、其の永久の成長は之に依つてとげられませんでした。「ダルガスよ、汝の預言せし材木を與へよ。」と言つて、デンマ

ルクの農夫等は彼に迫りました。

彼の長男をフレデリック・ダルガスといひました。彼は父の質を受けて、善い植物學者でありました。彼は樅の生長に就いて、大なる發見をしました。若きダルガスは言ひました。大樅が或程度以上に成長しないのは、小樅を何時までも大樅の側に生やして置くからである。若し或時期に達して小樅を伐拂つて了ふならば、大樅は獨り土地を占領して其の成長を續けるであらうと。而して、若きダルガスの此の言を實際に試して見ました所、實に其の通りでありました。小樅は或程度まで大樅の成長を促す能力を持つてをります。然し、其の程度に達すれば却つて之を妨げるものであるといふ奇態な植物學上の事實が、ダルガス父子に依つて發見されたのであります。而も、此の發見は、デンマルク國の開發にとつては實に絶大な發見でありま

エークル
英米地積の單位。一エークルは約四千平方米

した。之に依つてユトランドの荒地挽回の難問題は決せられたのであります。之に依つて各地に鬱蒼たる樅の林を見るに至りました。千八百六十年には、ユトランドの山林は僅かに十五萬七千エークルに過ぎませんでしたが、四十七年後の千九百七年に至りましては、實に四十七萬六千エークルの多きに達しました。然し、是なほ全州面積の七分二厘に過ぎません。更にダルガスの方法に從つて植林を繼續致しますならば、數十年の後には、數百萬エークルの綠林を見るに至るでありませう。

しかし、植林の效果は、單に木材の收穫に止まりません。第一に其の善い感化を蒙つたものは、ユトランドの氣候でありました。樹木の無い土地は、熱し易く冷め易くあります。故に、ダルガスの植林以前に於ては、ユトランドの夏は、晝は非常に暑くて夜は時に霜を見ました。四六時中に熱帶の暑氣と初冬の霜を

北海ブリチシュ群島とヨーロッパ大陸との間の海

見るといふやうでは、植物は堪つたものではありません。當時ユトランドの農夫が收穫成功の希望を以て植ゑ得た植物は、馬鈴薯・黑麥其の他少數に過ぎませんでした。しかし、植林成功後の彼の農業は一變しました。夏期の降霜は全く止み、小麥・砂糖大根等、北歐產の穀類又は野菜で成熟しないものはないまでになりました。ユトランドは大樅の林の繁茂によつて、良い田園と化しました。木材を與へられた上に、善い氣候を與へられました。

しかし、植林のよい感化はこれに止りませんでした。樹木の繁茂は、海岸から吹送られる砂塵の荒廢を止めました。北海沿岸特有の砂丘は海岸近く喰止められました。北海に瀕する國にとつて敵國の艦隊よりも恐るべき砂丘は、綠の樅の林を以て美事に擊退されたのであります。

霜は消え、砂は去り、其の上に洪水の害が除かれたのであります。是は何れの國に於ても、植林の結果として直ちに現れるものであります。勿論海拔六百尺を以て最高點となすユトランドに於ては、我が邦の如き山國特有な洪水の害を見ることはありません。然し、比較的に少い此の害をすら、ダルガスの事業に依つて免れるを得たのであります。

斯くの如くにして、ユトランドの全州は一變しました。廢れた市邑は再び起りました。新に町村は設けられました。地價は非常に騰貴しました。或所では四十年前の百五十倍に達しました。道路と鐵道とは縱橫に敷かれました。我が四國全島に更に一千平方哩を加へたユトランドは復活しました。戰爭に依つて失つたシュレスウィヒとホルスタインとは、今日已に償はれて尙餘りあるとの事であります。

然し木材よりも、野菜よりも、穀類よりも、畜産よりも、更に貴いものは全國民の精神であります。デンマルク人の精神は、ダルガスの植林成功の結果として、茲に一變したのであります。失望した彼等は、茲に希望を恢復しました。彼等は國を削られて、更に良い國を得たのであります。而も、他人の國を奪つたのではありません。己の國を改造したのであります。熱誠と忍耐と、之に加へるに大樅小樅の不思議な能力に依つて、彼等の荒れた國を回復したのであります。（デンマルク國の話）

若山牧水
名は繁　歌人
昭和三年歿、
年四十四

わだつみの底のごとくにこころ凪ぐ樅の大
樹にむかふ夕ぐれ

若山牧水

沼波瓊音
名は武夫　第一高等學校教授　昭和二年歿、年五十一

十一日
元祿七年（一三五四）十月芭蕉病歿の前日

仁左衞門
大阪御堂前南久太郎町、花屋仁左衞門
芭蕉はその裏座敷に病臥せるなり

其角
榎本氏　芭蕉門下　寶永四

三　時雨

沼波瓊音

十一日の朝も時雨が通つた。

「此方でござりまする。」

と仁左衞門の聲。つゞいて飛石を踏む雪駄の音。

「や、どうも御手數をかけました。」

といふ思ひもかけない其角の聲に、惟然・支考・丈草・去來等爭つて緣に出て、「これはどうして」と異口同音に尋ねた。丈短かな淺黃の羽織に子持縞の重ね着、肥つて活々した其角の姿は、滅入り切つた連衆の心をそゞろに引立たせた。

其角は「御免下され。」と、皆に挨拶もそこそこに、直ぐに病床に通つた。そして、芭蕉を一目見るなり、ぎよつとして一言も口が利けなかつた。彼は今年の五月八日に品川まで見送つた一人で

年(二三六七)歿、年四十七
惟然　廣瀨氏　芭蕉門下　歿年未詳
支考　各務氏　芭蕉門下　享保十六年(二三九一)歿、年六十七
丈草　内藤氏　芭蕉門下　寶永元年(二三六四)歿、年四十二(異說あり)
去來　向井氏　京都に住す　芭蕉門下　寶永元年歿、年五十四
呑舟　大津の人　蕉門
次郎兵衞　伊賀の人　蕉門

あつた。其の時の芭蕉はえらい元氣であつたのに、皮骨連立したこの姿は……。彼は二目と見得ず、うつむいて坐つてゐた。芭蕉も一言も言ひ得なかつた。凹んだ眼からはたゞ涙が流れた。

丈草が見かねて、其角の袖を引いて次の間へ呼んだ。其角は改めて一同に挨拶をした。五人連で伊勢參宮をして、それから和州・紀州・泉州と遊び歩いて、昨夜難波に着くと老師重病との噂、それから直ぐに方々問合はせた末、やつと今朝になつて御堂前と知れて、連に別れ、駕籠を飛ばして來たのだと物語つた。

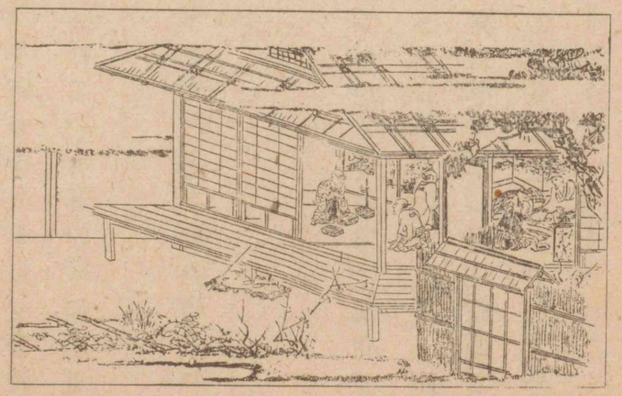
皆が交る交る今までの經過を話した。それでは到底助る見込はない。老師はこゝで終焉であらう。然し、風流の一生を完成して、德化洽く、斯く多數の門弟に圍繞されて果てられる、まことに有難い尊い事だと、其角は師の爲に大きな滿足を覺えた。

この滿足な感じは、不知不識の間に皆も持つやうになつてゐた。突詰め差迫つた後に、今は安靜な氣がこの花屋の裏座敷に滿ちわたるやうにさへ覺えた。

「大變御機嫌が宜しうなりました。皆樣にこちらへおいでになるやうに。」

と呑舟が云つて來た。其角が先に立つて、皆々病室に入つた。其角は改めて師にこゝへ來た迄の旅行の話などした。

芭蕉は珍しく起きてみると云つて、背後から次郎兵衞に支へられ、前に脇息を力に坐つて、さも



病床の芭蕉（芭蕉翁繪詞傳）

朔日
十月朔日　九月二十九日發病

嬉しさうに弟子達の話に耳を傾けた。しかし、直ぐに疲れて、又横になつた。芭蕉の心には、もう煩悶も何もなかつた。妄執だとか、妄執でないとか、そんなことを忘れて、心は春の樣に凪ぎわたつた。

靜かな落着いた日であつた。高いたかい空で鳶の鳴くのが聞えた。芭蕉はよくすやすやと寢た。

「粥が食ひたうなつた。」

夜に入つてから、突然芭蕉がかう云つた時、一同の喜は飛立つばかりであつた。次郎兵衞は早速勝手へ行つて、いそいそと粥を作つて進めた。さも旨さうに中嵩椀で食べた。朔日以來の食事であつた。土鍋の中に殘つたのを、去來は椀にうつして、押しいたゞいて食べた。そして、ふと、

病中のあまりすすりて冬ごもり

正秀
水田氏、芭蕉門下　享保八年(一七二三)歿

といふ句が出來た。それから去來が、一つ師を慰め申すために、深く案じ入らずと、頓に句を作らうではないかと發議した。

「すでに出來合ひがあります。」

と惟然が云つて、丈草と二人笑ひ合ひながら書きつけたのを見ると、

ひつ張りて蒲團に寒き笑ひ哉　惟然
思ひよる夜伽もしたし冬籠り　正秀

といふのであつた。

「昨夜は正秀と二人で寢たところが、寒かつたものだから、一枚の蒲團を互にあつちへ引張り、こつちへ引張つて、とうとう夜明まで落着いて寢られなかつた。」

と惟然が大きな聲で說明をした。皆どつと笑つた。芭蕉も笑つた。人々はそれを見て限りなく嬉しく思つた。

木節　蕉門　醫を業とす
乙州　蕉門　大津の荷問屋（或云驛長）佐右衞門の子

くじ取りて菜飯たたかす夜伽かな　木節
皆子なり蓑蟲寒くなき盡くす　乙州
うづくまる藥のもとの寒さ哉　丈草
吹井より鶴を招かむ初時雨　其角

こんな句が集つた。それを一々惟然が師の側へ行つて吟聲した。丈草の句をもう一度と芭蕉が望んだ。

うづくまる藥のもとの寒さ哉

と又惟然が吟じた。

「丈草でかされた。いつ聞いても寂寞が調うてゐる。面白い、面白い。」

と嗄れた聲で芭蕉は譽めた。

いつになく上機嫌な師の樣子に、皆の心には本復されるかも知れぬといふ望が光つた。其角は木節の樣子を見た。木節は

獨り愁然としてゐた。それとなく其角は木節を一間に呼んで、どうであらうときいた。

「いけません、とてもいけません。あの大病で、絶食の後俄かに食が進んだり、氣分がようなることのあるのは、もう先のない兆で御座ります。」

と木節は答へた。成る程と其角も思つた。病室では笑ひ交りに賑やかな聲が聞えてゐた。（芭蕉の臨終）

正岡子規
名は常規　俳人・歌人　明治三十五年歿　年三十六
下總の國
東は海、西は武藏上野、南は上總、北は常陸下野に接す　東海道の一國　今千葉・茨城・栃木の三縣に屬す

三　俳句鈔

下總の國の低さよ春の水
山吹と見ゆるガラスの曇かな
山門に雲をふき込む若葉かな
夕風や白ばらの花みな動く
五月雨や上野の山も見飽きけり
汐引いて泥に日の照る暑さかな
草市の草の匂や廣小路

正岡子規

穂の白き砂地の麥や汐曇
朝顏のしぼまぬ秋となりにけり
秋風や絲瓜（ヘチマ）の花を吹き落す
雞頭のまだいとけなき野分かな
誰が家の戸叩く音ぞ夜半の秋
鳥にやる菜をむしりけり庭の霜
筆洗の水こぼしけり水仙花
庭石や霜に鳥鳴く藪柑子

谷崎潤一郎
文學者　明治十九年生
六田
奈良縣吉野郡吉野町の一大字
妹背山
同吉野郡にあり　吉野川の兩岸に相對する二丘陵　背山は吉野町、妹山は龍門村に屬す
上市
同吉野郡の町
宮瀧
同吉野郡中莊村の一大字

三　吉野の秋

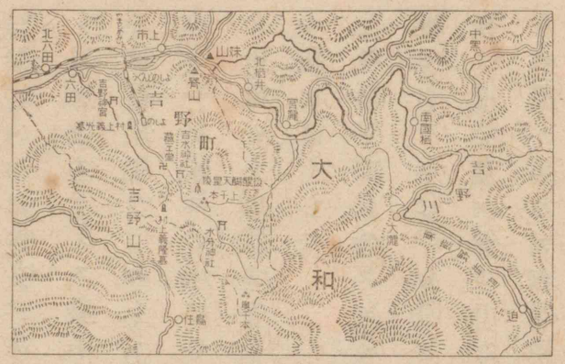
谷崎潤一郎

六田の橋の袂を素通りして、二股の道を左へ、いつも川下から眺めてばかりゐた妹背山のある方へ取つた。街道は川の岸を縫うて眞直に伸び、見たところ平坦な樂な道であるが、上市から宮瀧・國栖・大瀧・迫・柏木を經て、次第に奥吉野の山深く分入り、吉野川の源流に達して大和と紀伊の分水嶺を超え、遂には熊野浦へ出るのだといふ。

奈良を立つたのが早かつたので、われわれは午少し過ぎに上市の町へ這入つた。街道に並ぶ人家の樣子は、あの橋の上から想像した通り、いかにも素朴で古風である。ところどころ、川べりの方の家並が缺けて片側町になつてゐるけれど、大部分は水の眺を塞いで、黑い煤けた格子造りの、天井裏のやうな低い二階

國栖
國樔と書く
同吉野郡の村
大瀧・迫・柏木
共に吉野郡川上村の大字
吉野川
紀ノ川の上流奈良縣に屬する部分の稱
大和
畿内五ケ國の一　奈良縣の管轄
紀伊
南海道六ケ國の一　一部が三重縣に屬する外、和歌山縣の管轄

のある家が兩側に詰まつてゐる。歩きながら薄暗い格子の奥を覗いて見ると、裏口まで土間が通つてゐて、その土間の入口に、



吉野附近圖

屋號や姓名を白く染抜いた紺の暖簾を吊つてゐるのが多い。いづれも表の構は押潰したやうに軒が垂れ、間口が狹いが、暖簾の向ふに中庭の木立がちらついて、離家などのあるのも見える。恐らくこの邊の家は、五十年以上、中には百年二百年も經つてゐるのであらう。が、建物の古い割合に、何處の家でも障子の紙が皆新しい。今貼りかへたばかりのやうな汚れ目のないのが貼つてあつて、ちよつとした小さな破れ目も花瓣型の紙で

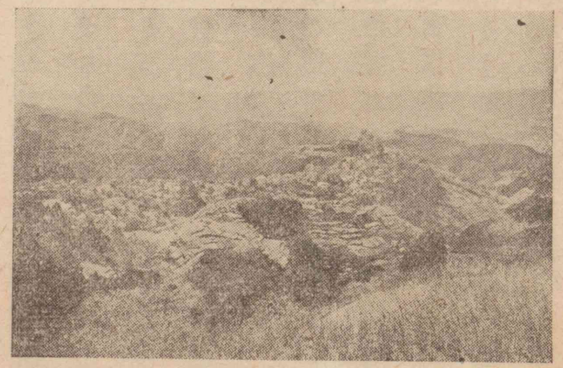
熊野浦　近畿地方の東南海岸　熊野灘に面す　三重縣南牟婁郡
奈良　奈良縣の市　奈良時代の首都

丹念に塞いである。それが澄切つた秋の空氣の中に、冷え冷えと白い。一つは埃が立たないので、こんなに清潔なのでもあらうが、一つはガラス障子を使はない結果、紙に對して都會人よりも神經質なのであらう。その障子の色のすがすがしさは、軒並の格子や建具の煤ぼけたのを、清楚に、品よく見せてゐる。私はその紙の上に照つてゐる日の色を眺めると、「さすがに秋だ。」といふ感を深くした。

實際、空はくつきりと晴れてゐるのに、そこに反射してゐる光線は、明るいながら眼を刺す程でなく、身に沁みるやうに美しい。日は川の方へ廻つてゐて、町の左側の障子に映えてゐるのだが、その照り返しが右側の方の家々の中まで屆いてゐる。八百屋の店先に並べてある柿が殊に綺麗であつた。きざ柿、御所柿、美濃柿等、いろいろな形の柿の粒が、一つ一つ戸外の明りを、そのつ

やつやと熟し切つた珊瑚色の表面に受止めて、瞳のやうに光つてゐる。鹽飩屋のガラスの箱の中にある鹽飩の玉までが鮮かである。往來には軒先に筵を敷いたり、箕を置いたりして、それに消炭が乾してある。何處かで鍛冶屋の槌の音と、精米機のさあさあいふ音が聞える。

上市から宮瀧まで、道は相變らず吉野川の流を右に取つて進む。山が次第に深まるに連れて秋はいよいよ闌になる。われわれはしばしば櫟林の中に這入つて、一面に散敷く落葉の上をかさかさ音を立てながら行つた。此の邊楓が割


吉野の山

野州鹽原
栃木縣鹽谷郡
鹽原町

合に少く、且ひとところにかたまつてゐないけれども、紅葉は今が眞盛りで、蔦・櫨・山漆などが、杉の木の多い峯の此處彼處に點々として、最も濃い紅から最も薄い黄に至る色とりどりな葉を見せてゐる。一口に紅葉といふものの、かうして眺めると、黄の色も、褐の色も、紅の色も、その種類が實に複雜である。同じ黄色い葉のうちにも、何十種といふさまざまな違つた黄色がある。野州鹽原の秋は、鹽原ぢうの人の顔が赤くなると云はれてゐるが、さういふひと色に染まる紅葉も美觀ではあるけれども、此處のやうなのも悪くはない。「繚亂」といふ言葉や、「千紫萬紅」といふ言葉は、春の野の花を形容したものであらうが、此處のは秋の色調であるところの「黄」を基調にした相違があるだけで、色彩の變化に富むことは恐らく春の野に劣るまい。さうしてその葉が、峯と峯との裂け目から溪合ひへ溢れ込む光線の中を、ときどき金

桑摘の里
奈良縣吉野郡
中莊村の一字

粉のやうにきらめきつゝ水に落ちる。

氣が附いてみると、いつの間にか私たちの行手には高い峯が眉近く聳えてゐた。空の領分は一層狹くちゞめられて、吉野川の流も人家も道も、ついもうそこで行止りになりさうな溪谷であるが、人里といふものは狹間があれば何處までも伸びて行くものと見えて、その三方を峯のあらしで圍まれた、袋の奥のやうな凹地の、せゝこましい川べりの斜面に段を築き、草屋根を構へ、畑を作つてゐる所が桑摘の里であるといふ。

大谷といふ家を尋ねると、すぐに分つた。里の入口から五六町行つて、川原の方へ曲つた桑畑の中にある、ひと際立派な屋根の家であつた。桑が丈高く伸びてゐるので、遠くから望むと、舊家らしい茅葺の壹棟と瓦葺の庇だけが、桑の葉の上に、海中の島の如く浮いて見えるのがいかにも床しい。私たちはこゝで多

くの實物や古文書を見せて貰ひ、しづかな幾時をすごした。

私たちが辭して歸らうとすると、

「何もお構ひ出來ませぬが、づくしを召上つて下さいませ。」

と、主人は茶を入れて吳れたりして、盆に盛つた柿の實に、灰の這入つてゐない空の火入れを添へて出した。

づくしは蓋し熟柿であらう。空の火入れは煙草の吸殼を捨てるためのものではなく、どろどろに熟れた柿の實を、その器に受けて食ふのであらう。しきりにすゝめられるまゝに、私は今にも崩れさうなその實の一つを、こはごは手のひらの上に載せて見た。圓錐形の、尻の尖つた大きな柿であるが、眞赤に熟し切つて半透明になつた果實は、恰もゴムの袋の如く膨らんでぶくぶくしながら、日に透かすと瑯玕の珠のやうに美しい。市中に賣つてゐる樽柿などは、どんなに熟れてもこんな見事な色には

ならないし、かう柔かくなる前に形がぐづぐづに崩れてしまふ。主人が云ふのに、づくしを作るには皮の厚い美濃柿に限る。それがまだ固く澁い時分に枝から捥いで、成るべく風のあたらない處へ、箱か籠に入れておく。さうして十日程たてば、なんの人工も加へないで自然に皮の中が半流動體になり、甘露のやうな甘味を持つ。外の柿だと、中味が水のやうに融けてしまつて、美濃柿の如くねつとりとしたものにならない。これを食ふには半熟の卵を食ふやうに、へたを拔取つて、その穴から匙で掬ふ法もあるが、矢張り手は汚れても、器に受けて皮を剝いてたべる方が美味である。しかも、眺めても美しく、たべてもおいしいのは、丁度十日目頃の僅かな期間で、それ以上日が立てば、づくしも遂に水になつてしまふといふ。

そんな話を聞きながら、私は暫く手の上にある一顆の露の玉

に見入つた。そして自分の手のひらの中に、この山間の靈氣と日光とが凝り固まつたやうな氣がした。昔田舍者が京へ上ると、都の土を一握り紙に包んで土產にしたと聞いてゐるが、私がもし誰かから、吉野の秋の色を問はれたら、此の柿の實を大切に持歸つて示すであらう。

友も私も、齒ぐきから腸の底へ沁み徹る冷たさを喜びつゝ、甘い粘つこい柿の實を貪るやうに二つまで食べた。私は自分の口腔に吉野の秋を一杯に頰張つたやうに思つたのであつた。

（盲目物語）

柳田國男
民俗傳說研究家　元貴族院書記官長　明治八年生

二四　火の管理者

柳田國男

人間が家を持ち、家族といふものを引纏め得たのは、火の發見の結果と言つてよろしい。光と溫度と食物との一大中心として、圍爐裏といふものが若し無かつたならば、到底今見るやうな家庭及び社會は出來上らなかつたらう。民の竈と謂ひ、又、戶數を何十何煙と謂つて數へたのも、實は一家の內に火を焚く場處が、たゞ一つしか無かつたことを意味するのである。

その火の管理者を日本では「あるじ」と名づけた。さうして、その管理權の所在を具體化したものが、爐の橫座であつた。橫座とは謂つても、それは正面の席であつて、事實はその左右の敷物が何れも縱に連なつてゐるに對して、家長の座だけは橫疊に敷いてある故に、さういふ名前が古くから生じてゐたのである。

通例は向つて爐の右手、卽ち横座から左になる一側を、茶飲み座、腰元、又は勝手などとも呼んでゐる。その最も横座に接した席は、當然に主婦に專屬した。「へら」卽ち飯匙は其の權力の象徵であり、食物の分配は唯「へら取り」のみの掌る所である。

茶飲み座と相對する他の一側が客座である。これにも席次があつて、最も款待せらるべき者が、一番横座の右近くに坐つた。それから殘りの今一側の爐端が、下座、下郎座、又は木尻である。一段と身分の低いものの坐席である。本來は薪の尻を其方へ向けて置く故の名であつた。煙いのを我慢すべき、居心地のよくない座であつた。

さて、是ほど迄に秩序を正して、家には一つしか火の中心を作らぬやうに努めたのであるが、人の心の變化は是非無いもので、終に室毎に炬燵を置かねばならぬ時代が來た。最初は取扱に

ニユウギニヤ雪山　オーストラリヤの北にある世界第二の大島なるニユウギニヤ島を縱走せる山脈　最高五〇〇〇米

ボルネオ　マライ群島の一大島　面積七四五、九五〇平方粁　世界第三の大島

面倒な年寄などを賺して、行火一個に封じ込めたりしたものが、後には息子が新聞や本を抱へて、自ら獨立を宣するやうになつた。それを後援したのは紙とガラスの障子、次にはランプ、又電氣燈などであつた。

火を焚けば話がはずむといふ原因結果は、よほど久しい大昔からの、不思議なる法則であつたらしい。前年和蘭のローレンス博士の一行が、二度目のニユウギニヤ雪山の探檢を企てた時には、色々考へた末に、ボルネオ内地の土人を人夫に連れて行つた。勇敢で從順で正直なことは申分が無かつたが、たゞ一つの缺點は、夜營地で焚火をさせると、火のある間は話をしてゐてどうしても睡らないから、日中に居眠をして困ることであつた。赤道直下の島に生れた彼等には、通例は火の必要は無い筈であるが、一度高山に登つて焚火の夜の光に接すると、忽ちにして悠

遠なる祖先の感覺が目ざめて、特殊の興奮に誘はれずにはゐなかつたのである。

日本に於ても、昔話は冬のものであり、かつ夜分にするものときまつてゐたのは、本來は必ず圍爐裏に火を燃す時の儀式であつた爲かと思ふ。卽ち横座の主は家の火の管理者であると同時に、更に先天的に夜話の議長であり、且この傳統教育の學校長でもあつたかと思ふのである。（雪國の春）

戸を閉ぢ窓を塞いで、雨であれ風であれ、あらゆる外から來るものを畏れてゐた世の中に於ては、爐の火はまことにたゞ一つの家の中の光明であつた。

（柳田國男）

森鷗外
名は林太郎
醫學博士・文學博士　大正十一年歿、年六十一
二郎
山椒大夫の二男

二五　廚子王

森鷗外

水が溢（ぬる）み草が萌える頃になつた。あすからは外の仕事が始るといふ日に、二郎が邸を見廻る序に、三の木戸の小屋に來た。

「どうぢやな。あす仕事に出られるかな。大勢の人の中には病氣でをるものもある。奴頭の話を聞いたばかりではわからぬから、げふは小屋小屋を皆見て廻つたのぢや。」

藁を擣（ウ）つてゐた廚子王が、返事をしようとしてまだ詞を出さぬ間に、此の頃の樣子にも似ず、安壽が絲を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。

「それに就いてお願がございます。わたくしは弟と同じ所で仕事がいたしたうございます。どうか一しよに山に遣つて下さるやうにお取計らひなすつて下さいまし。」

蒼ざめた顔に紅が差して、目が赫いてゐる。

廚子王は、姉の樣子が變つたらしく見えるのに驚き、又自分になんの相談もせずにゐて、突然柴刈に往きたいといふのをも訝しがつて、只目を睜つて姉を見まもつてゐる。

二郎は物を言はずに、安壽の樣子をじつと見てゐる。安壽は、

「外にない、只一つのお願でございます。どうぞ山へお遣りなすつて。」

と繰返して言つてゐる。

暫くして二郎は口を開いた。

「此の邸では、奴婢のなにがしになんの仕事をさせるといふことは重い事にしてあつて、父が自ら極める。併し垣衣(しのぶぐさ)、お前の願はよくよく思ひ込んでの事と見える。わしが受合つて取りなして、きつと山へ往かれるやうにして遣る。安心してゐ

るが好い。まあ、二人の穉い者が無事に冬を過して好かつた。」

かう言つて、小屋を出た。

廚子王は杵を措いて、姉の側に寄つた。

「姉さん、どうしたのです。それはあなたが一しよに山へ來て下さるのは、わたしも嬉しいが、なぜ出しぬけに賴んだのです。なぜわたしに相談しません。」

姉の顔は喜に赫いてゐる。

「ほんにさうお思ひのは尤もだが、わたしだつてあの人の顔を見るまで、賴まうとは思つてゐなかつたの。ふいと思ひついたのだもの。」

「さうですか、變ですね。」

廚子王は珍しい物を見るやうに姉の顔を眺めてゐる。

奴頭が籠と鎌とを持つて這入つて來た。

山椒大夫
この篇では、丹後の石浦に邸を構へ人買なして農工各業を働かせし分限者

「垣衣さん。お前に汐汲をよさせて、柴を刈りに遣るのださうで、わしは道具を持つて來た。代りに桶と柄杓を貰つて往かう。」

「これはどうもお手數でございました。」

安壽は身輕に立つて、桶と柄杓とを出して返した。

奴頭はそれを受取つたが、まだ歸りさうにはしない。顏には一種の苦笑のやうな表情が現れてゐる。此の男は山椒大夫一家のものの言附を、神の託宣を聽くやうに聽く。そこで隨分情ない、苛酷な事をもためらはずにする。併し生得、人の悶え苦しんだり、泣き叫んだりするのを見たがりはしない。物事が穩かに運んで、そんな事を見ずに濟めば、其の方が勝手である。今の苦笑のやうな表情は、人に難儀を掛けずには濟まぬとあきらめて、何か言つたりしたりする時に、此の男の顏に現れるのである。

三郎
山椒大夫の三男

奴頭は安壽に向つて言つた。

「さて、今一つ用事があるて。實はお前さんを柴刈に遣ることは、二郎樣が大夫樣に申し上げて拵へなさつたのぢや。すると、其の座に三郎樣がをられて、そんなら垣衣を大童にして山へ遣れと仰しやつた。大夫樣は、好い思ひつきぢやとお笑ひなされた。そこで、わしはお前さんの髪を貰うて往かねばならぬ。」

傍で聞いてゐた廚子王は、此の詞を、胸を刺されるやうな思をして聞いた。そして目に涙を浮かべて姉を見た。

意外にも、安壽の顏からは喜の色が消えなかつた。

「ほんにさうぢや。柴刈に往くからは、わたしも男ぢや。どうぞ此の鎌で切つて下さいまし。」

安壽は奴頭の前に項を伸ばした。

光澤のある、長い安壽の髪が、鋭い鎌の一搔にさつくり切られた。

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ、腰に鎌を挿して、手を引合つて木戸を出た。山椒大夫の所に來てから、二人一しよに歩くのはこれが始めてである。

廚子王は姉の心を忖りかねて、寂しいやうな、悲しいやうな思に、胸が一ぱいになつてゐる。きのふも奴頭の歸つた跡で、いろいろに詞を設けて尋ねたが、姉はひとりで何事をか考へてゐるらしく、それをあからさまには打明けずにしまつた。

山の麓に來た時、廚子王はこちらへかねて言つた。

「姉さん、わたしはかうして久し振りで一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはかうして手を引いてゐながら、あなたの方へ

向いて、その禿になつたお頭を見ることが出來ません。姉さん、あなたはわたしに隱して、何か考へてゐますね。なぜそれをわたしにいつて聞かせてくれないのです。」

安壽はけさも額に喜を湛へて、大きい目を赫かしてゐる。併し、弟の詞には答へない。只引合つてゐる手に力を入れただけである。

山に登らうとする所に沼がある。汀には去年見た時のやうに、枯葦が縱横に亂れてゐるが、道端の草には、黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔から右に折れて登ると、そこに岩の隙間から清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つゝ、うねつた道を登つて行くのである。

丁度岩の面に朝日が一面に射してゐる。安壽は、疊なり合つた岩の風化した間に根を卸して、小さい菫の咲いてゐるのを見

石浦
由良にある地名　山椒大夫屋敷と稱するがあり

附けた。そして、それを指さして廚子王に見せて言つた。

「御覽。もう春になるのね。」

廚子王は默つて頷いた。姉は胸に祕密を蓄へ、弟は憂ばかりを抱いてゐるので、兎角受應が出來ずに、話は水が砂に泌み込むやうにとぎれてしまふ。

去年柴を刈つた木立の邊に來たので廚子王は足を駐めた。

「姉さん。こゝらで刈るのです。」

「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」

安壽は先に立つてずんずん登つて行く。廚子王は訝りながら附いて行く。暫くして、雜木林よりは餘程高い外山の頂ともいふべき所に來た。

安壽はそこに立つて、南の方をじつと見てゐる。目は、石浦を經て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔つた

由良
京都府加佐郡由良川口左岸

大雲川
由良川の上流

中山
京都府加佐郡八雲村の一字

伊勢
三重縣

筑紫
福岡縣

岩代
福島縣

川向ふに、こんもりと茂つた木立の中から塔の尖の見える中山に止つた。そして「廚子王や。」と弟を呼掛けた。

「わたしが久しい前から考へ事をしてゐて、お前ともいつものやうに話をしないのを、變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞは刈らなくても好いから、わたしの言ふ事を好くお聞き。小萩は伊勢から賣られて來たので、故郷から此の土地までの道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。お母様と御一緒に岩代を出てから、わたし共は恐しい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて此の土地を逃延びて、どうぞ都へ上つておくれ。

神佛のお導で善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたお父様のお身の上も知れよう。佐渡へお母様の迎に往くことも出來よう。籠や鎌は棄てて置いて樏子(かれひけ)だけ持つて往くのだよ。」

廚子王は默つて聞いてゐたが、涙が頰を傳つて流れて來た。

「そして、姉さん、あなたはどうしようといふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにするつもりでしておくれ。お父様にもお目に掛り、お母様をも島からお連れ申した上で、わたしをたすけに來ておくれ。」

「でも、わたしがゐなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」

廚子王が心には烙印をせられた恐しい夢が浮かぶ。

「それは虐めるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買つた婢をあの人達は殺しはしません。多分お前がゐなくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴を澤山刈ります。六荷までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、あそこまで降りて行つて、籠や鎌をあそこへ置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」

かう言つて、安壽は先に立つて降りて行く。

廚子王はなんとも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いて降りる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上物に憑かれたやうに聰く賢しくなつてゐるので、廚子王は姉の詞に背くことが出來ぬのである。

木立の所まで降りて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。

姉は守本尊を取出して、それを弟の手に渡した。

「これは大事なお守だが、こん度逢ふまでお前に預けます。此の地藏樣をわたしだと思つて、守刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも姉さんにお守がなくては。」

「いゝえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないと、きつと討手が掛ります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては追附かれるに極つてゐます。さつき見た川の上手を和江といふ所まで往つて、首尾好く人に見附けられずに向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺に這入つて隱しておもらひ。暫くあそこに隱れてゐて、討手が歸つて來た跡で、寺を逃げてお出で。」

「でも、お寺の坊さんが隱して置いてくれるでせうか。」

「さあ、それが運試しだよ。開ける運なら、坊さんがお前を隱してくれませう。」

「さうですね。姉さんのけふ仰しやる事は、まるで神樣か佛樣が仰しやるやうです。わたしは考を極めました。なんでも姉さんの仰しやる通りにします。」

「おう、好く聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隱してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。お父樣や、お母樣にも逢はれます。姉さんのお迎にも來られます。」

廚子王の目が姉と同じ樣に赫いて來た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くお出で。」

安壽は弟を連れて、急いで山を降りた。足の運び、も前とは違つて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の湧く所へ來た。姉は樏子に添へてある木の椀を出して、清水を汲んだ。

「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」

かう言つて、一口飲んで弟にさした。

弟は椀の水を飲み干した。

「そんなら姉さん、御機嫌好う。きつと人に見附からずに、中山まで參ります。」

廚子王は、十歩ばかり殘つてゐた坂道を一走りに驅降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向つて急ぐのである。

中山の國分寺今、彌勒堂のみ殘れり

安壽は泉の畔に立つて、並木の松に隱れては又現れる後影を小さくなる迄見送つた。そして、日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸にけふは此の方角の山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎める者もなかつた。

後に同胞を搜しに出た山椒大夫一家の討手が、此の坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠み入つて來る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挾んだ、山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に言つた。

「これへ參つたのは石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が

使ふ奴の一人が、此の山に逃込んだのを慥に認めたものがある。隱れ場は寺内より外にはない。すぐにこゝへ出して貰はう。」

附いて來た大勢が、

「さあ、出して貰はう、出して貰はう。」

と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。其の石の上には今、手に手に松明を持つた三郎が手のものが押合つてゐる。又石疊の兩側には、境内に住んでゐる限りの僧俗が、殆ど一人も殘らず簇つてゐる。これは討手の群が門外で騷いだ時、内陣からも、庫裡からも、何事が起つたかと、怪しんで出て來たのである。

初め、討手が門外から門を開けいと叫んだ時、開けて入れたら

亂暴をせられはしまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開けさせた。併し今、三郎が大聲で逃げた奴を出せといふのに、本堂は戸を閉ぢた儘暫くの間ひつそりとしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰返した。討手のものの中から「和尚さん、どうしたのだ。」と呼ぶものがある。それに短い笑聲が交る。

やうやうの事で、本堂の戸が靜かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い巖疊な體と、眉のまだ黑い廉張つた顏とが、搖めく火に照らし出された。律師はまだ五十歲を越したばかりである。

律師は徐ろに口を開いた。騷がしい討手のものも、律師の姿

東大寺
奈良市雜司町にあり　華嚴宗總本山　本願は聖武天皇開基は良辨　本尊の大佛を以て名高し

を見ただけで默つたので、聲は隅々まで聞えた。

「逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて多人數押寄せて參られ、三門を開けと言はれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思うて、三門を開けさせた。それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうも知れぬ。そこを好う思うてみて、早う引取られたが好からう。惡い事は言はぬ。お身達のためぢや。」

かう言つて、律師は徐かに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。併し、戸を打破つて踏込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもは、只風に木の葉のざわつくやうに囁きかはしてゐる。

此の時大聲で叫ぶものがあつた。

「その逃げたといふのは十二三の小わつぱぢやらう。それならわたしが知つてをる。」

三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、此の寺の鐘樓守である。親爺は詞を續いで言つた。

「そのわつぱはな、わしが午頃鐘樓から見てをると、築泥の外を通つて、南へ急いだ。かよわい代りには身が輕い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。續け。」

朱雀野
京都市の西部

と言つて、三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落着いて寢ようとした鴉が、二三羽驚いて飛立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引返した事を聞いて來た。

中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。跡からは頭を剃りこくつて袈裟を着た廚子王が附いて行く。

二人は眞晝に街道を歩いて、夜は所々の寺に泊つた。山城の朱雀野に來て、律師は權現堂で休んで、廚子王に別れた。

清水寺
京都市下京區清水坂上にあり坂上田村麿の建立と傳ふ

「守本尊を大切にして往け。父母の消息はきつと知れる。」と言ひ聞かせて、律師は踵を旋した。亡くなつた姉と同じ事を言ふ坊樣だと、廚子王は思つた。

都に上つた廚子王は、僧形になつてゐるので、東山の清水寺に泊つた。

籠堂に寢て、あくる朝目が醒めると直衣に烏帽子を着て指貫を穿いた老人が枕元に立つてゐて言つた。

「お前は誰の子ぢや。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞ己に見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆうべこゝに參籠した。すると夢にお告があつた。左の格子に寢てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいといふ事ぢや。けさ左の格子に來て見れば、お前がゐる。どうぞ己に身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己は

師實　藤原頼通の子　白河天皇の朝　關白となる　康和三年（一七六一）歿、年六十

安樂寺　福岡縣筑紫郡太宰府町にありし寺

關白師實ぢや。」

廚子王は言つた。

「わたくしは陸奥掾正氏といふものの子でございます。父は十二年前に筑紫の安樂寺へ往つたきり、歸らぬさうでございます。母は其の年に生れたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡に住むことになりました。そのうち、わたくしがだいぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐しい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ賣られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持つてゐる守本尊は、此の地藏樣でございます。」

かう言つて守本尊を出して見せた。

師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮をし

高見王　桓武天皇の御孫　平氏の祖　高望王の父

永保　白河天皇の御代の年號（一七四一―一七四三）

師實の娘　賢子　白河天皇の中宮

た。それから面背を打返し打返し、丁寧に見て言つた。

「これは豫て聞及んだ、尊い放光王地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを高見王が持佛にしてお出でなされた。これを持傳へてをるからは、お前の家柄に紛れはない。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初に、國守の違格に連坐して筑紫へ左遷せられた平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。己と一しよに館へ來い。」

關白師實の娘といつたのは、仙洞に傳いてゐる養女で、實は妻の姪である。此の后は久しい間病氣でゐられたのに、廚子王の守本尊を借りて拜むと、すぐに拭ふやうに本復せられた。

師實は廚子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏

が謫所へ、赦免狀を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。併し、此の使が往つた時、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名告つてゐる廚子王は、身の窶れる程歎いた。

其の年の秋の除目に、正道は丹後の國守にせられた。これは遙授の官で、任國には自分で往かずに、掾を置いて治めさせるのである。併し、國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこで、山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のやうに思つたが、此の時から農作も工匠の業も前に增して盛になつて、一族はいよいよ富み榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、國守の姉をいたはつた小萩は故鄕へ還された。安壽が亡き跡は懇ろに弔はれ、又入水した沼の畔には、尼寺が立つことになつた。

正道は任國のためにこれだけの事をして置いて、特に假寧を

雜太　眞野村竹田の北。今の三宮・八幡・金丸等をさす

申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の國府は雜太といふ所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

ある日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立並んだ所を離れて、畑中の道にかかつた。空は好く晴れて、日があかあかと照つてゐる。正道は心の中に、「どうしてお母樣の行方が知れないのだらう。若し役人なんぞに任せて調べさせて、自分が搜し歩かぬのを、神佛が憎んで逢はせて下さらないのではあるまいか。」などと思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、だいぶ大きい百姓家がある。家の南側の疎らな生垣の內が、土を敲き固めた廣場になつてゐて、其の上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈取つた粟の穗が干して

ある。その眞中に襤褸を着た女がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず此の女に心がひかれて、立止つて覗いた。女の亂れた髪は塵に塗れてゐる。顏を見れば盲である。正道はひどく哀れに思つた。そのうち女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞分けられて來た。それと同時に、正道は瘧病のやうに身内が震つて、目には涙が湧いて來た。女はかういふ詞を繰返してつぶやいてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ。
廚子王戀しや、ほうやれほ。
鳥も生あるものなれば、
疾う疾う逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、此の詞に聞惚れた。そのうち臓腑が煮え返るやうになつて、獸めいた叫が口から出ようとするのを、齒を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られた繩が解けたやうに垣の内へ驅込んだ。そして足には粟の穗を踏散らしつゝ、女の前に俯伏した。右の手には守本尊を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に押當ててゐた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知つた。そして、いつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でじつと前を見た。其の時干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。「廚子王」といふ叫が女の口から出た。二人はぴつたり抱き合つた。（鷗外全集）

吉田松陰
諱は矩方　通稱寅次郎　慷慨憂國の先覺者　安政六年（二五一九）歿年二十九

妹
千代　兒玉兵衛門祐之に嫁し、後芳子と改む

そもじの御家
兒玉家

二六　妹へ

吉田松陰

十一月廿七日と日づけ御座候御手紙、幷に九ねぶみかん・かつをぶしともに、昨晩相屆き、かこひの内はともしくらく候へども、大がい相わかり候まゝ、そもじの心の中を察しやり、涙が出てやみかね、夜着をかむりてふせり候へども、如何にも堪へかね、又起きて御文くりかへし見候ひて、いよいよ涙にむせび、つひにそれなり寐入り候へども、間なく目がさめ、よもすがら寐入り申さず、色々なる事思ひ出し申候。わもじは、父母様や兄様の御蔭にて、着ものもあたゝかに、食べものもゆたかに、あまつさへ筆・紙・書物まで何一つ不足これなく、寒きにもまけ申さず候間、御安心なさるべく候。そもじの御家、をばさまも、御なくなりなられ候事なれば、そもじ萬端心懸け候はでは相すまぬ事、殊にをばさまも年、

萬吉
妹千代の長男

おとゝさま
杉百合之助常道　松陰の實父

梅にい樣
杉梅太郎　松陰の實兄

まし御齡高くならせられ候事ゆゑ、別して御孝養を盡くし候へかし、又萬吉も日々ふとり申すべく候へば、心を用ひて育て候へ。赤穴のばあさまは御まめに候や、御老人の御事、萬事氣をつけて上げ候へ。かゝる御老人は家の重寶と申すものにて、金にも玉にもかへらるるものにこれなく候。そもじ事は、いとけなき折より心得よろしきものと思ひ、一入親しく思ひ候ひしが、此のほど御文拜し、入らざる事までも申し進じ候なり。

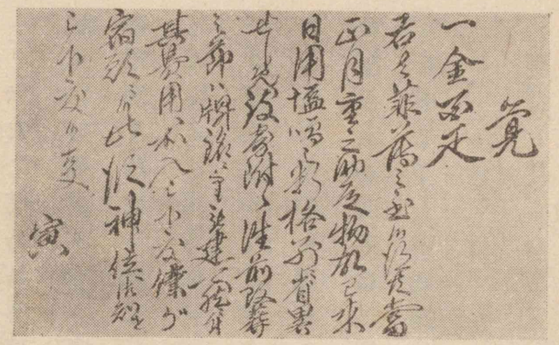
三日　大にい

別にくだらぬ事三四枚認めつかはし候間、おとゝさまか梅にい樣に、讀みよきやうに寫してもらひ候へ。少しは心得の種に

吉田松陰肖像

貝原先生
貝原益軒 儒者 名は篤信 通稱久兵衛 正德四年（一三七四）歿、年八十五

もなり申すべく候。さて御多用の中にも、手習・讀物などは心がけ候へ。正月には、一日どもは藪入り出來申すべくや。どうぞあに様の御休日を選び參り候ひて、心得になる話ども聞き候へ。拙も其の日分り候はば、昔話なりとも認めて遣はし申すべし。又正月にはいづくにもつまらぬ遊び事をするものに候間、それよりは、何か心得になる本なりとも讀んでもらひ候へ。貝原先生の大和俗訓・家道訓などは、圓き耳にもよくきこゆるものに候。又淨瑠璃本なども心得ありてきき候へば、ずゐぶん役にたつものに候。



吉田松陰筆蹟

大和俗訓
貝原益軒著
八卷 道德禮儀の書
家道訓
六卷 一家主宰の戒を記したるもの

さて又別に認めたる文につき、歌をよみ候間こゝにしるし侍りぬ。

たのもしや誠の心かよふらん文みぬさきに君を思ひて

右認めたるは、そもじを思ひ候より筆をとりぬるが、其の夜、そもじの文の到來せしは誠の心の文より先に參りたるにやと、いとたのもしく存じ候まゝかくよみたり。（吉田松陰書簡集）

身はたとひ武藏の野べに朽ちぬともとどめ置かまし大和魂

吉田松陰

土井晩翠
名は林吉　英文學者、詩人
第二高等學校名譽教授　明治四年生

南陽
支那河南省内にあり　諸葛亮の故郷

梁歩吟
梁父(甫)吟
諸葛亮作詩

二七　出廬

嗚呼南陽の舊草廬、
二十餘年のいにしへの、
夢はたいかに安かりし、
光を韜み香をかくし、
隴畝に民と交れば、
王佐の才に富める身も、
たゞ一曲の梁歩吟。

閑雲野鶴空濶く、
風に嘯く身はひとり、
月を湖上に碎きては、

土井晩翠

ゆくへ波間の舟ひと葉、
ゆふべ暮鐘に誘はれて、
訪ふは山寺の松の影。

江山さむるあけぼのの
雪に驢を驅る道の上、
寒梅瘦せて春早み、
幽林影を穿つとき、
伴は野鳥の暮の歌、
紫雲たなびく洞の中、
誰そや棊局の友の身は。

其の隆中の別天地、

空のあなたを眺むれば、
大盗競ひはびこりて、
あらびて榮華さながらに、
風の枯葉を掃ふごと、
治亂興亡おもほえば、
世は一局の棊なりけり。

其の世を治め世を救ふ
經綸胸に溢るれど、
榮利を俗に求めねば、
岡も臥龍の名を負ひつ、
亂れし世にも花は咲き、
花また散りて春秋の

遷りはこゝに二十七。

高眠遂に永からず、
信義四海に溢れたる
君が三たびの音づれを、
背きはてめや知己の恩、
羽扇綸巾風輕き
姿は替へで立ちいづる、
草廬あしたのぬしや誰。

古琴の友よ、さらばいざ、
曉さむる西窓の
殘月の影よ、さらばいざ、

白鶴歸れ、嶺の松、
蒼猿眠れ、谷の橋、
岡も替へよや臥龍の名、
草廬あしたは主もなし。

成算胸に藏まりて、
乾坤こゝに一局棊、
ただ掌上に指すがごと、
三分の計はや成れば、
見よ、九天の雲は垂れ、
四海の水は皆立ちて、
蛟龍飛びぬ淵の外。

（晩翠詩集）

二八　狐塚

主「此のあたりの者で御座る。某山田を數多持つて御座る。當年は殊の外よう出來て御座る。さりながら、此の頃は鹿・猿・貉が出て田を荒します。太郎冠者を呼びいだし、山田の番にやらうと存ずる。

やいやい、太郎冠者あるか。

太「はあ、御前に居ります。」

主「汝を呼出す事、別の事でない。當年は身どもの山田が殊の外よう出來た。それにつき、此の頃は鹿・猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へいて、鳥・獸も來たら、追うて番をせい。」

太「畏まつて御座る。私一人で御座るか。」

主「いや、後程は次郎冠者も見舞にやらう程に、先づ行け。」

太「心得ました。」
主「さりながら、此の中は狐塚の狐が出てばかすと云ふ程にばかされぬ様にして番をせい。」
太「それはこはい事で御座る。もはや参ります。」
主「明日早々歸れ。」
太「はあ。」
主「えい。」
太「はあ。」
太「さてもさても迷惑な事言附けられた。夜晝使はるるといふは氣の毒な事ぢや。参る程に是ぢや。先づ是にゐて番を致さう。」
主「太郎冠者を山田へ番に遣はして御座る。定めてさびしうしてゐるで御座らう。次郎冠者を見舞に遣はさうと存ずる。やいやい、次郎冠者あるか。」

次「これに居ります。」
主「汝は大儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。」
次「畏まつて御座る。」
主「小筒も少し持つて行け。」
次「心得ました。」
次「これはさて、迷惑なれども、参らずばなるまい。主命ぢや、是非に及ばぬ。これは暗うてどこやら知れる事でない。呼ばはつて見よう。
ほういほういほうい、太郎冠者。やい、どこに居るぞ。」
太「さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。おのればかさるる事ではないぞ。先づ眉毛をぬらさう。」

次「ほういほうい。」

狂言狐塚

太「ほういほうい。こゝにゐるわ。」
次「どこにゐるぞ。」
太「こゝにゐるわ。やあ、次郎冠者か。」
次「なかなか。頼うだ人が言附けられて伽に來たわ。」
太「ようこそおりやつたれ。さてもさてもようばけた。そのまゝの次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身共が追うたればこなたの山へくわらくわらと逃げたわ。」

次「それはでかした。」
太「どつこへ。やる事ではないぞ。」（後から鳴子の縄で次郎冠者を後手に縛る）
次「これは何とするぞ。」
太「何とするとは。狐めばかさるる事ではないぞ。」
次「おれは次郎冠者ぢや。次郎冠者ぢや。」
太「何の次郎冠者。おのれ縛つて、此の柱にくゝつて置いて。狐殿、よい體の。おのれ今に皮を剝いでくれうぞ。」

主「太郎冠者。次郎冠者を山田へ遣はして御座る。心もとなう御座る。見に參らうと存ずる。ほういほうい。太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほういほうい。」

太「是はいかな事。また狐が出をつた。あれは賴うだ人の聲ぢや。是も捕へてやらう。
ほうい、ほうい。」
主「ほうい、ほうい。どこにゐるぞ。」
太「こゝにゐます。」
主「やあ、これにゐるか。淋しからうと思うて見舞に來た。次郎冠者を先へ遣したが。」
太「なかなか。あれにゐます。
これはいかな事。是もようばけた。そのまゝ賴うだ人ぢや。
縛つてくれう。
がつきめ、おのれだまさるる事ではないぞ。」
主「これは何とするぞ。身共ぢや。」
太「おのれもようばけた。先づ縛つて、此の大木にくゝりつけて

置いて、致しやうがある。狐は松葉でふすべるといやがるといふ。ふすべてやらう。さあさあ、尾を出せ。鳴け、鳴け。」
主「おのれ太郎冠者め。主を此の樣にして。罰當りめ。」
太「何を狐殿いはるる。さらば次郎冠者もふすべてやらう。さあさあ、鳴け、鳴け。こんこんといへ。」
次「これは何とする。何とする。」
太「ありや、ありや、いやがるわ、いやがるわ。おのれ二匹ながら鎌を取つて來て、皮を剝いでくれうぞ。待つてをれ。ようばかさうと思うたなあ。唯今殺してくれうぞ。鎌を取つてくるぞ。」
主「さてもさても氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。」

次「左様で御座る。此方は賴うだ御方か。」
主「なかなか。汝も縛りをつたか。」
次「いかにも縛られました。」
主何と鎌を取つて來る、殺さうと言ひをつたが、何とそちが繩は
ほどかれぬか。」
次「されば。どうやら繩が解けさうに御座る。解けますぞ、解け
ますぞ。さあ解きました。どれどれ、此方も解きませう。さ
てもさても憎い奴で御座る。何としたもので御座らう。」
主「いやいや、此の體ではそばへよるまい程に、もとの樣にしてゐ
て、これへ來たらば捕へて、あいつをゆりにあげう。」
次「一段とよう御座らう。」
主「さあ、是へよつて元の樣にしてゐよ。」
次「心得ました。」

太「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で打殺してくれう。
さあ今打殺すぞ、打殺すぞ。」
主「そりや、次郎冠者。」
次「心得ました。」
主「おのれにつくいやつの。次郎冠者、足を持て。」
次「心得ました。」
主「さあ、ゆりに上げ、ゆりに上げ。」
太「これは何と狐どもするぞ。」
主「狐とは。まだおのれめは、にくいやつの。縛りをつたがよい
か。これがよいか。」
太「さては賴うだ人。次郎冠者か。許させられ。まつぴら御ゆ
るされ。まつぴら御ゆるされ。」
次「どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。」（續狂言記）

新村出
文學博士　京都帝國大學名譽教授　明治九年生

足利時代
室町時代　足利氏の政權を執りたる時代（二〇五三―二二三三）
德川時代
德川氏の政權を執りたる時代（二二六三―二五二七）

二九　日本一

新村出

いつの時代にも一種の流行語といふものがあつて、其の時代の反映を成してゐる。我等が幼い耳に慈母から聞いたお伽話の中にある日本一の黍團子や、日本一の花咲爺などいふ場合に使はれた「日本一」の語も、其の起源を探つてみると、やはり一時代の流行語として廣く用ひられた語で、確に其の時代の國民精神を表現してをるのである。尤も、日本一などといふ褒め詞は、いかなる時代でも誰でも自らこしらへて使ひ得られる詞には相違ないけれども、それが一時代に非常に流行してゐるのを見て、我々には其の當時の國民の思潮がいかばかり高まり、上下の元氣がいかばかり旺盛であつたらうと想像されるのである。日本一といふ形容語は、足利時代より德川時代の初期へかけての

「すべて人には云々」
清少納言の言枕草子に見ゆ
濱松中納言物語
五卷　平安朝物語　作者成立年代未詳
大鏡
歴史物語　作者に諸説あり　白河天皇以後の成立と見らる
鎌倉時代
源頼朝の開府より北條高時滅亡まで（一八五二―一九九三）
平治物語

流行語と自分は認めるが、其の以前にも用ひられなかつたのではない。優にやさしき平安朝の宮廷裡の婦人でさへ、きかぬ氣の者であると、「すべて人には一に思はれずばさらに何にかせん。二三にては死ぬともあらじ。一にてをあらん。」などといふ位の見識があつたのだから、日本一といふほどの考がないわけはあるまい。濱松中納言物語・大鏡などはもはや日本一・日本第一といふ賞美語が、いづれも二ケ所ほど見える。又下つて鎌倉時代になると、平治物語や平家物語の如き軍記物には、「日本一の不覺人」とか、「日本一の剛の者」とかいふ文句があり、當時代の初期の文書にも、「日本第一の天狗」などと出て來るので、段々廣く用ひられて來たことがわかる。然し、足利時代になると、この俗語は益〻頻繁に用ひられ、又其の意味も頗る擴張されてをるのである。曾我物語には、「日本一のふかく人」といふ句が出てをるが、義經記に

三卷　戰記物語　保元物語と姉妹篇をなす　作者諸說あり
平家物語　十二卷　源平爭亂を敍せる軍記物語　作者は信濃前司行長說有力
曾我物語　十二卷　戰記物語　作者不明
義經記　八卷　戰記物語　作者不明
靜御前　鎌倉時代の白拍子　晩年未詳

なると、都合數ケ所に見えてをり、例へば、靜御前を讃美して「舞に於ては日本一にて候」とか、「日本一といふ宣旨をたまはりけると承り候ひし」などと、最上級の讃美語としてあちこちに使はれてをる。謠曲などに、「日本一の御機嫌にて候」、「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ」、「日本一烏帽子が似合ひ申して候」などの使ひざまになると、いかにこの語が流行したかがわかり、從つて意味が大分擴がつて來たことが知れる。丁度同じ頃であらう、御伽話に黍團子をほめても日本一といひ、花咲爺をほめても日本一といひ、むやみにこの語を使つてをる。謠曲に用ひてある以上は、狂言の上にあるのは當然の話で、「日本一の下手」といひ、「日本一の大ふ」などと見える。要するに、足利時代は國民の元氣の大いに勃興した時代である。韓國や支那の沿岸を荒しまはつて、所謂倭寇を試みた時代である。高麗及び朝鮮との交際や明と

高麗　朝鮮古代王朝の一（五七八―二〇五二）
明　支那王朝名の一　太祖漢武帝の樹立せる國（一三六八―一六四四）

の交通も盛であつた時代である。末期になると、西洋や南洋との交通も開けたし、對外精神の發展は遂に征韓の擧を起さしめるやうになつたのである。

かくの如く、外に向つて大いに膨脹し侵略し飛躍せんとするの元氣を持つてゐた當時の我が國民は、內に在つては常に覇者たらんとする氣慨を有し、日本一・天下一・三國一にならうといふ心掛があつたものと思はれる　（南蠻廣記）

手塚が郎等、齋藤別當に押並べてむずと組む、別當、「あつぱれおのれは、日本一の剛の者と組んでうずよな、うれ」とて、わが乘つたりける鞍の前輪におしつけて、ちつともはたらかさず、首かき切つて捨ててげる。

（平家物語）

三〇 繪馬

繪馬神社

甕庭篁村

神社佛閣に繪馬を奉ること、其の昔は眞の馬を牽きて捧げしなるを、後に繪に畫きて奉納したるが、繪馬の字の如く、馬の繪に限りたるならん。其の繪馬より思ひ附きて、さまざまの繪をも畫きて堂社へ奉納し、信仰奉謝の意を表したるなり。此の事はなかなかに古く、太平記の阿保・秋山の河原軍の條に「されば其の頃靈佛・靈社の御手向、扇團扇のばさら繪にも、阿保・秋山が河原軍とて書かせぬ人はなし」とあり。此の御手向とあるは、繪馬の額の類をさしたるなり。

阿保・秋山の河原軍は正平年中の事なるが、「其の頃」といひたれば、直ちに其の年中の事ならず。太平記の作者の頃とするも、足利中世の事なるべし。其の頃より既に靈佛・靈社に名高き武勇

甕庭篁村　名は與三郎　文學者　大正十一年歿、年六十八

太平記　四十巻　花園天皇の朝より後村上天皇の朝まで凡そ五十年間の歴史　作者不詳　河原軍のことは第二十九巻に見ゆ

正平　後村上天皇・長慶天皇の御代の年號（二〇〇六―二〇

の事などを畫きて奉納すること盛なりしとせば、繪馬の額には雪舟・雪村の名畫もありしか知るべからず。されど燒亡に罹り、風雨に曝されて、京都清水寺の繪馬の額にも、天正以前のは無しといふ。繪馬の名畫といへば、古法眼元信の馬と先づいはれて、名畫・名筆の名あるはそれ以後のもの多し。此の繪馬の額を堂社の寶前に掛け奉る趣意は、前にいふ如く、信仰者が祈願奉謝の爲なれど、後には畫工が一世に名を振ひ、末代に蹟を留むる名譽の展覽會の如くなりて、其の畫に精神を注ぐこと尋常ならず。これ、繪馬は諸國の人の集り來りて見るものにて、一筆一畫の粗誤ありても、直ちに指摘せられて、其の過を改め難ければなり。

京都清水寺に最も古しと傳へらるる、長谷川久藏信春の時致。朝比奈草摺引の圖は、天正二十壬辰卯月十七日とありて、其の勇壯のさま、見る人腮を振つて感歎しけるが、或時猪熊の染物屋の

雪舟　畫僧　俗名は小田等楊　寛正中、明に入り、後、周防の靈谷寺及び石見の大喜庵に住す　永正三年（二一六六）寂、年八十七

雪村　畫僧　周文の畫風を慕ひて一家を成す　歿年不詳

天正　正親町天皇・後陽成天皇の御代の年號（二二三三―

（一三五二）
古法眼元信　狩野家第二世の畫匠　足利氏に仕へて繪所預、越前守に任ぜらる　永祿二年（一二一九）歿、年八十四
長谷川久藏信春　雪舟派の畫家　時致　曾我五郎時致　剛勇の士
朝比奈　名は義秀　和田義盛の第三子　豪勇の士
猪熊

下女が朝比奈の袴の襞の折れたる上にもかまはず舞鶴の紋を畫きたるを見出し、「折目も皺もなき繪なり。」と笑ひしより、都中の取沙汰になりしを、信春聞きて、一生此の事を苦に煩ひたりといふこと、西鶴の織留に出でたり。此の如く、繪馬は萬人の見る所、いづれいづこに如何なる繪難坊あるも知るべからず。繪馬の額を畫きて堂社に掲ぐる事は、其の頃の繪師の死活問題ともいふべきほどの大事なりしなり。同じ御寺に、延享三年に服部梅信といふ畫工、同じく草摺引の題を掲ぐ。これまた朝比奈が鶴の丸の紋を、襞も折目もかまはず畫きこなしたり。或人難じて、「天正の信春舞鶴を襞に拘らず畫きて、一生の悔をなしたり。同じ堂に同じ圖柄を畫きて、其の過を再びする事如何にぞや。」と云ひしに、梅信傍を向きて、「是は掛額を畫く畫家の法なり。」とのみにて取合はざりしとぞ。信春は古法眼の弟子にして、其の筆法を

京都市を南北に走る通
西鶴　井原氏　俳人　小説家　元祿六年（一三五三）歿、年五十二
織留　西鶴織留　六卷
延享三年　櫻町天皇の御代（一四〇六）
服部梅信　浮世繪師
淺草觀音　淺草寺　東京市淺草區にある天台宗の寺
嵩谷

得たりと稱せられ、舞鶴の非難を氣病みにして終りしといへども、其の額は名畫として今に尊重せられ、掛額を畫く法を得たり。と自ら安んじたる服部梅信は、其の畫系すら定かならずして、見る人其の畫を妙とせず。其の得失は知るべきならずや。

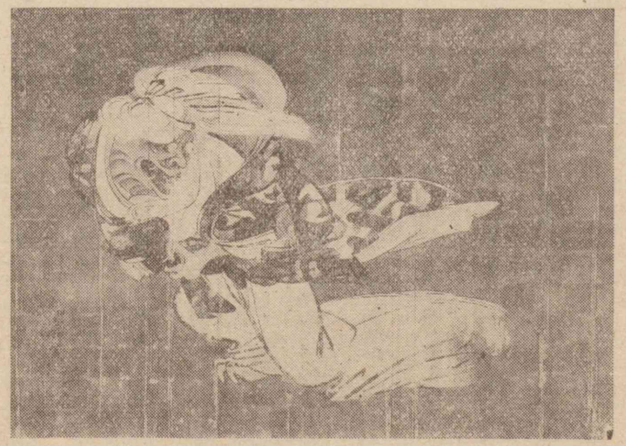
鶴の圖（嵩谷筆）

淺草觀音に掲ぐる嵩谷の鶴の額も、はじめ猪の早太は小刀を逆手に持ちゐたりしを、或人注意して、「平家物語の本文にも『猪の早太つと寄り、落つるところを取つて押へ、柄も拳も通れ通れと、續けざまに九刀ぞ刺したりける。』とあれば、刀を順に持ちて刺すやうにありたし。」と云

畫家　又居龍翁と號す　文化元年（二四六四）歿、年六十四
猪の早太　源頼政が鵺退治に伴なひたりしといふ郎黨
王子稲荷　東京市王子區にあり
柴田是眞　畫家・蒔繪工　明治二十四年歿、年八十五
天保十一年　仁孝天皇の御代（二五〇〇）

ひしに、嵩谷悅びて、一旦掛けたるを引きおろして、今の如く書直して、名譽を殘したり。王子稲荷神社の額堂の名畫、柴田是眞翁筆の鬼女圖は、天保十一年翁二十四歳の作にして、また一代の作品中の秀逸のものなるが、翁自身も晩年幾度か此の圖を試みたれど、また此の如く會心のものを作る能はざりきといふ。

予輩また故芳年氏に聽ける事あり。氏は此の是眞の額を欽慕して、時々王子稲荷へ詣りてこれを眺め、密かに此の圖を作



鬼女圖（是眞筆）

芳年　畫家　月岡芳年　本姓は吉岡、號は大蘇　明治二十五年歿、年五十四
國華　瀧精一主宰の美術雜誌
瀧文學士　今は文學博士名は精一　東京帝國大學名譽教授

りたることあれども、遠く及ばず、筆を抛ちて歎息したること數度なりといへり。名工、名工を知るといふべし。此の繪の國華に出でし時、瀧文學士に對し「是眞翁二十四歳の作とすることは、裏書の年號及び社傳によりて確實なるべきが、後年いかに名大家と崇められしとは云へ、未だ二十四歳の若輩にして此の大作を揮毫せんこと、自ら名のためにしたりとしても、餘りに大膽なり。又祈願主ありて依頼したりとしても、此の時二十四歳の是眞に、此の桐柾目、金箔置きの大額に筆をつけさせんこと、如何あるべきか。」と問ひたるに「さればなり、是眞に伯父あり。そは有力なる大工の棟梁にて、王子稲荷の今の社を建てたれば、其の記念ともして、若き甥に此の大畫を託せしならん。是眞も我が伎倆を一世に紹介せんとする伯父の慈愛に感じて、畢生の力を籠めしものならん。」と答へられぬ。傳歴を聽けば、一段と名畫の趣味

瀧の川
荒川の支流
王子稲荷神社附近を流る往時、紅葉の名所として知られたり
渡邊の綱
源頼政の臣

を深く感じぬ。瀧の川の紅葉狩に鬼女といへば緣あり。これは渡邊の綱に切られし腕を取りかへす鬼女の額なり。散策のついでに立寄りて見れば、景色にも勝る趣あるべし。二十四歳にして此の名畫あり。書畫・文藝といはず、諸道にたづさはる者仰ぎなば、悚然として怖るるところあるべきか。そは鬼女の勢の凄まじき外に、自ら奮勵感憤するところある故なるべし。

繪馬は昔の畫工の大展覽會なり。繪馬は畫工畢生の榮辱の懸るものなり。されば見るに心のあるべきものとこそ言ふべけれ。（雀　躍）

夏目漱石
名は金之助
英文學者　大正五年歿、年五十

運慶
鎌倉時代の有名なる佛師
歿年不詳

護國寺
眞言宗　東京市小石川區大塚坂下町

仁王
山門の守護神

三　仁王

夏目漱石

運慶が護國寺の山門で仁王を刻んでゐるといふ評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集つて、頻りに下馬評をやつてゐた。

山門の前五六間の所には大きな赤松があつて、其の幹が斜に山門の甍を隱して、遠い青空まで伸びてゐる。松の綠と朱塗の門とが、互に照り合つて見事に見える。其の上、松の位置が好い。門の左の端を、眼障りにならないやうに斜に切つて行つて、上になるほど幅を廣く、屋根までつき出してゐるのが、何となく古風である。鎌倉時代とも思はれる。

ところが、見てゐるものはみんな自分と同じく明治の人間である。其の中でも車夫が一番多い。辻待をして退屈だから立

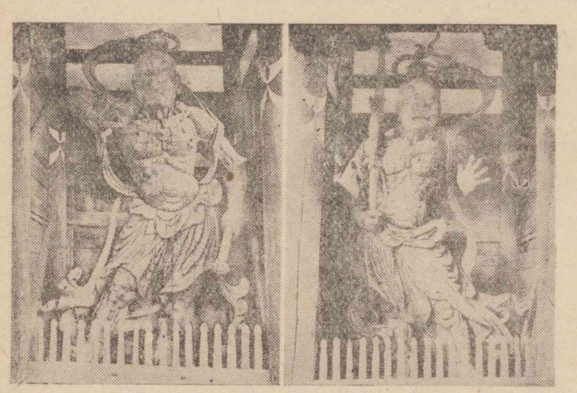
つてゐるに相違ない。
「大きなもんだなあ。」
と言つてゐる。
「隨分骨が折れるだらう。」
とも言つてゐる。さうかと思ふと、
「へえ、仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえさうかね。私やまた仁王はみんな古いのばかりかと思つてた。」
と言つた男がある。
「どうも強さうですね。なんだつてえますぜ、昔から誰が強いつて、仁王ほど強い人あ無いつていひますぜ。何でも日本武尊よりも強いんだつてえからね。」
と話しかけた男もある。この男は尻を端折つて、帽子を被らずにゐた。よほど無教育な男と見える。

日本武尊
景行天皇の皇子　御名は小碓尊

運慶は、見物人の評判には委細頓着なく鑿と槌を動かしてゐる。一向振向きもしない。高い所に乘つて、仁王の顏の邊を頻りに彫り拔いて行く。
運慶は頭に小さい烏帽子のやうなものを載せて、素袍だか何だか分らない大きな袖を背中に括つてゐる。その樣子がいかにも古臭い。わいわい言つてる見物人とはまるで釣合が取れないやうである。自分はどうして今時分まで運慶が生きてゐるのかなと思つた。どうも不思議な事があるものだと考へながら、やはり立つて見てゐた。
しかし運慶の方では、不思議とも奇態とも頓と感じ得ない樣子で、一所懸命に彫つてゐる。仰向いてこの態度を眺めてゐた一人の若い男が、自分の方を振向いて、
「流石は運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はたゞ仁

王と我とあるのみだといふ態度だ。天晴だ。」

と言つて褒めだした。



右運慶左快慶作仁王（奈良東大寺南大門）

自分はこの言葉を面白いと思つた。それでちよつと若い男の方を見ると、若い男はすかさず、

「あの鑿と槌の使ひ方を見給へ。大自在の妙境に達してゐる。」

と言つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り拔いて、鑿の齒を竪に返すや否や、斜に上から槌を打下した。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の聲に應じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻

の側面が忽ち浮上つて來た。その刀の入れ方が、いかにも無遠慮であつた。さうして少しも疑念を挾んでゐないやうに見えた。

「能くあゝ無造作に鑿を使つて、思ふやうな眉や鼻が出來るものだな。」

と、自分はあんまり感心したから獨言のやうに言つた。するとさつきの若い男が、

「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんぢやない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋つてゐるのを、鑿と槌の力で掘出すまでだ。まるで土の中から石を掘出すやうなものだから、決して間違ふ筈はない。」

と言つた。

自分も此の時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。

果してさうなら、誰にでも出來る事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫つてみたくなつたから、見物をやめて家へ歸つた。

道具箱から鑿と金槌を持出して、裏へ出て見ると、先達ての暴風で倒れた樫を、薪にするつもりで木挽に挽かせた手頃な奴が、澤山積んでゐつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢よく彫り始めてみたが、不幸にして仁王は見當らなかつた。その次のにも運惡く掘當てる事が出來なかつた。三番目のにも仁王は居なかつた。自分は積んでゐる薪を片つ端から彫つてみたが、どれもこれも仁王を藏してゐるのはなかつた。遂に明治の木には到底仁王は埋つてゐないものだと悟つた。それで運慶が今日まで生きてゐる理由もほゞ解つた。（漱石全集）

岡本綺堂
名は敬二、劇作家、昭和十四年歿、年六十八

元久元年土御門天皇の御代（一八六四）

二重家體
舞臺用語、緣側などに見せるために、本舞臺の上に、一段高くしつらへたるもの
上手・下手
見物席より向

三　夜叉王

岡本綺堂

人　面作師　夜叉王　源左金吾頼家
夜叉王娘　桂　下田五郎景安
同　楓　修禪寺の僧

時　元久元年七月十八日。

處　伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に、舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の太樹、其の後は畑を隔てて塔の峯つゞきの山、又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

つて右を上手左を下手といふ

楓門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿(二十三歳)、跡より下田五郎景安(十七、八歳)、頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これこれ、將軍家の御微行ぢや。粗相があつてはなりませぬぞ。

楓　はつと平伏す。頼家主從進み入れば、夜叉王も出で迎へる。

夜叉　思ひも寄らぬ御成とて、何の設けもござりませぬが、先づあれへお通り下さりませ。

頼家は緣に腰を掛ける。

夜叉　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察してをらう。我が面體を後の形見に殘さんと、曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經るも出來せず、幾度か

延引を申し立てて、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎　多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せ附けられしは當春の初、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家　予は生れ附いての性急ぢや。待てど暮らせど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣はすこと無用と、予が直き直きに催促に參つた。おのれ何故に細工を怠りをるか。仔細を云へ、仔細を申せ。

夜叉　御立腹恐れ入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職のほまれ、身の面目。いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年。未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に

適ふ程のもの一つも無く、更に打替へ、作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

頼家　えゝ、催促の都度に同じ事を……。其の申譯は聞きあいたぞ。

夜叉王（劇）

五郎　此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉　其の期日は申し上げられません。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思召すか。家を造り、塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生（しう）無き粗（あら）木を削り、男女・天

夜叉　梵語
「勇健」の義
鬼神の類
羅刹　梵語
人を食ふ魔

三島の社　靜岡縣田方郡三島町にあり事代主神を祀る

人・夜叉・羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄（たましひ）を打込む面作師。五體に漲る精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るる如く彼に通ひて、始めて面も作られまする。但し、其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年・二年の後か、我ながらしかとはわかりませぬ。

僧　これこれ夜叉王殿、上樣御自身も仰せらるる如く、至つて御性急でおはしますぞ。三島の社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めの無い事ばかり申し上げたら、御痞癖が愈募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、しかと御返事を申すがよからうぞ。

夜叉　ぢやというて、出來ぬものはなう。

僧　何の、こなたの腕で出來ぬことがあらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば京・鎌倉までも聞えた者ぢや

に……。

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に殘すのは如何にも無念ぢや。

頼家　何、無念ぢやと……。さらば、如何なる祟を受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉　恐れながら早急には……。

頼家　むゝ、おのれ覺悟せい。

疳癖募りし頼家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや拔かんとす。奥より桂走り出づ。

桂　まあまあ、お待ち下さりませ。

頼家　えゝ、退け、退け。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は唯今獻上いたしまする。

なう父樣。

夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來してゐるか。

頼家　えゝおのれ、前後不揃の事を申し立てて予を欺かうでな。

桂　いえいえ、虚僞ではござりませぬ。面は、確に出來してをりまする。これ父樣、もう此の上は是非がござんすまい。

楓　ほんに然うぢや。昨夜漸く出來したといふ彼の面を寧そ獻上なされては……。

僧　それがよい、それが可い。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上樣に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う、早う。

楓　あいあい。

楓は細工場へ走り入りて木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂は受取りて、賴家の前に捧ぐ。賴家は無言にて少しく解けたる體なり。

桂　虛僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

賴家は假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあげる。

賴家　おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上樣御顏に生寫しぢや。

賴家　むゝ。

飽かず打ちまもる。

僧　さればこそいはぬ事か。それ程の物が出來してゐながら、とかう澁つてをられたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。

はゝゝ。

夜叉王形を改める。

夜叉　何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、斯う相成つては致し方もござりません。方々には其の面を何と御覽なされまする。

賴家　さすがは夜叉王、天晴のものぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉　天晴との御賞美は憚りながらお鑑識違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んでをりまする。

五郎　面が死んでをるとは……。

夜叉　年來數多打つたる面は、生けるが如しと人も言ひ、我も許してをりましたが、不思議や、此度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色なく、魂魄も無き死人の相……。それは世にあ

る人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼にはやはり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉　いやいや、どう見直しても生ある人ではござりません。しかも、眼に恨を宿し、何者をか呪ふが如き、怨靈(そんりやう)・怪異(あやかし)なんどの類……。

僧　あ、これこれ、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。あり難く御禮を申されい。

賴家　むゝ、とにもかくにも此の面は賴家の意に適うた。持歸るぞ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば……。

賴家　おゝ、所望ぢや。それ。

賴家は顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。賴家立つ。五郎

も立つ。桂、箱を捧げて庭におり立つ。

僧　やれやれ、これで愚僧も安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

賴家行きかゝりて物に躓く。

賴家　おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧進み出でて桂に燈籠を渡す。桂、假面の箱を僧に渡し、燈籠を持つて案内す。夜叉王はじつと思案の體。（綺堂戲曲全集）

藝術家は仕事を輕んじてはならぬ。何とかなるだらうではいけない。自分と藝術とに對し、誠ある人でなくてはならぬ。

（横山有策）

横山有策　英文學者　昭和四年歿、年四十八

丘淺次郎
理學博士　東京高等師範學校名譽教授
明治元年生

三三　科學・常識・迷信

丘　淺次郎

現今我が國で行はれてゐる言葉の中で「常識」といふ言葉ほど多數の人々に誤り用ひられてゐるものは無いやうに思はれる。この言葉の眞の意味は、「經驗に基づいた實際的の判斷力」といふ事である。斯く判斷力であるべきこの言葉を、我が國では多數の人々は、「この位のことは誰でも知つてゐなければならぬ筈の事」、卽ち「普通の知識」といふ意味に使つてゐる。判斷力であるべき所を知識といふ意味に用ひてゐる故、其所に大なる誤解が生ずる。常識と普通知識とでは、どちらにも「識」といふ字が附いてゐるので人々が混同するのであらうが、一は判斷力であり一は記憶してゐる知識であるから、頭の働き方は全く違ふ。よく學校などで、生徒の常識を試してみると言うて、「今の內務大臣は誰

か。」「東京市長は誰か。」「手紙は何グラムまで四錢で行くか。」「日本には師團が幾つあるか。」といふ類の問題を出すさうであるが、これ等は一として常識の問題ではない。これ等は悉く記憶の問題であつて、判斷力を働かせる點は少しもない。常識を試驗するつもりならば、全く別の種類の問題を出さねばならぬ。例へば、「汽車の通るべき鐵橋を徒步で渡ることは危險か否か。」とか、「ガソリンを取扱ひながら煙草を吸ふことは善いか惡いか。」とかいふ樣な問題を出すべき筈である。これならば判斷力を働かせて答を書かねばならぬ故、始めて常識の程度が知られる。「その位のことは大概常識で分りさうなものである。」といふときの常識は、一種の判斷力を指すのであつて、決して常々記憶してゐる知識のことではない。

常識が一種の判斷力である以上は、その判斷の標準となるべ

き法則がなければならぬ。是は各人が從來經驗した所や知り得た所を材料とし、是より歸納的に理を推して達した結論である。各個人が經驗し得る事や知り得る事は、無論決して非常に廣くはあり得ぬから、その限られた經驗や知識に基づいた常識なるものは、素より何時も完全無缺なものとは言はれず、屢誤る事もあり得べきは言ふ迄もない。又、一人一人の經驗や知識の多少によつて、常識に種々の階段のある事も當然である。

次に、科學とは何かといふに、單に常識のそのまゝ進んだものに過ぎぬ。正確な知識を得るためには、種々な器械を用ひる。例へば、眼で見えぬほどの遠い所にある物を見るには、望遠鏡を用ひる。小さい物を見るには、顯微鏡を用ひる。その他、物理學的、化學的のあらゆる裝置を用ひるが、頭の働かせ方は常識の場合と少しも違はぬ。即ち先づ知り、次に知つたことを材料とし

て歸納的に推理し、推理によつて達した結論なる法則を、一々の場合に當てて判斷するのである。常識と科學との差は單に精粗の差だけであつて、腦の働き方が根本から相違してゐる譯ではない。科學と常識とが相反する如くに見えることがあるが、是は常識に知識が足らぬか、科學が道を踏迷うたか、何れかである。

知識が足らねば常識が誤ることは當然である。例へば、野蠻人は自分の住んでゐる土地より外は知らず、その土地だけならば、平面である故、世界は平らかなものと思うてゐる。是は彼等の常識であつて、彼等としては無理もないことである。然るに、知識が進み、その範圍が廣がると、終には地球の丸いことが明かに知れて來るが、この階段まで達した以上は、地球が丸いと思ふのが常識となる。生物は進化し來つたものであるといふこと

も是と同然で、生物學上の知識の足らぬ間は誰も彼もが生物各種は永久に不變である如くに信じてゐた。是はその時代としては尤もなことであつた。即ちその時代に相當した常識であつたが、その後、生物學の研究が進み、生物學上の知識が增して、今では聊かでも生物學を知つてゐる人々は、生物の進化を信ぜざるを得ぬ樣になつた。即ち是を信ずることは、今日の常識である。斯樣な次第で、知識が增せば、それに基づいた判斷も變つて行く故、科學の進歩は何時も常識を進めることになる。恰も機關車が貨車を引摺つて行く如くに、科學が先へ立つて進んで行けば、一般の常識もそれに伴なつて進まざるを得ない。されば科學の普及は、世人の常識を進めるためにも非常に必要なことである。

所で、常識と反對なものは迷信である。迷信とは、その時代相

當の常識を以ては到底信ずることの出來ぬ樣なことを信ずるのをいふ。知識を光とすれば迷信は闇である。常識は科學の進歩に伴なつて進むべきもの故、科學を機關車に、常識を貨車に譬へたが、この機關車の前面には强い光の燈がつけてある。是が進めば闇はそれだけ退かざるを得ない。但し、そのためには、常々から判斷力を働かせることを努め、機會のある毎に自身の判斷力を練つて行かねばならぬ。單に物を覺え、諳記するだけでは、この方面の能力は發達せぬ。科學を通俗的にして廣く普及せしめることは、常識の基礎となるべき知識を豐富にし、時代相當な知識を一般に弘め、文明進歩の障害となるべき各種の迷信を驅除する方法として、今日の我が國にとつて何よりの急務であらう。（春の科學）

大山卯次郎
法學博士　前
桑港總領事
昭和十四年歿
年七十

フォード
（1863—）
アメリカの實業家　自動車王と稱せらる
本年
昭和五年

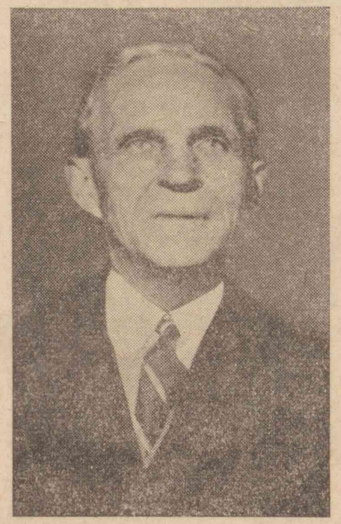
三四　フォード主義

大山卯次郎

現今の世界文明は、自動車工業の著しい發達の賜であるといつても決して過言ではないであらう。然も其の先驅をなすものは米國であつて、本年一月、同國各州政府に登錄せられた自動車現在數は、實に二千六百五十萬臺の多數に上り、大陸の人口約四人に對し一臺の割になつてゐる。又一九二八年の統計によれば、米國の同年の自動車製造高は約四百五十萬臺、此の價四十億弗の巨額に達し、世界の全製造高の八分の七を占めて、之に從事した勞働者の數約十八萬人、動力使用高五十萬馬力、勞働支拂高三億弗に上つてゐる。以て米國の自動車工業が如何に盛況にあるかを知るに足るのである。

一九三〇年の現在自動車數二千六百五十萬臺を以て、今より

二十五年前の一九〇六年の四萬八千臺に比べれば、實に今昔の感に堪へないが、一九一四年の百七十萬臺に比しては約二十三倍、一九二〇年の九百四十七萬臺に比しては約三倍、一九二八年の二千四百六十萬臺に比しては、約二百萬臺の增加を見るに至つたものであつて、其の進歩の速かなことは實に驚くべきものである。


フォード

何故に米國の自動車工業がかく急速に進歩したか。其の原因はもとより種々あるだらうが、要するに自動車の能率が現代の要求に最も適合することと、自動車を利用するに都合の善い條件がよく米國に備はつてゐることに在るのであつて、例へば

ミシガン州
アメリカ合衆國の一州名
ミシガン湖に面す
デトロイト
セントクレア湖畔に位する州中の大都會
エーカー
又エークルとも
第一九課參照

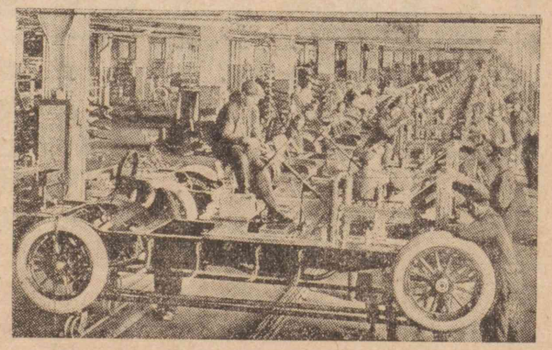
其の輸送力が迅速にしてかつ豐富な事、土地の廣大な米國の國情がかゝる輸送並びに交通機關を必要とする事、製造業者が極めて安價に之を市場に提供すべく成功した事、及びガソリンの供給が豐富かつ低廉なため、運轉に多額の費用を要しない事等は、蓋し其の重なるものであると認められてゐる。

次に自動車製造の中心地はミシガン州デトロイトであつて、米國に於ける自動車の約七割は同地に於て製造せられ、米國の有名な自動車會社は殆どこゝに集つてゐる。フォード會社も亦其の一であるが、同會社の規模は實に雄大なものであつて、其の敷地は千六百五十六エーカーに及び、之に幾多の壯大な建物が並列し、それが車輪工場・車軸工場・螺旋工場・車體工場・ハンドル工場等幾多の專門部に分たれ、その各〻が孰れも立派な獨立の工場になつてゐる。蓋しフォード會社の特色は、第一に作業が非

常によく分業化せられ、然も、その協力が最も完全に行はれてゐる事であつて、最後の組立作業の如きは、その最も目醒ましいものである。

第二に職工を優遇する事であつて、この點に於てフォード氏は實に米國工業界の模範を以て目せられてゐる。

卽ち一九一四年に、フォード氏は、他の資本家が未だ勞働者優遇の問題に氣附かなかつた際、率先して一日八時間勞働賃銀五弗制を發表して大いに世人を驚かし、更に一九二六年に至り、一週五日勞働の例を開き、然も賃銀は從來の六日分を支給したが、かゝる大膽な方法は、從來他の工場主等の考へ及ばなかつた



自動車工場内部

ところで、彼等にとつては實に晴天の霹靂であつたのである。然もフォード氏は飽くまでも高い賃銀・能率增進・大量生産・賣價の低廉をその目標とし、これに向つて最も勇敢に猛進した。

右につきフォード氏の意見として傳へられる所に依れば、「職工に對し其の給與を豊かにすることに依り、其の作業を奬勵することは、其の能率を增進する最善の方法である。收入が豊富で時間に餘裕を生ずる時は、それが直ちに彼等の消費を刺戟し、購買力となつて現れる。故に事業を最も賢明に支配する方法は、勞働者に高率の給料を與へる事に依り、其の能率を增進せしめるにある。斯くすれば生産費は減少し、物價は下落し、勞働者に人生を樂しましめ、彼等に時間と資本とを得しめる事が出來る。」と言つてゐる。以てフォード氏が如何に進歩的頭腦の人であるかを知るに足るのである。

フォード氏は斯くして職工を信じ、職工はフォード氏を信じ、其の結果勞資の協調が極めて圓滑に行はれ、工場の能率が百パーセントの成績を擧げてゐるのであるが、然も是に依つて利益を受ける者は、獨りフォード氏と其の職工のみではない。現にフォード氏が新政策を採用して以來、米國工業界の受けた刺戟は甚大なものであつて、工場主等は之に依つて新しい教訓を受け、勞資の利害の共通する事を覺り、所謂フォード主義なるものが全國を風靡し、米國勞働界を稗益したことは實に計り知るべからざるものがある。況や同氏の大量生産の成功は、一般人をして自動車の使用を容易ならしめ、其の社會的活動と生活の向上とを助ける事に於て甚大な效果のあつた事は世人の等しく認める所であつて、世界が擧げて同氏の手腕を賞し、其の德を稱へるのは誠に所以ありと云ふべきである。（世界現狀大觀）

藤原銀次郎
實業家　貴族院議員　明治二年生

三五　國民的特性

藤原銀次郎

どういふ譯で日本の產業が僅々七十年ばかりの間に躍進的發達を遂げたのか、その原因は何處にあるか。これが今日世界の大問題になつて、新聞・雜誌等にも論議されてゐるやうでありますが、私の見る所によりますと、その第一の原因は、日本人の精神的鍛錬、技術の優秀であり、次は日本人の勤勉・努力、生活樣式の簡便、組織・經營の巧妙等であります。

一體我々は、古來何事に限らず、精神的に物を考へ、精神的に努力奮勵する特質を持つてをります。歐米人・支那人などは、一般に物質的・打算的に物を考へます。我々日本人も、勿論物質的・打算的にも考へますが、それ以上に精神的に考へるといふ特質を持つてゐます。この特質が現れて武士道となつたのであると

思ひます。武士道といふものは、ごく簡單にいふならば、物質的・打算的でなく、精神的に總べてのものを考へ努力するといふ一つの特色が、武術の上に現れたものであらうと思ひます。この特色は獨り武人のみならず、日本國民の特質であるから、同じ考が商工業その他總べての方面に常に現れてゐるのであります。今それについて、實例を擧げて說明して見ませう。

先年、一分間に一千尺も漉ける紙漉機械を英吉利に註文しました。その機械は長さが六十間で、幅も百四十二吋の紙が漉けるのでありますから、相當廣いもので、しかもその六十間といふ長い間に、もし一分一厘でも狂ひがあつて、彼方が廣かつたり此方が狹かつたり、或は高低があつたりすると、一分間一千尺の紙が出て來ないといふ、確に据附の難しい機械であります。この機械を造つた英吉利の會社では、これは英吉利でも最新式の機

正宗　岡崎正宗　名は五郎　初代行光の子　鎌倉時代の刀工　興國五年（二〇〇四）歿、年八十一

械であるから、日本人にこの据附は任せられない、英吉利の技師を一人と職工を四五人やるから、どうぞ旅費を支拂つて貰ひたい。」といつて來ました。私もそれを承知するつもりで工場の方へ相談しました。すると工場では、「日本人の名譽のために是非我々日本人の手で据附けさせて貰ひたい。確に出來るから。」といふので、私はその事を英吉利へ申し送つてその申出を斷ると、また向ふから折返して、「さうでもあらうけれど、今度に限つて是非英吉利人にやらせて貰ひたい。」といふのです。ところが工場の方では、「我々は日本人だ。命にかけてもやるからどうしても自分達にやらせて貰ひたい。」といふ。

そこで私は、「命にかけてやるといふならやらせよう。」その代り、私にも註文がある。それは、正宗が刀を鍛へた時のやうな精神を以て、齋戒沐浴して精進しなければならぬ。酒を飲んだり、

遊び事にふけつたりすることは、この機械の据附の濟むまでは斷じて相成らぬ。本當に正宗の心持になつてやれ。」といつて、英吉利の方へはきつぱり斷りの電報を打ちました。すると、其の据附の終る四五日前になつて、英吉利から技師が一人、職工長が二人、突然私の所へやつて來て、「貴方は英吉利から人を寄越す必要はないと電報でいつて來たが、我々はどう考へても日本人にあの機械の据附が出來ようとは思はれぬ。もし日本人が不完全な据附をして、その爲に千尺の紙が出ない場合には、『英吉利の製作者が悪いのだ。こんな機械を寄越すから巧く行かないのだ。』と、製作者を責めることにもなるから、兎も角あの機械の据附を終る前に、一度、見に行かうぢやないかというて來たのだ。」といふのです。で私は、「御好意はまことに辱い。それでは一應工場へ行つて見て貰ひたい。」といつて案内させました。

間もなく工場から其の英吉利人が歸つて來て、いきなり私の手を握り、「安心だ、非常に安心だ。」といふ。「何が安心か。」と聞くと、「行つて見たところが、貴方の工場の据附は完全無缺だ。我々がここが難しいと思ふやうな所は、すつかり直してある。レヴェルを見ると、望遠鏡で皆やつてゐるから、一分一厘も違ひはない。普通は眼鏡を以てやるけれども、本當の測量器械でレヴェルをちやんと合はせてゐる。英吉利の職人がやつても、あれ以上は出來ない。恐らく英吉利人以上にやつてゐる。最早試運轉など見る必要はないから、自分達はこの船で歸る。船の上で試運轉の結果が良好だつたといふ電信を貰へばそれで宜しい。」と、さういつて非常に喜んでをりました。晩餐會の席上でも色々話をしてみると、その英人が歎息して「どうもこの調子では、あの機械を再び日本は買つて呉れないだらう。こんな機械は直ぐ日

本で出來るやうになるだらうから。」と申してをりました。

工場の者に、英吉利人のいつたことを話すと、非常に喜んで、實際我々は命がけだつた。若しあれが巧く行かなかつたら腹を切つて死ぬ覺悟で、本當に正宗の刀鍛冶が刀を鍛へる時の心持でやりました。」と述懷しました。

このやうに、日本人は今日でもいざとなれば、この魂を發揮して事に當るのであります。

凡そ政治上の問題でも、法律上の問題でも、一般社會上の問題でも、古人はこれこれであつたが、現代人は打算的であり輕薄であり、上辷りがしていけないと、とかく誰も現代を非難して、昔の人を褒めがちなものであります。私は決してそれを否定する譯ではありませんが、しかし、甚だしく現代を非難して昔の人ばかりを褒める必要はありません。現代人はいふ迄もなく昔の

人の子孫であつて、その祖先の血は何百年間訓練に訓練を重ねて、現在我々の體内に傳統的に脈搏つてゐるのであります。この日本人であればこそ、僅か五十年か六十年の短い間に歐羅巴文明を咀嚼して、その工業なら工業を一たび移し來れば、技術者も職工も、今まで述べた如き日本人特有の精神を發揮して、これを習得し研究し改善しました。これが今日世界の人の驚くやうな大進歩を遂げた第一の原因であると思ふのであります。即ち、祖先傳來の誇るべき特質は、陸海軍の軍人のみならず、工業なり商業なり、或は運輸交通なりに從ふ總べての日本人に多かれ少かれ傳はつて、茲に至つたと思ふのであります。

（工業日本精神）

北畠親房
足利尊氏の叛するや吉野朝を擁護し、子顯家・顯信・顯能と共に奔走す　正平九年（二〇一四）歿年六十三

前車の轍
晏子春秋ニ「諺ニ曰ク、前車ノ覆ルハ後車ノ戒ナリ」

鳥羽院
第七十四代鳥羽天皇　御在位（一七六七―一七八三）

三六　人臣の道

北畠親房

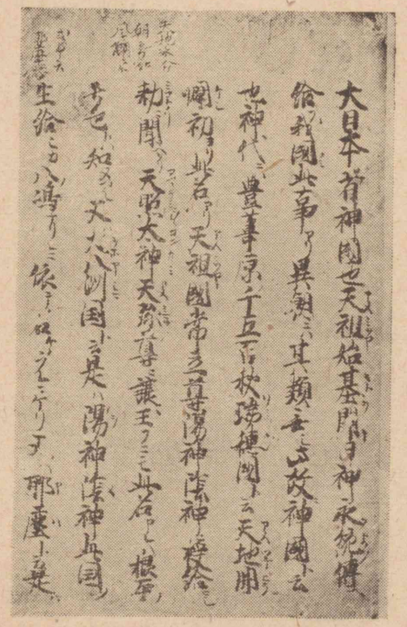
凡そ王土にうまれて、忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵まし、其の跡を愍びて賞せらるるは、君の御政なり。下として、競ひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功無くして過分の望を致すこと、自ら危むる端なれど、前車の轍を見ることは誡にあり難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪强なるをば戒められき。豪强になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふ例あれば、戒めらるるも理なり。

鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべしといふ制符、たびたびありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて諸國の兵を召具しける

保元元年（一八一六）崩御、寶算五十四

言語は云々
易經、繫辭傳に「言行ハ君子ノ樞機ナリ」

に、近代となりて、やがてかたらはるる族多くなりしによりて、此の制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、云ひがひなき事になりにけり。



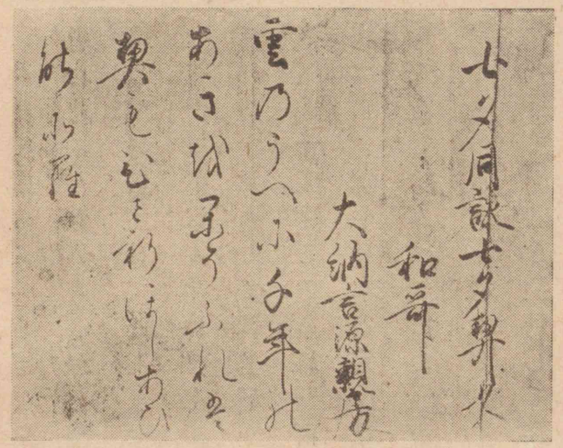
古本神皇正統記

此の頃の諺には、一たび軍に驅合ひ、或は家の子・郎從、節に死ぬる類もあれば、「わが功におきては日本國を賜へ。」若しは「半國を賜はりても足るべからず。」などぞ申すめる。まことにさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るる端ともなり、又朝威の輕しさもおし量らるるものなり。「言語は君子の樞機なり。」と云

堅き氷は云々
易經、坤卦に「霜ヲ履ンデ堅氷至ル」

親房筆蹟
七夕同詠七夕契久　和歌
大納言源親房
雲のうへに千年のあきをかぞふれば契もひさしほしあひのそら
許由・巢父
共に堯の代の隱者
堯
支那上古の天子
潁川
支那河南省にあり

へり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣・賊子といふものは、その初め、心・言葉を慎まざるより出で來るなり。



親房筆蹟

世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらじ。人の心の惡しくなり行くを、末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、此の水をだにきたながりて渡らず。その人の五臟・六腑の變るにはあら

將門　平將門　桓武天皇の皇子葛原親王の玄孫天慶元年（一五九八）叛し、同三年誅に伏す

高祖　秦を亡し漢朝を建つ　在位十二年（皇紀四五五—四六六）

蕭何　主として軍糧を司る　後故ありて獄に下さる

韓信　高祖に從ひて秦を亡し、齊王に封ぜらる　高祖の十一年殺さる

鄒を云々　史記、高祖本紀に「夫運籌帷幄之中一決ニ勝於千里之外一吾不レ如ニ子房一」

泰衡　陸奥の藤原氏第四代の主　文治五年（一八四九）頼朝に討たれて歿す、年三十五

平重忠　畠山重忠　源頼朝の重臣

五十四郡　陸奥五十四郡

じ。能く思ひ習はせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心、思ひやるこそ淺ましけれ。大方己一身は恩に誇るとも、萬人の怨を殘すべき事をば、などか顧みざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に分たせ給はん事は、推して測り奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆塞がりなん。一郡づつと云ふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は喜ぶとも、千萬人の人は喜ばじ。況や日本の半ばを志し、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、詞にも出で、面に恥づる色のなきを謀叛の初と云ふべきなり。昔の將門は、比叡山に登りて、大内を遠見して謀叛を思ひ企てけるも、かゝる類にや侍りけん。昔は人の心正しくて、自ら將門に見も懲り聞きも懲り侍りけん。今は人々の心かくのみなりにたれば、この世はよ

く衰へぬるにや。

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何・張良・韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人にすぐれたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、「籌を帷幄の中にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するはこの人なり。」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる處を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討ちしに、自らむかふ事ありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたる少しき處を望みて賜はりけるとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめんが爲にや。賢かりけるをのこにこそ。又直實といひける者に一處を與へ給ふ下文に「日本第一の甲の者なり。」と

長岡　今の宮城縣遠田郡田尻・富永・中埣諸村の地に當るが如し

直實　熊谷氏　源頼朝の臣　後、出家し蓮生坊と稱す　承元二年（一八六八）寂

神皇正統記　六卷　親房の著　神代より後村上天皇までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を陳べたり

書きて賜はりけり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美の詞の甚だしきに、與へたる處の少き、誠に名を重くして利を輕くしける、いみじき事と口々に褒め合へりけり。いかに心得てほめけんといとをかし。

これまでの心こそなからめ、事に觸れて君を落し奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家の古き姿もなし。いかになりぬる世にかと歎き侍る輩もありと聞えしかど、中一年ばかりは、誠に一統のしるし覺えて、天の下擧り集りて、都の中はえばえしくこそ侍りけれ。

（神皇正統記）

和辻哲郎　哲學者　文學博士　東京帝國大學教授　明治二十二年生

モンスーン　季節風

地中海　ヨーロッパの南岸とアフリカの北岸との間に挾まれる海

三七　風土と國民性

和辻哲郎

東洋と西洋との土地としての相違を最も顯著に感ぜしめるものは、「濕氣」である。モンスーンの影響を受ける印度・支那・日本にあつては、暑熱の候が雨季であつて、あらゆる植物が水と日光とに惠まれつゝ旺盛に發育する。雨量は大體に於てヨーロッパの三四倍乃至六七倍であり、空氣中の濕氣も遙かに多い。冬を雨季とするヨーロッパは、雨量が少い上に、その雨によつても空氣中の濕氣をさほど多量ならしめない。夏の乾燥期は、地中海沿岸に於ては綠草を枯らすほどであるが、しかしそのために根强い雜草を繁茂させず、やがて十月の雨と共に、柔かい弱い牧草の成育を可能にする。

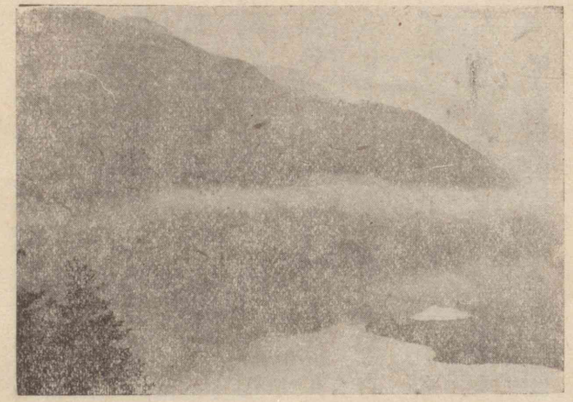
このやうな濕氣と日光との關係が、自然の風貌を著しく異な

雨の保津川

つたものにする。濕潤な東洋に於ては、日光と水とが豐富に植物を惠むと共に、又同じ原因によつて暴風や大雨や洪水などが植物を迫害する。だから、濕潤な東洋の植物は、旺盛に成育してゐると共に、また荒びひねくれ雜然として立つ。日本の風景が優美であると云はれるのは、變化に富んだ小規模の起伏や、鮮かな色彩や、大氣の濃淡などによるのであつて、植物の形が溫順であるからではない。植物の形にのみ着目して云へば、それはむしろ荒々しい亂れた風景である。それに反して、ヨーロッパでは、日本の如き根强い雜草がはびこらず、從つて柔かい牧草が穩かに大地を包み、樹木は風の苦勞を知らない姿で立つてゐる。それは實に溫順な感じである。人がこゝから秩序正しさを感ずるのは、いかにも自然なことであらう。

濕氣はまた大氣の感じを著しく異なつたものにする。日本

に於て、我々が日常に觸れてゐる朝霧・夕靄、或は春霞などの變化に富んだ大氣の濃淡は、一方では季節や時刻の感じ、或は長閑さや爽やかさの氣分といふ如きものとして、他方では風景自身の濃淡の面白さとして、非常に重大な役目をつとめてゐる。然し、濕氣の乏しいヨーロッパの大氣は、單調な靄或は霧を作り出しはしても、それによつて我々の氣分に細かい濃淡を與へるほどの變化には富んでゐない。北歐の特徴である單調に陰鬱な曇り日、南歐の特徴である單調に晴朗な晴天、――この單調さが確にヨーロッ



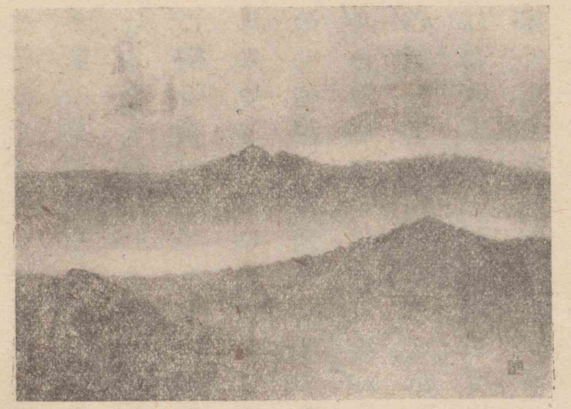
朝霧

パの特徴であると云へよう。

これはまた氣溫の變化とも密接に關係する。寒暖計はヨーロッパの一日にも氣溫の高低のあることを示してはゐるが、しかしそれはたゞ物理的な事實であつて、我々の氣分の上には決して顯著でない。濕氣と溫度との相關關係から起るあのさまざまな現象——例へば夏の夕方の涼しさ、朝の爽やかさ、秋には晝の暖かさと日暮れ時の肌寒さとの間に氣分を全然變化させるほどの烈しい變化があり、冬でさへも肌をしめるやうな朝の冷たさの後には小春日の暖かさが來る——さういふ變化に富んだ現象を、我々はヨーロッパに於て經驗することが出來ない。

かういふ氣候の特性は、人が自ら自覺してゐる以上に、我々の體驗の深みにからみ合つてゐるものである。植物でさへも顯著にそれを示してゐる。日本に於て我々が見る新緑は、春をま

ちかねた心が、鮮かな新芽の色を心ゆくばかり見まもる暇もない程迅速に、伸び育ち色を増す。柳が芽をふいたと氣づいてからそれが青々と繁り出すまでは、實にあわたゞしいと思ふほど早い。然るにヨーロッパの新緑は、ちやうど時計の針を見まもるやうな感じを與へる。新芽は育つてゐるに相違ないし、一月經てばかなり變りもするが、決して我々の胸を打つやうな變化を示さない。紅葉もまたさうである。八月にはもう黄ばんだ葉がからからと音をさせてゐる。しかし艶のない黑ずんだ緑は、相變らず



霞（横山大觀筆）

陰鬱に立つてゐる。さうして何時變るともなく綠の色が徐々に褪せて、弱々しい黃色に變つて行く。十月下旬にあらゆる落葉樹の葉が黃色になるまでの間、曾て我々の目を見はらせるといふことがない、夜の間の氣溫の激變で初霜が下り、一夜の間に樹の葉が色づくといふやうなあの鮮かな變化は決して見られない。植物に於けるこのやうな氣候との關聯は、移して我々の心の姿とも云ひ得るであらう。我々はヨーロッパ人の中に身を置いた時、我々自身がいかに甚だしく氣分の細かな變化を必要とする人間であるかに驚かざるを得なかつた。單調に慣れたヨーロッパ人は、丁度樹の芽が落着いてゐると同じやうに落着いてゐる。ヨーロッパ人のうちで最も興奮性に富むと云はれるイタリア人ですら、その言葉の抑揚や身振りが變化性に富んでゐるほどには、決して氣分の細かな變化を求めない。も

とよりこの落着は、偉い禪僧が持つてゐるやうな、根深い人格的な落着ではない。たゞ氣分の單調に慣れてゐるといふだけの、謂はば氣分の持續性である。それに比して我々は、夏の日に蟬の聲を聞かず、秋になつても蟲の音を聞かぬといふやうなことにさへ著しく淋しさを感ずるほどに、日常生活に樣々の濃淡陰影を必要とする。ヨーロッパの近代文明を實に忠實に移植してゐる日本人が、衣食住に於ては結局充分な歐化をなし得ず、着物や米飯や疊に依然として執着してゐるといふことは、それが季節や朝夕に應じて、最も好く氣分の變化を現し得るといふ理由に基づくのではないであらうか。

氣候の特性は、たゞに氣分のみならず、また實用的な意味に於ても人間の生活を規定する。最も著しい例について云へば、ヨーロッパの農業は雜草との戰を必要とせず、暴風・洪水の憂少く、

季節の迅速な移り變りにせき立てられることもない、甚だ悠長なものである。濕氣の關係からうねを作る必要もなく、一面にバラ蒔いた麥は、黃熟してからでも靜かに一月位は立つてゐてくれる。七月の終に悠々と麥刈をやつてゐる農人は、九月の初にもまだ悠々としてそれを續けてゐる。それに比べれば、旬日の間に麥を刈つて田を植ゑ、しばらく經つと炎天の水田に田の草を取り、その息をつく間もなく颱風や豪雨の如き、人力の如何とも爲し難い自然の威力の前に心を惱ますといふ日本の農人の勞働は、その忙しさと烈しさとに於て、到底同日の論でないばかりでなく、自然と交渉する態度に於ても、自ら異ならざるを得ないであらう。單調にして溫順な自然の中に生を享けてゐるヨーロッパ人が、土地の隅々をまで人工的に支配し、またその支配を容易ならしめるために熱心に機械を考へるに對して、支配

とか征服とかを人間に望ませないほど暴威に富んだ自然から、豐かな產物を作り出さうとする東洋人は、人工的な手段を考へるよりもむしろ自然自身の自らなる力を巧みに捕へ動かさうとしてゐる。かゝることが、やがて著しく合理的な技術と、だゞ「こつ」を呑込む事によつて得られるやうな技術との相違となつて現れるのでもあらう。（風　土）

實業學校

國文新選 新制版 卷三 終

不許複製

垣内
西尾

昭和十二年七月二十一日印刷
昭和十二年七月二十四日發行
昭和十二年二月十日訂正再版印刷
昭和十三年一月十日訂正再版發行
昭和十六年八月十五日訂正三版印刷
昭和十六年八月十日訂正三版發行

著作者 垣内松三
西尾實

發行兼印刷者 東京市神田區淡路町十八番地 株式會社 文學社
代表者 小林竹雄

發兌 東京市神田區淡路町十八番地 株式會社 文學社
電話神田 四二五七番
振替東京三八七八番

關西販賣所 大阪市西區阿波座通二丁目二十八番地 株式會社 盛文館
電話土佐堀一五二三番
振替大阪七四三番

實業學校 國文新選 新制版

卷一 定價 壹圓
卷二 定價 金八十錢
卷三 定價 金九十錢
卷四 定價 金八十錢
卷五 定價 金八十錢

佐賀県立工業学校機械科
佐賀県出身 福本好雄

二月三日

広島大学図書
2000067986